

327
216

日本水産捕採誌

第三

農商務省水産局

027-216

日本水産捕探誌

第三

目次

第四節 敷網類	二八九
第十三 棒受網	二八九
一 房總地方に於ける棒受網	二八九
二 土佐地方に於ける謀計網	二九一
三 豊後地方に於ける鯧張揚網	二九三
第十四 四手網	二九五
第十五 棚網	二九八
第五節 刺網類	二九九
第一 罾底刺網	三〇一
第二 鰯網	三〇三
第三 鮪網	三〇七
目次	一

明治
44. 5. 19
圖書

目次

一 肥後地方に於ける鱒網……………三〇七

二 安房地方に於ける鱒網……………三〇九

第四 鮪流網……………三二〇

第五 温流網……………三二一

第六 鯛刺網……………三二二

第七 飛魚流網……………三二四

第八 蛙刺網……………三二五

第九 鱈刺網……………三二六

第十 鮪楯漁……………三二七

第十一 鯉網……………三三一

第十二 鰯刺網……………三三二

第十三 蝦網……………三三三

第十四 鱒網……………三三五

第十五 鰈刺網……………三三六

第十六 鰻刺網……………三三八

第十七 叩網……………三三八

第十八 鱧網……………三三九

第十九 反撥網……………三三〇

第二十 鮑刺網……………三三一

第二十一 珊瑚探採網……………三三四

第六節 建網類……………三三六

第一 鮪大網……………三四〇

第二 鱧建網……………三四六

第三 根拵網……………三五〇

第四 鱈建網……………三五六

第五 坪網……………三五八

第六 袋坪網……………三六一

第七 楯網……………三六三

第八 瓢網……………三六七

第九 烏賊曲網……………三七〇

第十 鯉張揚網……………三七一

第十一 落し網……………三七四

第十二 建干網……………三七七

一 上總國君津郡地方に於ける建干網……………三七七

二 豊後國東國東郡岐部村に於ける建干網……………三七八

第十三 建網……………三七九

第十四 江張網……………三八〇

第十五 袋網……………三八二

第十六 網笠……………三八三

一 サカドツ……………三八三

第十七 網代漁……………三八五

第七節 掩網類……………三八六

第一 打網……………三八七

一 鰯打網……………三九一

二 鯉打網……………三九三

三 鮎打網……………三九四

四 ハダラ打網……………三九五

第二 卸網……………三九六

第三 流し網……………三九八

第四 提燈網……………四〇〇

第八節 抄網類……………四〇三

第一 搦網……………四〇五

一 鰻抄網……………四〇五

二 豊後國南海郡郡に於ける鰻抄網……………四〇六

三 仔鱒抄網……………四〇七

四 玉筋魚抄網……………四〇八

- 五 鯨鯨網.....四〇八
- 六 鮎抄網.....四〇九
- 七 紀伊國有田郡に於ける鮎抄網.....四一〇
- 八 紅蟲捕.....四一一
- 第二 繩網.....四一二
- 一 白魚網.....四一四
 - 甲 備前地方に於ける白魚網.....四一五
 - 乙 豊後地方に於ける白魚網.....四一五
- 二 公魚網.....四一六
- 三 鰕抄網.....四一六
 - 甲 下總國利根川沿岸の鰕漁.....四一七
 - 乙 陸前地方に於ける鰕抄網.....四一八
 - 丙 北海道渡島地方に於ける鰕抄網.....四一八
- 四 手押網.....四一九

目次終

- 五 方流網.....四二一
- 六 羽根川網.....四二二
- 七 鯨網.....四二三

第十三 捧受網

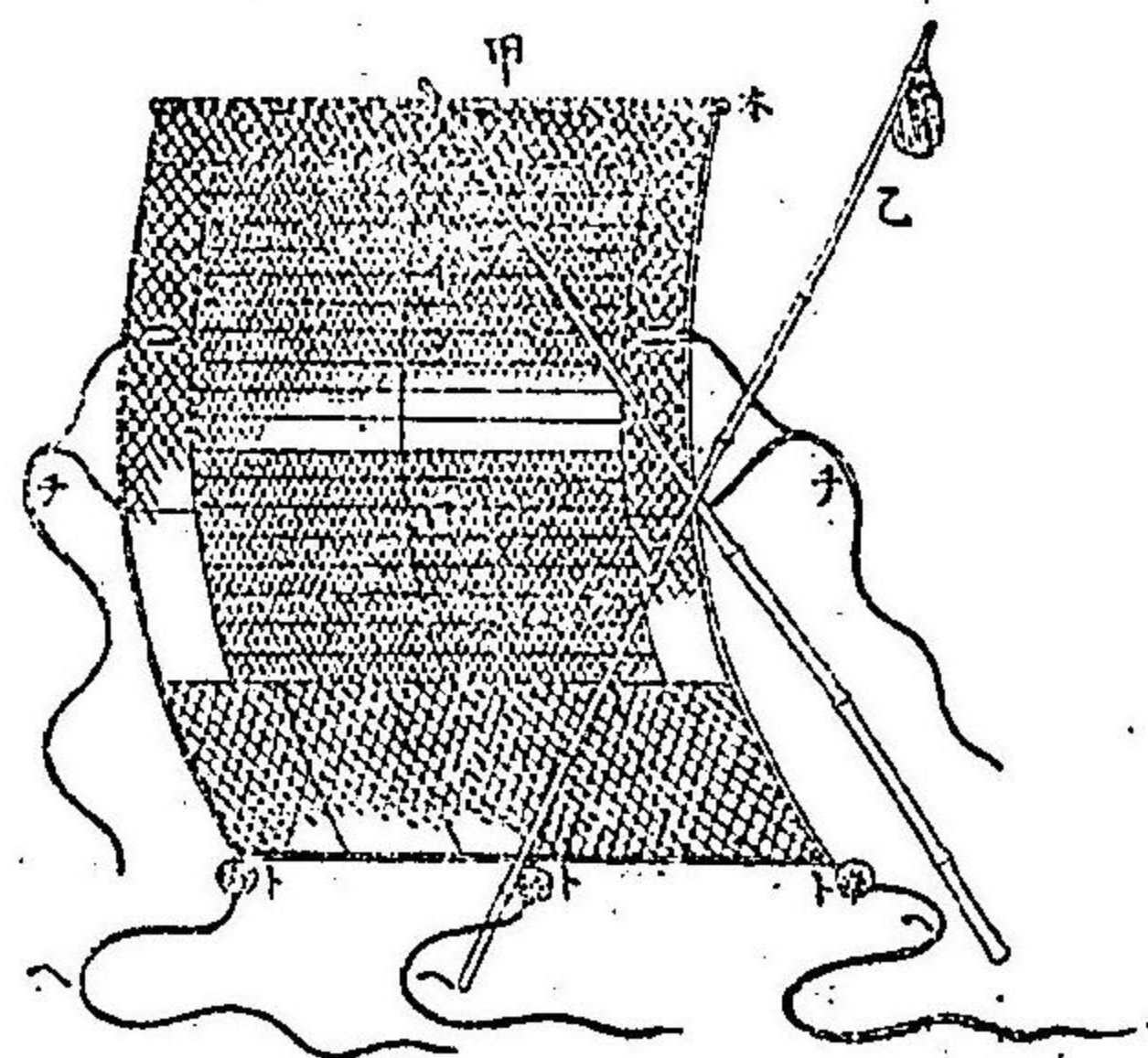
ボウケ網は鯧其他を漁する網にして地方により「ボケ」網とも稱す。千葉縣漁業圖解には「ボウケ」とは蓋し捧受の轉訛せしなりと云へり然れども亦謀計網の字を用ふる地あり今日普通捧受の字を用ゆ

一 房總地方に於ける捧受網

安房上總地方に用ふる捧受網は主として鯉釣の餌料に供すべき鯧を捕り傍ら鱈小鯉等をも捕獲す漁場は海岸を距ること十町内外にして漁期は概ね陰曆五月頃より九月頃までとす

網の構造は魚捕は(イ)(ロ)の二部となし網地五尺を一間とし五間を一枚とせしもの十八枚づゝ上下三十六枚を合せ網目は(イ)部は五寸に二十五節のものを(ロ)部は(イ)部よりも少しく目を濶くす(ハ)部は廣目と稱し五寸に八節の網にして三間を一枚とし之を五枚継ぎ魚捕の下に附く以上凡て豎目に用ふ三方の周縁は方言「アチ」(ニ)と稱し一寸目位の藁網にして網の四方には麻製の縁繩を附く網の上縁には

網受捧 四二十九第



網 甲

長さ五間餘周圍七寸許りの竹を横ふ之れを
浮竹又向ふ竹(ホ)とも云ふ捧受竹は一に張出
し竿と云ふ長さ凡七間周圍六寸許にして之
を浮竹の中央に結び付く此竹は土地により
左右の端に二本を附くるものあり沈子は又
前石(ト)と稱し青石若くは他の堅質なる圓形
の石へ孔を穿ち繩を貫きて網裾の中央及び
左右端へ一個づつを括り附く重量各九百匁
許りとす中手繩(チ)は棕櫚製長六間餘足繩(コ)
は葉製長六七間とす又副漁具あり方言「サシ」

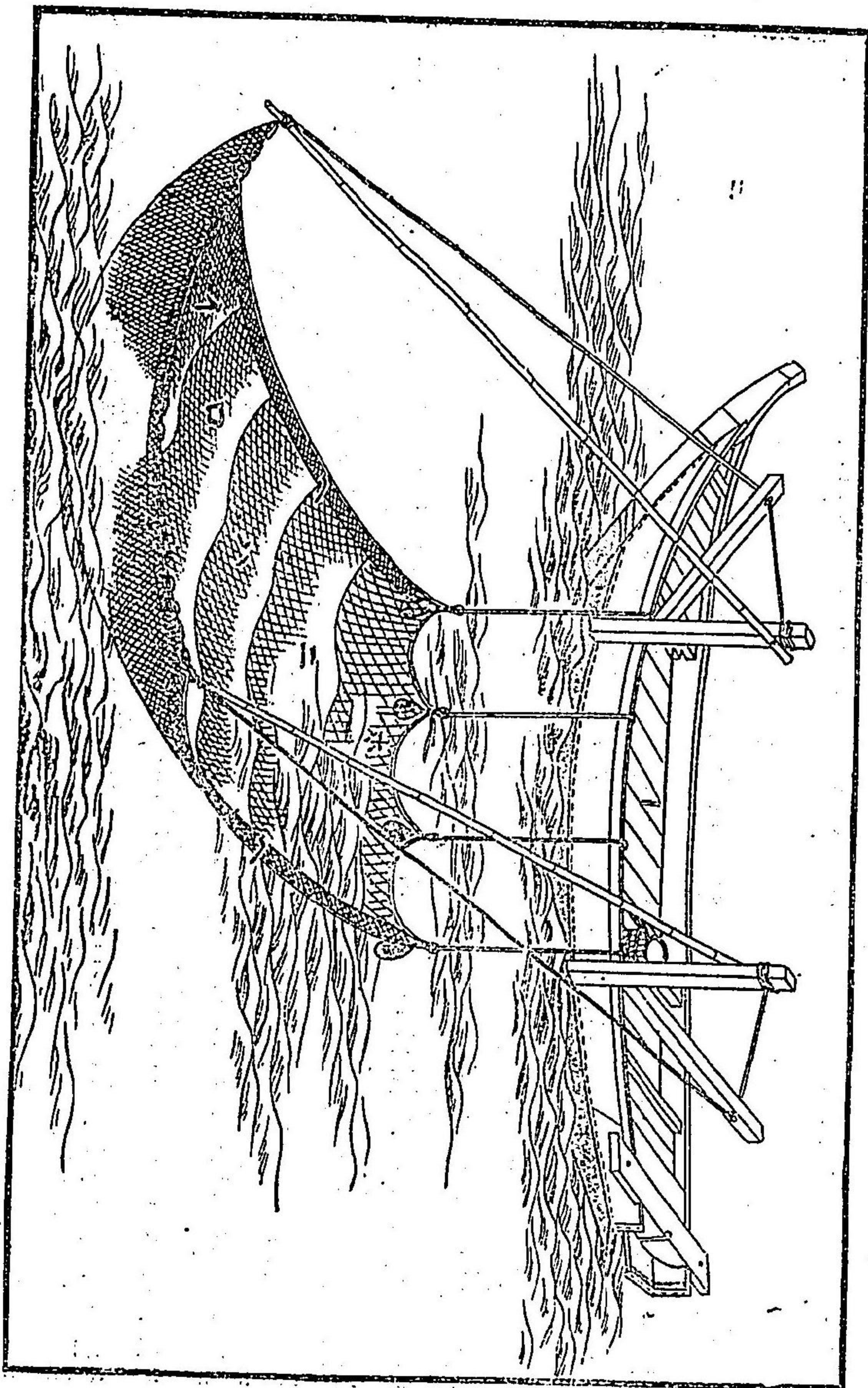
(乙)と云ふ眞鍮若くは銅線にて徑七八寸位の輪を造り之に古網等にて小さき囊を
作り附け竹竿の頭に括る其竿は周圍三寸位長さは漁場の深淺に由て一定ならざ
れども大抵二間半位とす

漁法は網の大小魚の種類によりて小差あれども大抵船一艘に漁夫五六人乗組み

漁場に至り潮流を測り錨を卸し船を停め其右舷を潮下に向けて横へ左舷より潮
上の方へ網を張り下し捧受竹にて突出し前石を沈め足繩を船に繋ぐときは網は
水中に於て恰も帆を満張したる状をなす爰に於て「サシ」の囊に「コマセ」と稱する糠
蝦の類の餌料を盛りたるを左舷より水中一尋以上の深さに差入れ上下に動かし
て餌を撒布し以て魚を誘ふ餌は潮流に従つて流れ下り魚は餌を覓めて潮流に溯
り其の群の將に網裾に近くを窺ひ「サシ」を網の中央に向けて二三度急に動揺すれ
ば餌の多くは此時網中に散亂するを以て魚群進て網中に集まる之を機として急
に足繩を引き手繩を繰り捧受竹を引き寄せ網を舉げ捕獲するなり此漁法に於て
最要訣とする所は捧受竹を浮竹に附するに其中央に結ぶを法とすれども眞の正
中よりは少しく舳の方に偏せしむるに在り然せざれば實際使用に不便にして且
魚を獲るに多少脱逸せしむるを免れざるを以てなり

二 土佐地方に於ける謀計網

土佐地方に於ける謀計網は専ら「ムロ」を捕ふるものにして秋冬の交日出前若くは
日暮の頃に使用す

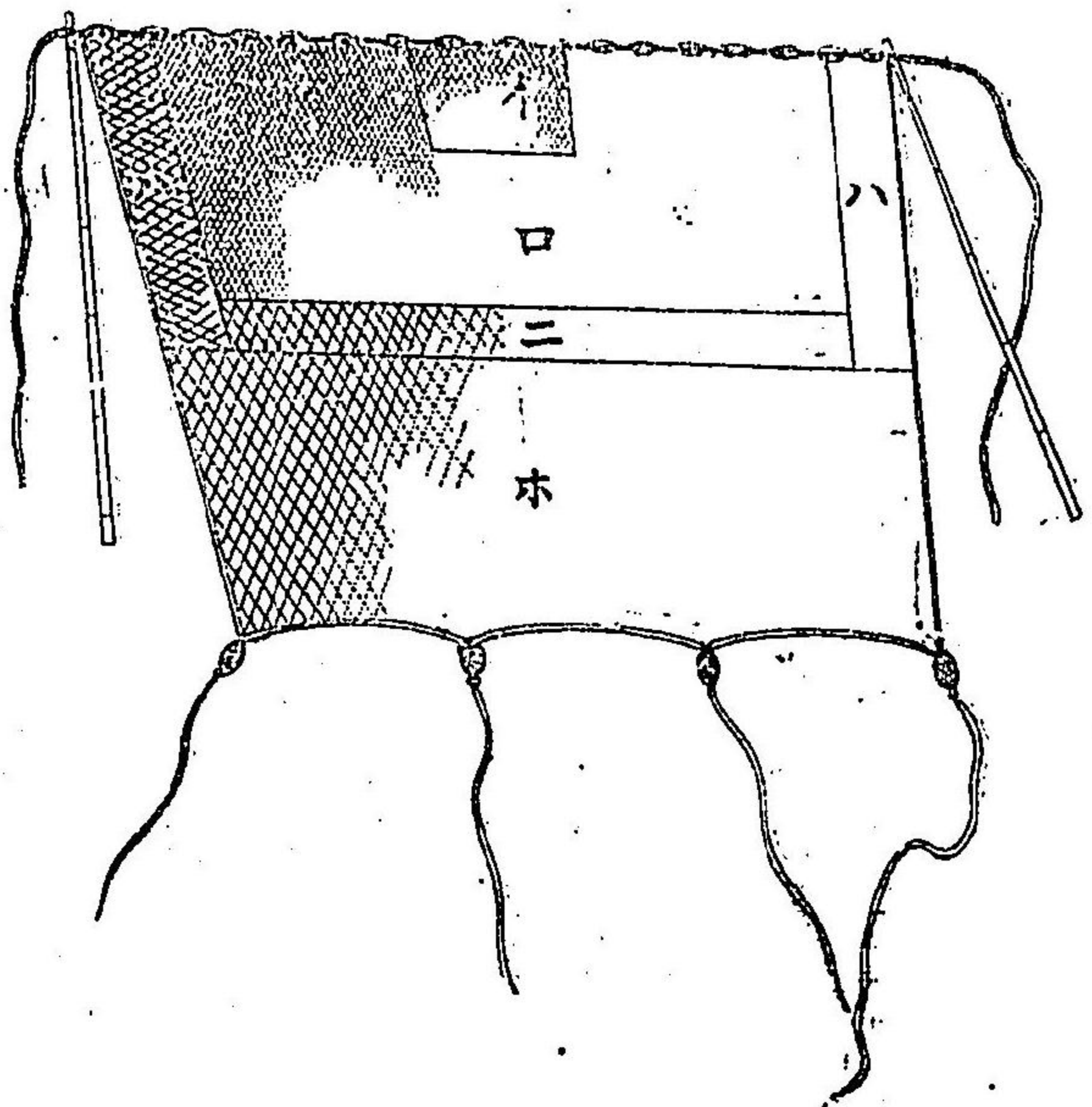


網の構造は第九十三圖中(イ)の部は五寸間二十二節丈け三丈長さ十四丈(ロ)は十五節丈け二丈長十五丈(ハ)は十一節丈け三丈長十四丈五尺(ニ)は九節丈け二丈長十三丈(ホ)は六節丈け三丈長十二丈(ヘ)は凡て九節を用ふ(イ)の網端長十四丈あるを肩繩九丈に縫縮め之に浮子を附く浮子は長さ八寸幅三寸厚さ二寸其距離二寸間とす(ハ)の總丈は十三丈あるを六丈五尺の縁繩に縫縮む網口を足繩に縫縮むること肩繩に同じくし之れより長さ四丈づゝの手繩四筋を出し附け元に重量二貫五百匁の鉛一個づゝを附け錘となし繩の末端は船に取る又網肩の兩端に長さ四丈五尺づゝの竹と別に曳網とを附け之を船に取ること第九十三圖の如くす
漁法は右の如く網を装置せる船に漁夫十四五人乗にて網を海中に敷き下し船中豫め「ムロ」を釜に入れ煮立たる上「春」き碎き握りて團となしたるものを備へ之を網中に投ずれば魚は餌を覓めて網中に集まるを覗ひ張竹の元を外し手繩を曳き網を舉げて入りたる魚を捕獲するなり

三 豊後地方に於ける鯧張揚網

豊後國南海部郡に於ける鯧張揚網は一に「ボケ」網とも稱し則前兩者と同趣向のも

網揚張鯧 圖四十九第



のにして秋分より十二月に至るの間急潮海底の潮をなす所に於て主として鯧類を捕獲するに用ふ
 網の構造は圖中の(ハ)は「コシ」網と稱し長さ八尺横八十目掛二枚(口)は十四節八尺切五丈を繼ぎ十三反(ニ)は三ツ指し八尺切三反(ホ)は八節八尺切一反(ホ)は二ツ指し八尺切六丈を繼ぎ十反を用ひ網の總長上縁にて廿三尋あるを肩繩十六尋に左右は十八尋を十二尋に下縁は二十尋を十四尋に縫縮む肩繩足繩縁繩は共に棕桐製三子撚にして肩繩には桐製浮子長さ六七寸周圍六七寸の

丸形のものゝを凡そ三寸距離に附け網裾には藁製三ツ打長十二尋の大手網四筋を出し其の附け元に重量二貫匁位の石を古網にて包みたるもの一個つゝを括り又た網の左右端に長九尋の竹竿一本つゝを附く之を「ボケ竿」と云ふ

漁法は長さ六間許りの漁船一艘に漁夫六人乃至十二人乗組み網一張及餌料に供すべき鯧若くは鯖、鰹等の類並に餌焚釜凡七升焚一個餌桶(凡一斗入)一個薪糧等を携へ日出前より沖合に至り潮勢急激の所に於て船を潮流に任せ上流の方を右舷とし左舷より網を下し「ボケ竿」を以て之を張出し船梁に設くる所の又木にて竿本を支へ網裾に具へたる大手網を伸へ四挺乃至八挺の擡を以て船を横退して網を攤け豫め儲へたる餌料を餌焚釜にて煮立餌桶に盛り粉碎したるを潮勢を見て上流即右舷の方より撒布し漸次に魚を網中に誘引す之を餌打と稱す己にして魚の十分に集まりたるを見て「ボケ竿」を撤し大手網を曳き迅速に網を舉げ以て魚を船に移し捕ふるなり

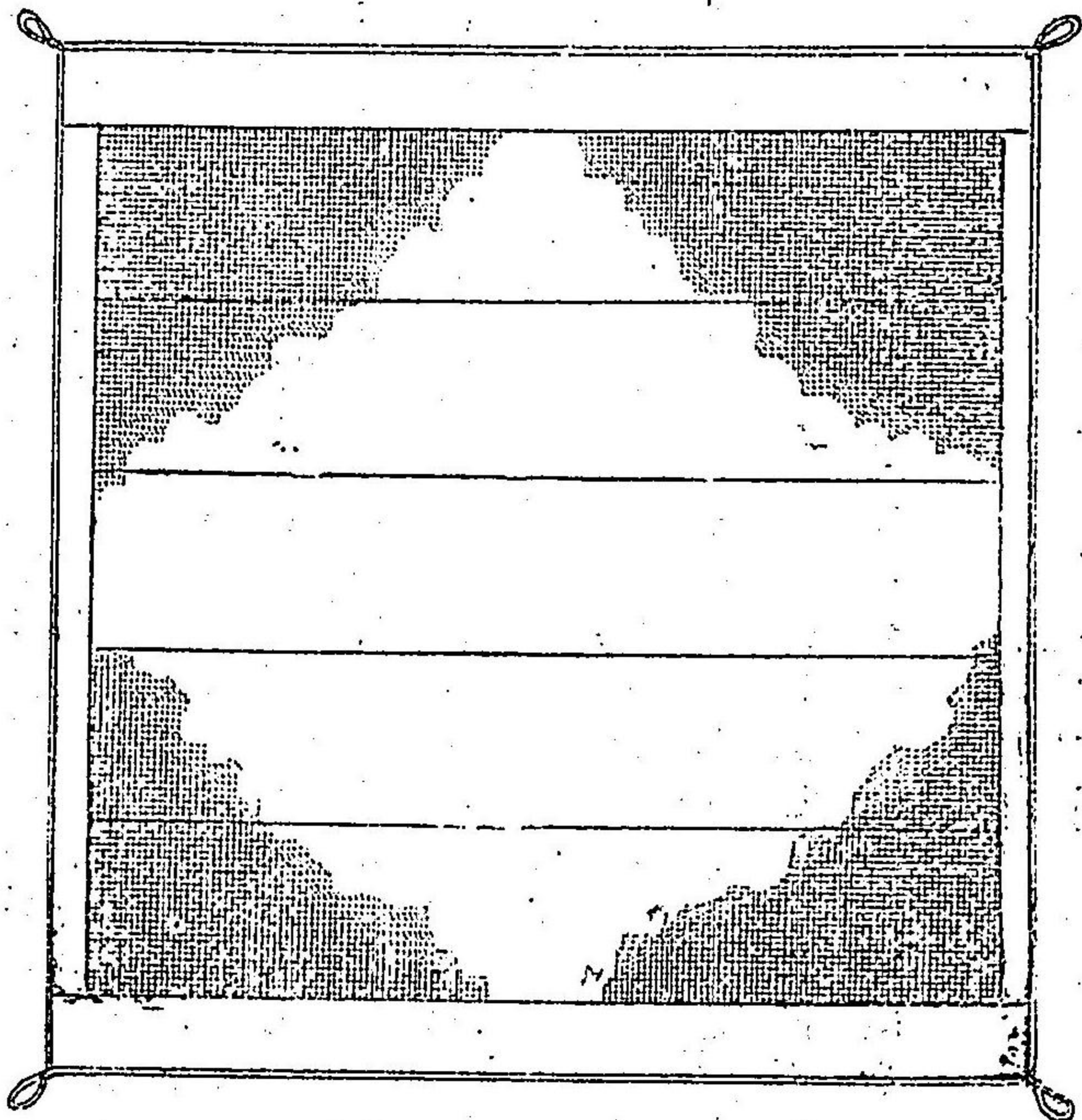
第十四 四手網

四手網は全國至る所之れあらざるはなく概ね淡水又は河口の淡鹹水相交はる

所に於て細魚を漁する小漁具に過ぎずと雖之を使用するに一二人にして足り且僅少の資金にて製作し得べきのみならず地形に由ては其利する所侮るべからざるものあり今其一二を揚ぐ

伊豫國宇和島近傍にて使用する四手網は主として「シラウヲ」を捕ふるに用ふれとも又鰕及雜魚を漁するにも用ふ「シラウヲ」の漁業季節は大

網手四 圖五十九第



寒後春彼岸迄の間にして其産卵せんが爲め河水に入るを漁するものなるが故に専ら河口の淡鹹相交はる所に於てし鰕其他の雜小魚を捕ふるには淺海の岸邊に於て季節を撰ばず之を使用す網の構造は縋子織一尺二寸巾のものを長六尺餘に切り五枚を並べて繼合せ上下兩邊には白木綿五寸巾のもの左右兩端邊には同二寸巾のものを繼ぎ凡七尺四方とす此白木綿を附くるは魚の入れるを見易からしめんが爲めなり四周には麻繩四分周りのものを澁染したる縁繩を附け四隅には「乳」を設け此「乳」には周圍二寸位長六尺の竹を張り之を別に二本の竹を繩にて巻き十字形に交叉したるものに結び附け更に其十字形に交叉したる所に柄を結び附け其柄も亦竹にして周圍四寸五分許長さ三尋許とす之を張出竹と云ふ

漁法は船にて使用すると陸上より差出すとの二様あり「シラウヲ」を漁するには概ね船よりす其法竹柄の本を船梁に括り附て網を舷外に張り出して能く水底に沈め以て魚の來るを待つ魚網中に入るを見れば急に柄の中央を持って引揚ぐ然かするときは張竹は屈撓して其の中央凹窪して自然に囊狀をなし魚の其内に集まるを捕獲するなり又陸上より張出して使用する場合には柄の根に重量二貫目位の

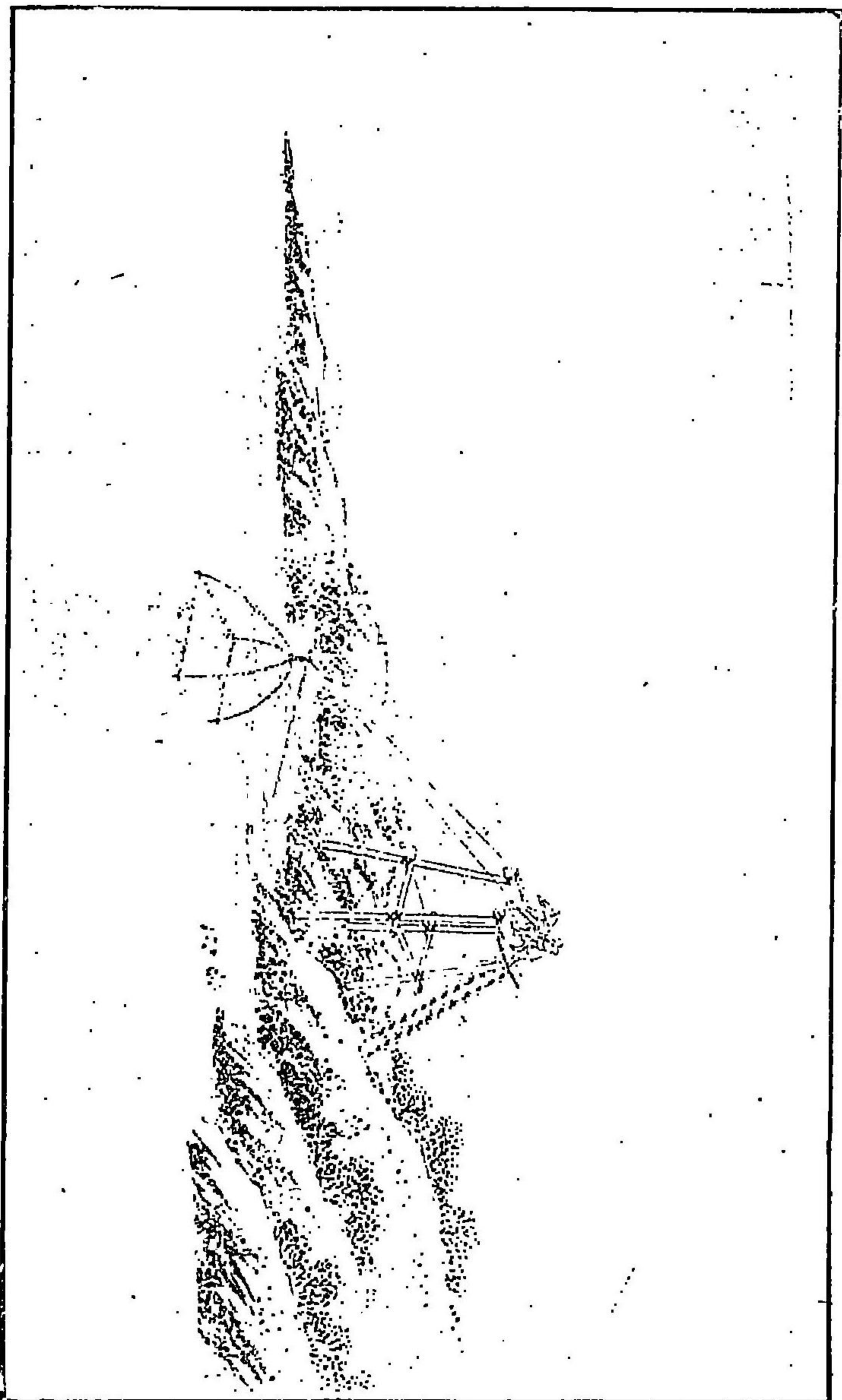
石を附けて錘とし網を擧ぐるに便す。鰕其他の雜小魚を捕ふるには魚腸或は自餘の餌料を投じて魚を誘致するを要す。之を使用するには凡て漁夫一人にして足れりとす。

第十五 棚網

徳島縣阿波地方に於て棚網と稱するは四手網の種類にして冬季は「イナ」「コノシ」其他雜魚を漁するに使用するものなり。漁場は陸に近き海の水淺き所とす。網の構造は麻糸十五節網にして四間四方とし竹を以て之を張り繩を繋ぎ附けて引揚ぐるの用に具へ又別に起し竹あり七八寸周りの竹にして長さは一定せず之を以て網を引揚ぐるに自山ならしむ。

漁法は豫め杉の丸材長さ四間許の柱四本又は八本を以て櫓狀に組立て上に棚を架し一方には梯子の如く木を組立て、昇降に便ならしめ棚上に竹箆を敷き人其上にありて網を水底に沈め置き魚の來聚如何を察し其網に上るを見れば棚上より繩を曳きて網を擧げ之を捕獲するなり。之を使用するには漁夫二人を要す。

第十四圖



棚網の状況

第五節 刺網類

刺網は其要魚の體軀をして網目に罹らしめ又は網をして魚の體軀に纏絡せしめ以て之を捕ふる趣向のものにして其裝置陸上に於ける鳥羅に相類似せり其水上層に於て用ふるものを流網オカシメ或は浮刺網と稱し中層に張下するものを中刺と曰ひ網の下縁を海底に接着せしむるものを底刺と云ふ

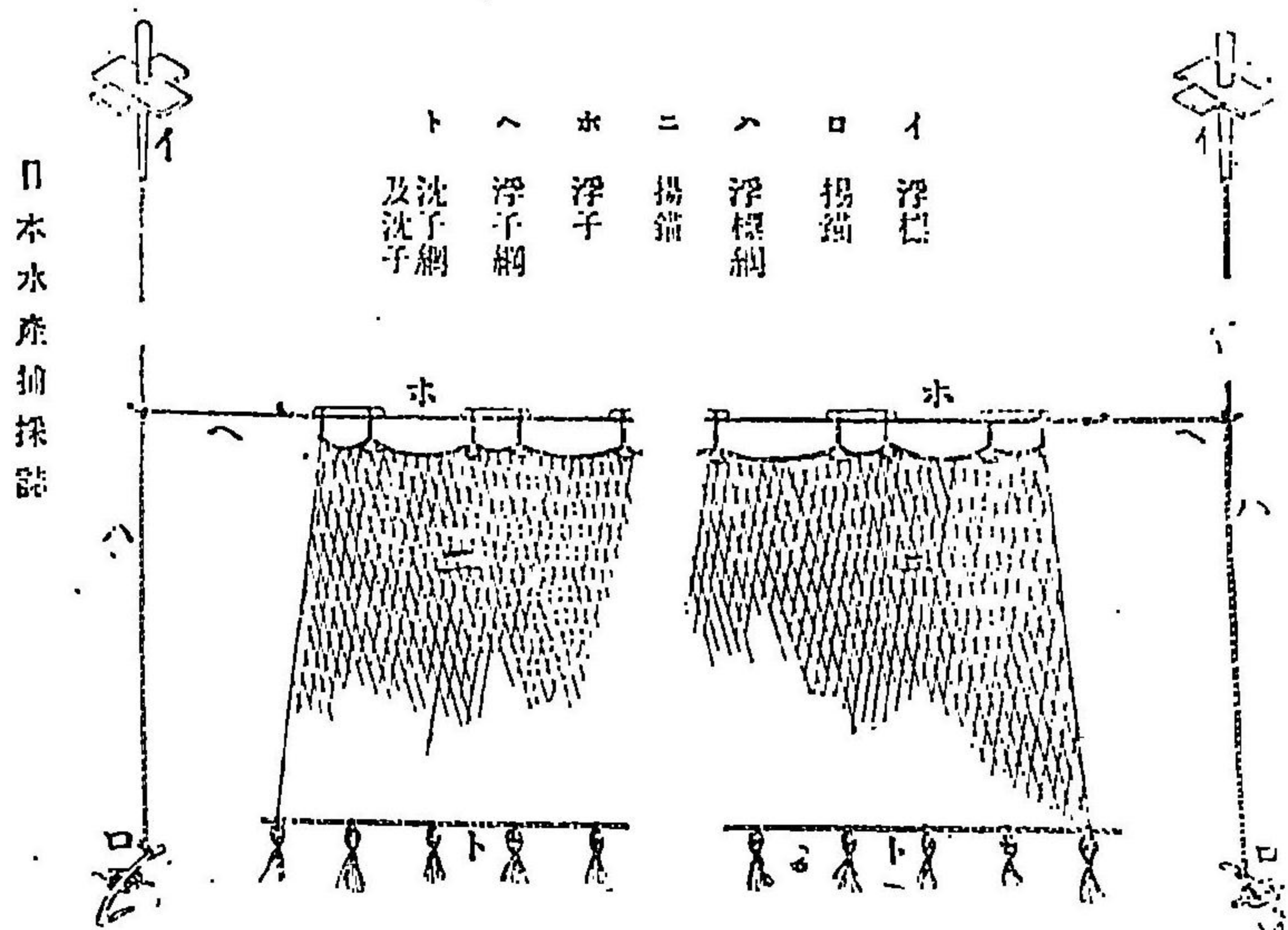
刺網は概ね横長く縦短き片網にして恰も幔幕狀を爲せるものを多しとすれども中には横非常に長く殆んど帶狀を爲せるものあり大抵囊を有せずと雖網の長さよりも肩繩足繩又は一方を短くし之に網を結び附け以て網の横を締め爲めに中間に膨らみを設くるものあり然れども固より囊の狀を成さず是蓋し刺網は魚をして一處に簇集せしめて捕るを目的とするに在らざればなり

刺網を使用するには豫め魚道を推測し其要衝に當りて張下するあり或は先づ網を張り置き魚を驅逐して之に罹らしむるあり或は魚群を圍みたる上之を驚愕せしめ其逃れんとして四散するとき頭を網目に挿さしむるあり然れとも其要は魚

を網目に罹らしむると魚を網に纏絡せしむるとの二者に外ならざるを以て網の形状に於て甚しき異様なるものなし唯其網絲は概ね稍々柔軟にして且つ韌力あるを要す是れ魚の罹りてより逃れんと欲し跳躍するの際剛硬なる絲は抗抵力強きが爲め却て脆く網を破らるゝの恐れあるを以てなり又其網の結節は皆カヘルマタにして本目の結方を用ひす是本目なるときは魚體之に罹りて反跳する力に由り結節弛まりて鄰れる網目を奪ひ爲めに魚を逸せしむるの恐れあるを以てなり夫此の如くなるを以て刺網には性質良好なる麻を擇び且他の網に比すれば割合に細くして撚の強からざるを良しとす而して全體絲を用ふるもの多く其手先に藁繩網を用ふるが如きは絶て無くして纒にあるのみ

刺網類中流網浮刺網に於ては往々沈子を附せざるものあれども他は皆浮子及沈子を備ふ而して浮子を闕如するものなし蓋し流網及浮網に沈子を附せざるものあるは其要水面を下る咫尺の間に於て翻騰流動せしめ以て浮游魚を捕るに在ればなり中刺底刺には皆浮子沈子を備ふる所以は其浮力と沈降力との權衡に依り網をして水の中層又は下底に壁立せしむること必要なればなり而して大抵網

第九十六圖 鱈底刺網



日本水産捕採誌

の兩端又は一端より立網を着け樽若くは木材等を結び一は以て浮標とし一は以て網の沈降を防ぐの装置を爲す刺網類中實業者の稱呼に於て張網掛網又は立網等の名あるものありと雖前述の如く魚を網目に罹らしめ又は纏絡すへき趣向のものは名稱の如何に關せず皆本類に編入せり自餘の異同は毎種の網に就て説明すべし

第一 鱈底刺網

鱈は本邦水産物中にて重要魚なるも其生産する海は北部に偏し暖燠なる處に栖息せず殊に北海道を最

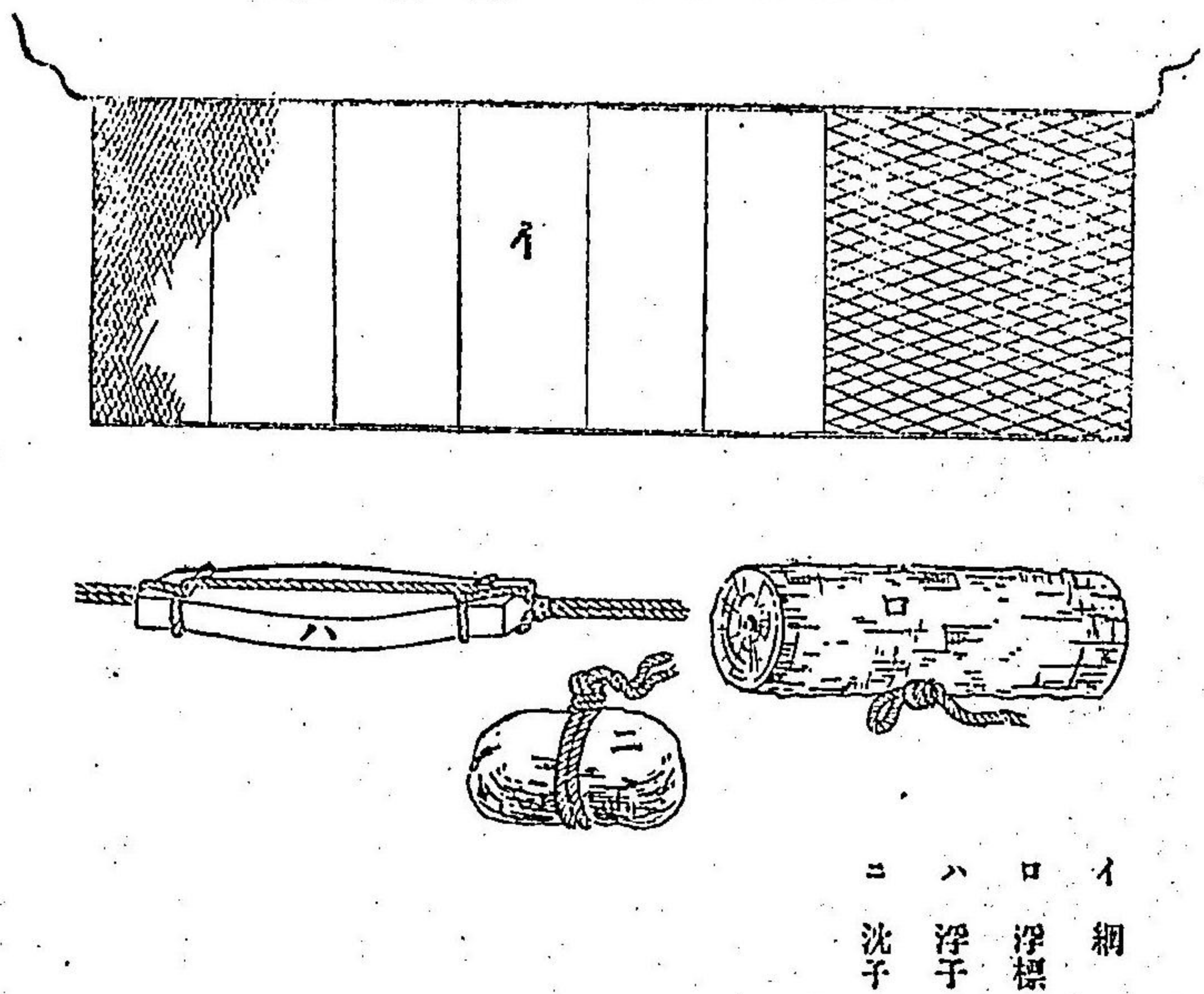
とすれとも其漁法専ら釣を以てし網を用ひす唯三陸兩羽及び越後佐渡等の諸國に於ては建網若くは刺網を用ふ今刺網の一を掲ぐ

陸奥國下北郡脇野澤村に於ける鱈刺網漁業期節は冬至二週間前より冬至中とす漁場は陸を距る一里内外の沖合にして深さ四十尋許海底泥土の處なり

網の構造は麻絲製目合五寸三分十六目掛け百尋とし之を肩繩四十尋に肩繩と浮子繩との間長さ四寸の下け絲を若干距離に結び附け足繩は六十尋とす浮子は漆木を用ひ長一尺四寸幅一寸二分厚さ一寸五分のもの六十七枚沈子は石にして一個の重量三十五匁許のものを藁包になし二尺五寸距離に附く肩繩は楡皮三子撚徑八分足繩は藁二子撚徑四分のものを用ひ之を網一把となす

漁法は漁船一艘に漁夫四人乗組み未明に漁場に漕出し網七把を連続し先づ圖の如く元錨及浮子を卸し然る後順次に網を下し終りに揚錨及浮標を投す之を一と刺と云ふ漁船一艘にて三刺を下し其儘歸船し翌朝に至り前日下し置きたる網の元錨浮子より漸次繰り揚げ網目に罹れる魚を捕獲するなり網は風浪に拘はらず漁期中下し置くものとす

鱈刺網 圖七十九



第二 鱈 網

鱈は西南海より東北に至るまで所在之を漁す其漁法釣あり網あり網は建網其他をも用ふれとも刺網を用ふるもの多し今其一二を掲ぐ

肥前國に於ては北高來郡を除くの外皆之を用ふ該地方にては之を建網と稱す蓋し建網とは數時間海底に放置し魚をして自ら之に罹らしむる網の總稱なり漁業の季節は各郡及浦濱に依り遲速長短一ならざれとも大抵陰曆八月より翌年四月に至るの間とす漁場も亦一様ならざれども凡海岸よ

り五町乃至二十町以内深さ十尋より二十五尋までの處とす

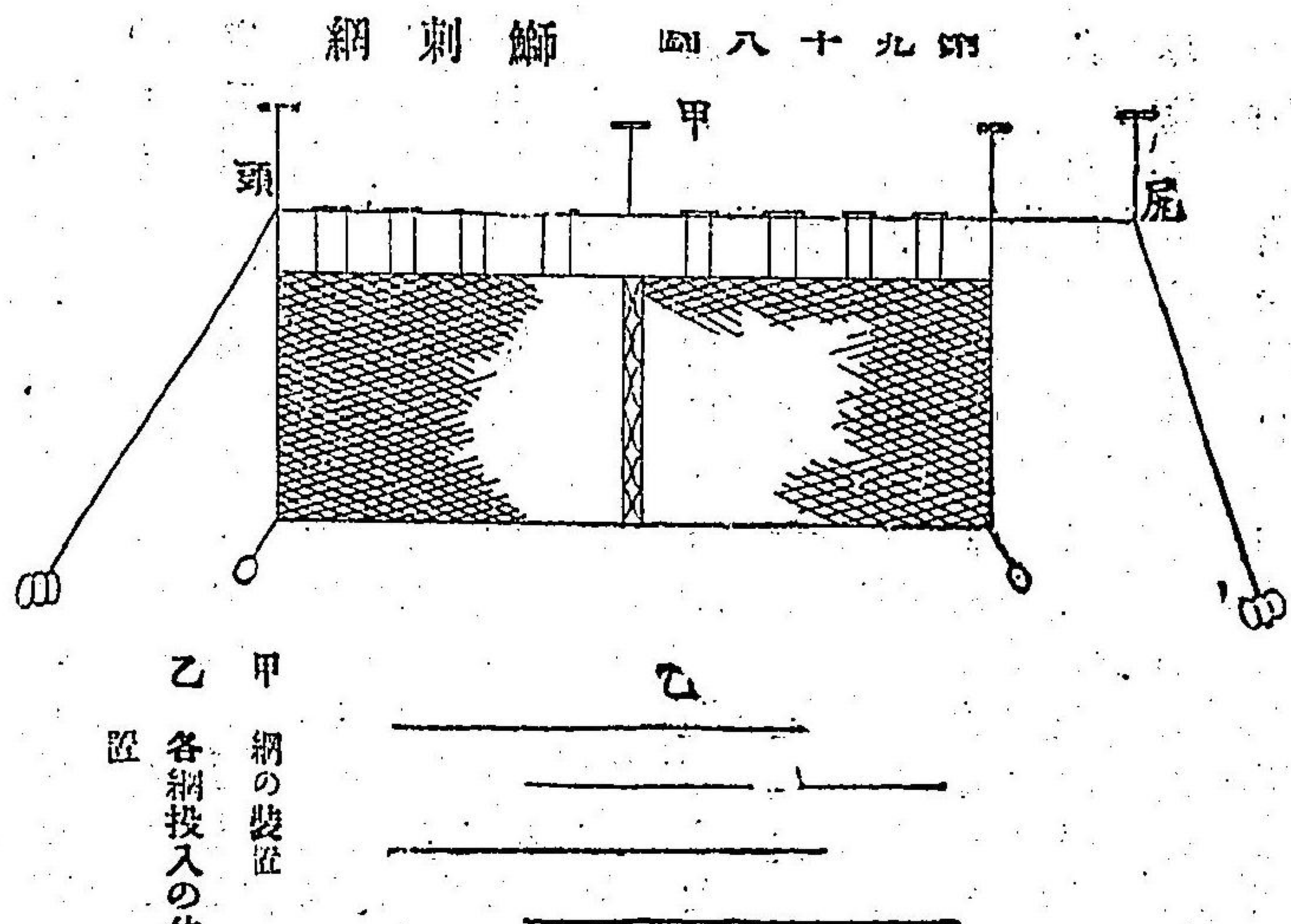
網の大小廣狭も亦浦濱に依り一定ならざれども其多數にして大形なるものは麻網丈七尋長さ九十六尋とし左右兩端に藁繩細二十尋を附く目合は絲網は六寸六分藁繩網は一尺肩繩は櫻欄三子撚周り八分足繩及ひ「ソヘコ」と稱し網裾に引通す繩は共に藁三子撚周り三寸浮子は桐製長さ八寸幅中央一寸八分首尾一寸三分厚さ一寸にして肩繩八寸間に一枚を附く又網の中央と左右手先繩網の上端に各櫻欄の小繩十尋乃至十八尋を附け之に方言「タツボ」と稱し桐木の周り三尺なるを長さ八寸に丸切にしたるを結びて浮標となし併せて海の深淺に應じ其繩を伸縮して網を海中に壁立せしむる用に供す沈子は楕圓形の石一個重量凡三斤のものを小繩にて結び足繩一尋間に一個つゝを附け又網の兩端には重量凡三十斤のもの一個つゝを附く

漁法は漁船一艘に漁夫六人(網小なれば四人或は五人)乗組網二張乃至三張を積入れ漁場に至り網の手先より漸次に下し之に他の一張若くは二張を接續して張下し置き一晝夜を経て潮の流動を見計らひ網を繰揚げ罹れる魚を捕獲するなり而

して網は元の如く張り入れ置き一週間位にて他の網と交換して修繕を加ふるものとす

安房國安房郡沿海に於ける罾網漁法は前者と異なり漁期は陰曆二月より四月までの三ヶ月間にして網は渾て麻絲を用ひ其丈八尋許長さ百七十間許とす之を使用するには漁船二艘に漁夫凡十人乗組み出漁し魚群を認むれば直ちに其前面に向て網を下し二艘の船は左右に潜き分れ灣環狀に張り廻し次で二船の漁夫は一同に船舷を敲き左右より魚群を叱驅すれば魚は其響に驚き逃避せんとして前進し竟に網目に罹るを捕獲するなり此漁は晝間の業とす

肥後地方に於ける罾網漁法は大略前者安房國のものに同じと雖晝間は勿論夜間に於ても亦之を爲す其夜間に於てするときは方言「シギ」即ち鱗蟲の閃光を生ずるを見て船を進むるなり(但だ其「シキ」の網邊に生ずるときは魚は網圍中を廻遊し容易に網に罹らざるに依り船中篝火を燃し以て「シキ」の光輝を消すことあり又魚を驅逐するに方言「天棒」と稱し長六尺許の棒に網を附けたるものを魚群中に抛ち或は錨に苦を結び附けたるを以て海中を攪拌す漁期は陰曆十一月より正月中旬ま



でにして網船十二人乗三艘を以て使用する
 丹後國與謝郡伊根村及び新井村に於ける鱒
 刺網漁業季節は毎年十一月十一日頃より翌
 年一月十日までの間にして使用する網数は
 百三十八番及び百三十六番を限りとし是よ
 り網数を増加するを得ざるものとす
 網の構造は麻絲製網目七寸四分丈け五間長
 さ二十五間にして之を長さ二十間に仕立て
 二統を連続して一張とす肩繩は徑八分の藁
 製にして之に徑一分の麻製下げ絲を以て網
 を結び下く其長さ凡一尺八寸とす浮子は桐
 木長さ一尺周五寸許のものを網目六個を隔
 つる毎に一枚を附け網の左右下端には重量
 五百匁許の石を附けて沈子とす又左右中の

上端には方言「ナガラ」と稱する長さ五間の網を出し其端に桐木の周三尺許なるを
 長さ一間半に切りたるを繋ぎて浮標となし其「ナガラ」より別に長五十間の網を出
 し之に米の空俵に小石を詰めたるもの三俵を繋ぎて錘となす
 漁法は季節前に至れば各網主抽籤を以て網を投すべき位置の順番を定む網を投
 するには小廻り船と稱する小船に漁夫二人乗組み拂曉に漁場に至り網の頭と稱
 する部分より各自順次に投入す其位置乙圖の如し網と網との距離は上切に於て
 は七尋割栗に於ては八尋と定む皆海岸線に並行して装置するものとす而して六
 時に至り網の尻と稱する部より引揚げ罹れる魚を捕獲するなり

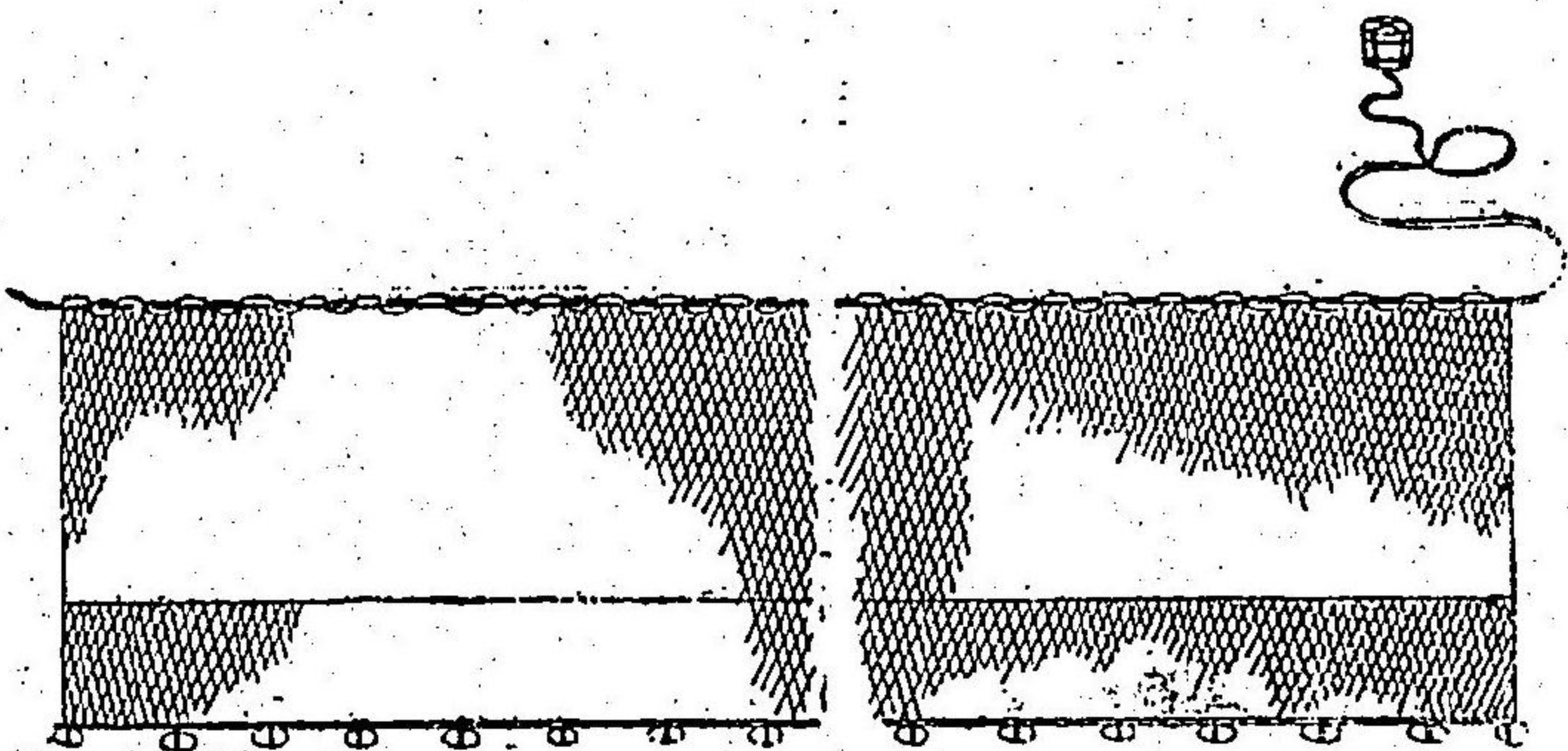
第三 鱒網

鱒は西南海及び東海に多し之を漁するに釣を以てするもあれとも網を用ふる
 を多しとす網に旋網あり刺網あり今刺網の一二を録す

一 肥後地方に於ける鱒網

肥後地方に於ける鱒網漁業の期節は三月中旬より六月下旬までにして就中四月

網 鱈 四十九第



五月を最良期とす是此兩月は鱈の孕餌期にして此時に及べば鱈は進退自ら遅鈍となるを以て捕獲に便なるが故なり漁場は深さ凡十三尋以上にして海底泥沙の處を擇ぶ

網の構造は丈七尋長さ二百尋を一張とし網目は上下二段に分ち上段は丈五尋の間一尺に五目下段丈二尋の間は一尺に二目とす浮子は桐製長さ六寸周圍四寸許のもの凡一尋間に三個沈子は括石にして十尋間に一個を附く肩繩及足繩は共に藁製にして曳網の片手に浮標を繋ぐ

漁法は網船一艘に三四人乗組み専ら夜間を以て出漁し潮流に隨て網を張下し浮子をして海面より五六尋の下に在らしめ網の片手を浮檣に持たせ片手を船に繋ぎ潮に任せて放流す此網は上下段網目の

細大を異にするが故に魚來りて上段の網に衝突すれば其勢にて網裾巻き揚り以て魚を網に罹らしむるなり

二 安房地方に於ける鱈網

安房上總地方に於ける鱈網は通俗夜流網と稱す専ら夜間に使用するを以てなり春夏二季は東京内灣に於て漁し冬季は安房沿海に出漁す此漁業を爲すには少しく風吹き波立つ日を宜しとす

此網は麻絲製にして丈九尺許長さ凡二百九十間餘網目三寸五分許とす浮子は桐製長凡七寸幅一寸厚さ六分ものを一尺二寸距離に附け沈子は陶製の長さ二寸許のものを用ふ肩繩足繩は共に藁繩とにて作る

漁法は船一艘に漁夫三四人乗にて潮を横ぎりて網を張下し網の一端の曳繩を船に繋ぎ以て待つこと一時間乃至二時間魚は順風に從ひ游行して波間に浮ひ跳り遂に網目に頭鰓を刺し忽ち驚き脱せんとして反轉跳躍するに從ひ愈々全體を網に絡まれ進退自由ならざるに至るを引き揚げ捕獲するなり

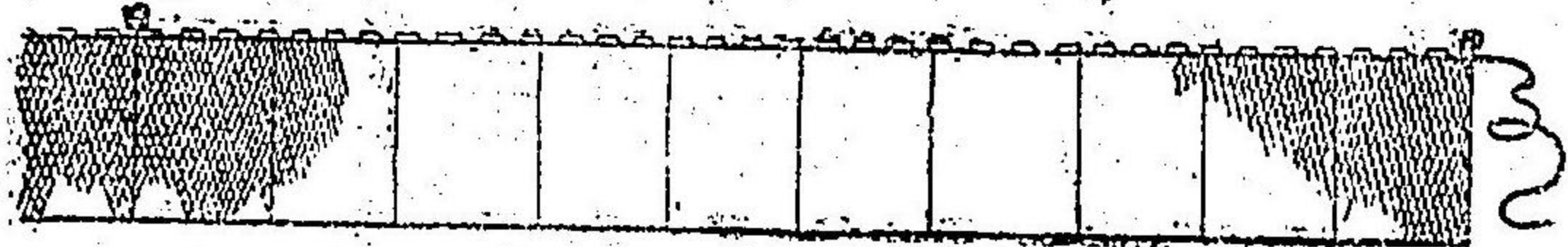
第四 鮪流網ツノナガシ

鮪盛漁の地は多くは建網を用ひ間々旋網及敷網等を用ふれども東北地方にては刺網を用ふるもの亦多し就中常陸の如きは此漁最も盛なり今其一を録す

常陸國那珂郡平磯村に於ける鮪刺網は單に流網と稱し主として鮪を漁するの外尙ほ鱒鯉魚海豚等を捕る漁業の季節は八十八夜前後を最盛とし漁場は十里内外の沖合とす蓋し此網は春季鮪の浮游するときに用ひて漁獲多きも秋季沈游するときは効なし

網の構造は麻の量一貫五百匁を以て六寸目五十八掛長さ十一尋に製し之を一反とし十反を綴合して「モガヒ」と云ふ總長さ百十尋なるを五十五尋に縮む肩紐は椶櫚三つ合にして浮子は桐木長八寸幅二寸厚さ一寸のものを一尺三寸距離に附く即ち「モガヒ」に百二十枚なり網の先端には凡一斗入位の樽を附け元浮とし其他「モガ

鮪流網



ヒ毎に四升入位の浮樽を附く

漁法は船一艘に漁夫十二三人乗組網十二モガヒを使用するを通常とす先づ魚の通路を認め日の暮るゝを待て潮流を遮り網を下し潮に従て流し船をして網と並進せしむ大抵夜半に一回網を擧げ罹れる魚を捕收するを通例とすれども多漁の時は數回に及ぶことあり漁場は十里内外の沖合に於てすれども潮に流され遠く二十里乃至三十里外にも至ることあり

第五 鱈流網

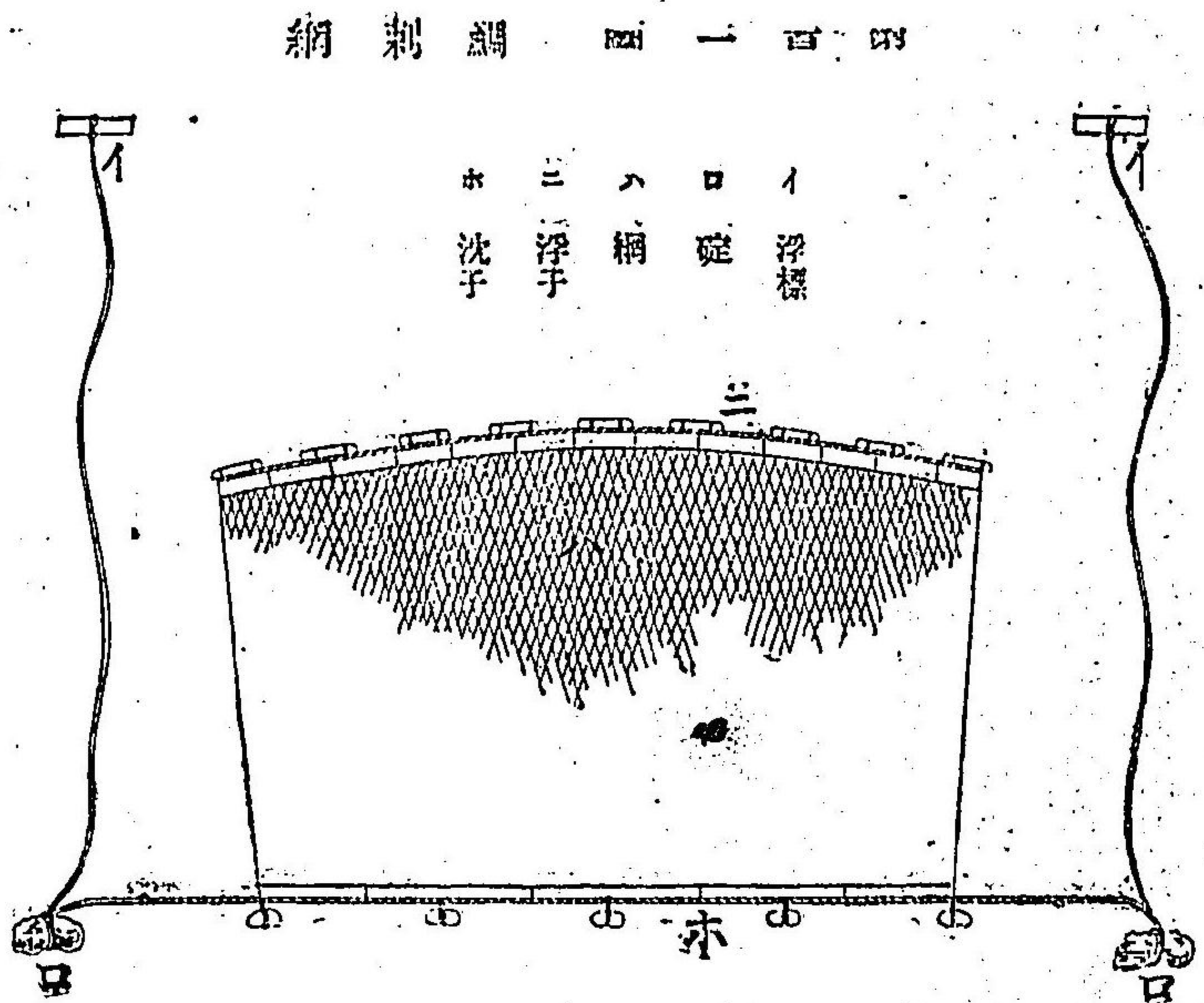
羽前國西田川郡沿海に於ける鱈流網漁業の季節は八十八夜より後凡三十日間にして漁場は海岸を距る三四里の沖合とす

網の構造は青草「カナビキ」等の左片撚絲にて網目一寸三分目數百七十五掛長さ十五尋を以て一把とし藁心繩徑二分長四十七尋のものを網の上下に延へ之に縮め附け網の上端には徑二分の絲繩長さ五寸つゝのものを五尺二寸距離(兩端は一尺)に結びて下げ絲とす肩紐は藁製徑六分長四十五尋浮子は桐製長一尺八寸幅は中

共にて一寸のものを三尺一寸位の距離に附く此肩繩は下げ絲にて假結ひにし常
 には取放し置くものなり沈子は重量四匁位の陶製にして之を徑二分長四十七尋
 の藁心繩に貫き八寸距離に配り細き絲を以て網裾の繩に結び附く
 漁法は漁夫十八人を一組とし三間漁船一艘に十二人乗船七挺櫂四挺を備へ又二
 間漁船二艘に漁夫三人つゝ乗り各船三挺を備へ網十九把を携へ午後三時頃より
 乗出し沖合鰻の通過する所を考へ十九把の網を一繼となし日没より潮流に任せ
 て流し網頭には三間漁船を附け此船には方言「ドンベ」と稱し藁網の徑八分長九十
 尋なるに重量十二貫匁位の石に穴を穿ち古網を繩に綯ひたるを通したるものに
 網を繋ぎ之を曳て船の速力を殺ぎ又二間漁船は網尻に附け置き其一艘は兩船の
 間を往來し鰻の多少を見計らひ網を引揚ぐ之を揚るには先づ肩繩を取放し網の
 み其儘船中に手繰り入れ歸村の後網目に罹れる魚を捕るなり

第六 鯛刺網

鯛漁に用ゆる網は葛網、曳網、旋網等あれとも東北地方に於ては鯛の大なるもの



は底刺網を用ふるを多しとす今其二
 を録す

陸奥國三戸郡鮫村に於ける鯛刺網漁業
 季節は陰曆八月九月の間にして漁場は
 深さ十五尋以内海底砂地の處とす
 網の構造は麻の細絲三子撚を以て網目
 五寸十四目掛長三十尋とし之を肩繩十
 八尋足繩十五尋に各五寸の下げ絲を以
 て結び卸し之を一把とす肩繩は藁心製
 三子撚徑三分足繩は同徑六分浮子は漆
 木にて長七寸幅七分厚さ六分のもの三
 十枚を附け沈子は石を用ふ
 漁法は小船一艘に漁夫二人乗組夕刻よ
 り漕出し網三把を一綴となし張下し其

儘歸船し翌朝再び至り浮標より網を揚げ網を手繰りて罹れる魚を捕獲するなり

第七 飛魚流網

筑前地方に於ける「アゴ」流網は則ち飛魚を漁するものなり其の季節は陰曆四月中旬に始め六月中旬に終る漁場は深さ十五尋内外にて海底は平沙或は岩石の處とす

網の構造は丈け三尺五寸長三十四尋網目九分にして之を肩繩十四尋足繩十五尋に縮め附け之を一反とし浮子は長四寸幅八分厚さ六分のもを凡八九寸距離に沈子は陶製徑五分長八分のもを一寸距離に附け六十反を以て船一艘の備へとす

漁法は漁船一艘に三人乗組未明より出漁す網を下すには先づ六十反を連続し肩繩の端に浮樽を附け海面に浮べ夫より潮流を横断し一直線に張り網の中央と張り終りとに又浮樽を附く此網は浮子大にして沈子輕きが故に海面に浮び潮の流動に随ひ或は曲線となり或は斜線となり其位置形容一ならず魚は網の前後より罹

れども概ね潮に向て食を求め游泳するの際に罹るを以て潮下に罹るものを多しとす凡三時間位にして地方に近き浮樽より繰り揚げ魚を捕るなり此漁業は日出の頃のみにて爲すなり

第八 鮭刺網

鮭の盛漁の地は北海道なれども該地に於ける漁具は多く建網引網にして刺網を用ふるは少し其刺網を用ふるは三陸兩羽北陸道に多し今其一二を録す
羽前國西田川郡沿海各村に於ける鮭刺網漁業季節は秋彼岸後土用頃までの間にして漁場は海岸より二三町位の間とす網の構造は網目四寸八分乃至五寸網堅十八目掛横七目掛とし麻の量五百匁位を以て作る之を長三十五尋の目通し線に縮め附けて一把とす肩繩足繩は「シナ」皮製徑二分長三十五尋浮子は漆木長九寸徑九分のもの七十一枚を凡一尺七寸距離に附け沈子は重量四十匁位の石三十五六個を附く

漁法は一間の小漁船に漁夫二人乗組櫂と櫂とを備へ網敷五六把立繩十三尋乃至

二十尋づゝ二本重量一貫五百匁位の脊石二個一貫匁位の中石二個中石繩九尋位づゝ二本を積入れ海岸の突出せる所より沖に向て張出し中石は二把毎に脊繩に付けて下すなり此網は晝夜共に張り置くものなれども殊に夜間漁利ありとす
鮭流し網漁法は此網七八把を一繼となし沈子を撤去し網の一端に方言「ホツクイ」又「アゲ」と稱する浮木を附け是に一丈位の繩を繋ぎ其繩に重量百匁位の石を下げ之を元となし沖に向ひて張出し其端に浮櫂を附け之に繩を結びて其端を漁船に括り日没より潮流に任せて流し置き二三時間毎に網を手繰りて羅りたる魚を捕獲するなり

第九 鱒刺網

鱒刺網は其趣向鮭刺網と異なることなし唯漁期を異にすると網の構造較や小なるのみ今其一を録す

羽前國西田川郡今泉村に於ける鱒刺網漁業季節は春彼岸より八十八夜後までの間に於て漁場は海岸より五六町位の處とす網の構造は網目三寸網罟二十五目掛

長さ七十尋とし麻の量二百五十匁を以て作る之を長三十五尋の目通し絲に縮め附けて一把とす肩繩足繩共にシナ皮製徑一分五厘長三十五尋浮子は漆木長八寸徑三分位のもの七十一枚を凡一尺六寸位の距離に附け沈子は重量二十匁位の石三十五六個を附く

漁法は一間の小漁船に漁夫四人乗組み櫓と楫とを備へ網二十四五把立繩二十五尋づゝ二本と重量一貫五百匁の脊石二個浮櫂二個を積み入れ日没頃より漁場に出で網を海岸線に沿ふて横さまに張り置き翌朝に至り羅れる魚を捕獲するなり

第十 鱒楯漁

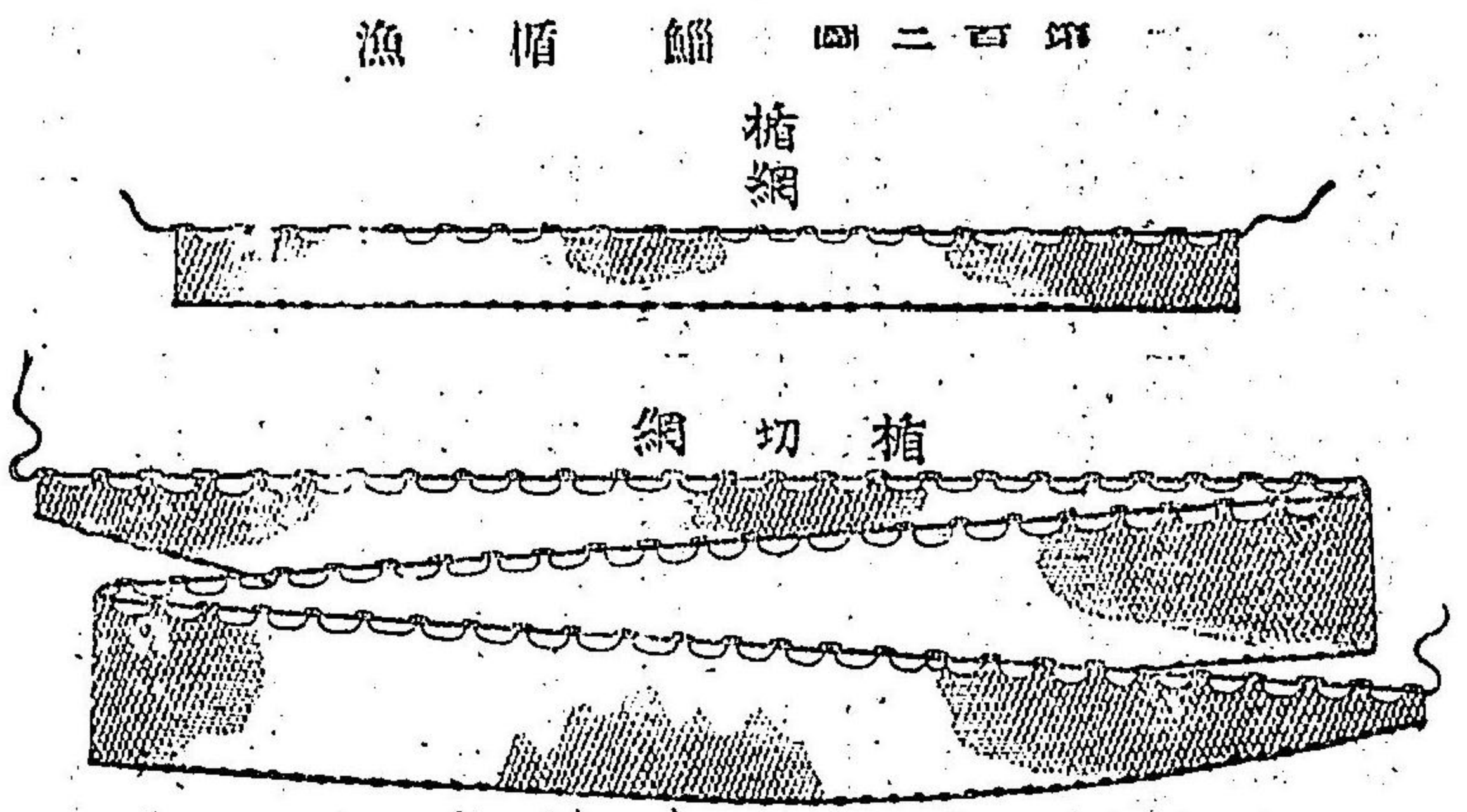
志摩國答志郡烏羽港に於ける鱒イロササ方言名吉イロササの楯漁と稱するは古來著名の盛漁なり此漁は楯網と楯切網と兩者相待て功を成すものにして各網の分類を異にすと雖主として魚を收むるは楯網に在るを以て今之を刺網中に編入す是専ら魚をして頭鰓を網目に挿さしむるものなればなり

其漁場は海灣北に面して水底泥土深く西南一帯は沿岸山脈高低起伏して東南に

延亘し港外には大小の島嶼遠近に碁布し港口を左右に開き巨浪暴風を防ぐを以て世に好畧と稱せらる斯かる好位置たるを以て鱈魚時を逐ふて群集す捕魚に緊要なる場所は南北凡三十町東西凡四町許往時藩主稻垣氏制を定め毎歳冬季に至り浦止めと稱し船舶の往來及び投錨を禁じ之が監守を置けり近世之を廢せしも漁期に臨めば私に碇泊の諸船に申約して之を避けしむると云ふ漁候は甲年十二月より乙年五月に至る間にして就中寒中を最良期とす

此漁に用ふる網は元來數村より持集まるものなるが故に其村に依り構造各小差あり大小長短亦等しからず依て今鳥羽町に用ふるものに就て記さんに楯網の構造は麻絲製網目一寸四分より二寸四分までにして網丈け二尺二寸長さ二丈餘を以て一反とす浮子は三寸五分乃至四寸五分沈子は陶製一寸三分より一寸七分に至る村に依ては石を用ふるもあり此網八十反を以て楯船一艘分とす

楯切網は刺網の類にあらずと雖之を別記するときは漁法を解し難きを以て爰に附記せんに鳥羽町に用ふるものは長さ百六十間網丈け兩端にて二間中央にて九間網目六分とす其形狀は第百二圖に示すが如し



日本水産捕採誌

漁法は冬日に至れば豫め魚監を山上に置き魚群の來聚を察せしむ魚監は魚己に港内に聚まり其群の増加するを認むれば之を漁家に報じ漁船を近隣諸村に募り港内の他船をして避け去らしむ此近隣漁村は豫定しあるものにして魚群の多寡に應じ募船も亦多少あり募に應ずる漁村は楯切網即ち灣港を扼し魚の逃避を防ぐ所の網を小船に備へ次に堅牢なる小船四十艘を備ふ此小船は楯切網の外部を尙ほ堅牢なる網を以て遮斷し且楯船(漁船を云ふ)の濫りに出入するを制する爲めにす故に舳艫を相繋ぎ接続し網を各船に分載し甲岸より乙岸に達し網を海に投じ以て前きにしたる楯切網を除去し魚の脱路を塞ぐものとす此船を手船と名づく募集せる漁船は之を八圍に

分ち一より八に至る先後の順序を定む一團の船數は凡五十艘或は四十艘とし魚の多少に依り之を定む又先後の順序は頗る漁獲の多少に關係するものなれば豫め某村は何番と定限し地元鳥羽町より報告し各團に順番の證票を交付するものとす蓋し此の如き大漁を爲すには其約束を嚴にし雜沓を制するにあらざれば意外の爭論を起し却て捕獲に益なればなり既にして各團の楯船は順次に西北の岸に排列し嚴に騷擾を禁じ以て指揮を待つ之より先き魚監は山上に在りて魚の聚散及び群隊の景況を視察し恰も其適度に至れば一發の砲聲を傳ふ之を聞き直ちに二艘の楯切船は迅速に進んで楯切網を下し灣口を横斷す爰に於て數百の楯船は楯切網の上を乗起へ網圍中に入る此時豫め備ふる所の監漁船は群魚の前路に及び進入し楯船に魚の方向を示せば先進の第一團は便宜の處に到り楯網を渦旋狀に投下し續て二番三番と或は群魚の背面或は側面に各々位置を占め毎船楯網を投下す楯船の各團已に圍中に進入すれば楯切網船の次に止まりたる四十艘の手船は楯切網の外部に沿ふて前岸に進み直線に並列し分載の楯切網を投入して各々灣口を衛り而して初め下したる楯切網を除き手船より圍中に向て楯網を

一文字に投じ魚の圍みを逸出するを防ぐ圍中の各船に在ては楯網を投ずるの外尙ほ魚叉を以て網外の魚を刺して數百尾に及ぶものあり又魚躍りて自ら船に入るものあり海潮漲起し殆んど鼎沸を爲す土俗之を「ニエ」と云ふ此時に方りてや喧擾雜沓名狀すべからず嗷號叱咤其聲數里の外に震ふ已にして海上漸次に靜まり日己に没すれば各船炬火を照して夜を守る是れ夜中網を收むることを禁するが故なり拂曉に及べば魚監復た砲聲を傳へ各船始て網を收む魚は網目に頭を挿し前後左右に潑測して已ます或は各網と連續し或は魚體數網に挿し之を收むるに困難することあり斯かる場合には其魚は初めて挿したる網の收獲に屬するものとす各船悉く網を收め畢れば手船にて獲たる所及び各船捕收の全數を地元に於て検査し而して手船の連繫を解き灣口を開き楯船を放散せしめ以て漁事を畢ふ

第十一 鰹 網

鰹を漁する網は大抵掩網を用ふれとも亦た刺網を用ふるあり今其一を掲ぐ因幡國高草郡湖山池に用ふる鰹網漁業は方言「ハラカミ」と云ふ其季節は寒前後凡

六十日の間に限る網の構造は極細き麻絲を用ひ絲量四十五匁を以て網丈け二尺八寸長十八尋網目三寸四分に作り之を一側と稱ふ肩足繩は藁心製にして浮子は杉板長二寸五分幅四寸厚さ一分のものを一尋間に五枚沈子は陶製長一寸周圍八分のものを三十四個付く網の兩端には長四尋の藁心製の立繩を繋ぎ先きに瓢を括りて浮標となし又竹にて徑三寸位の箍を作り之に石を十文字に繩にて結び付けたるものを以て兩端の沈子とす

漁法は方言竿弧カッと稱ふる長さ一間半幅二尺位の小船を一度に大抵五十艘位を出し毎艘一人乗にて一側の網を携へ池中適宜の處に張り置き而して各船一齊に舷を敲き聲を揚げ魚を驅逐し網目に罹らしめて捕獲するなり

第十一 鱒刺網

羽後國に於ける鱒刺網漁業の季節は曳網と異なることなし漁場は海灣の内外深さ二十尋乃至八十尋の處とす網の構造は丈け四尺長二十五尋網目一寸三分五厘三十一目掛を以て一把とす之を肩繩藁製心長十三尋足繩古網二つ撚製長十三尋

に縮め附し浮子は漆木の長八寸幅五分厚さ三分のものを二十五枚を附け此網數把を連接し石の沈子一個の重量七八匁のものを二把毎に附くるを普通とすれども激浪の際には一把毎に附け又一把毎に桐木長九寸方二寸五分のものの一個つゝを繋ぎて浮標とす之を五十把を以て船一艘の漁具とす

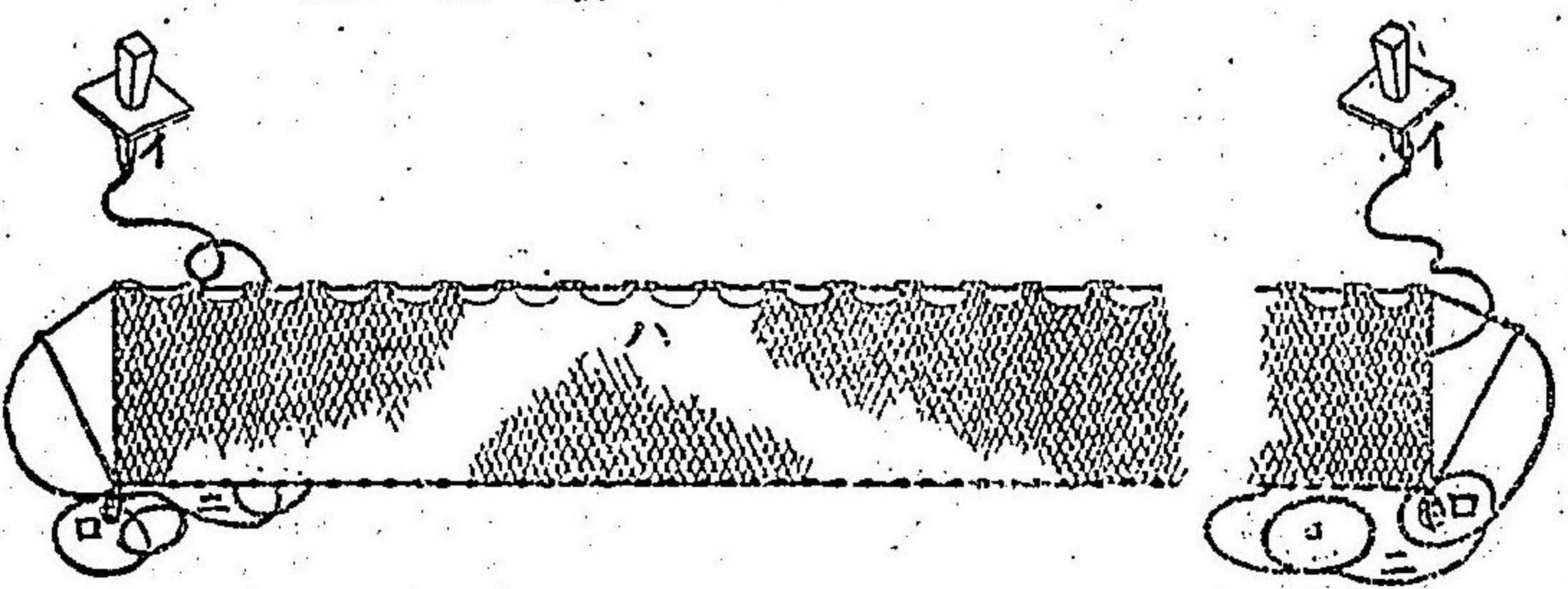
漁法は船一艘に漁夫六人乃至八人乗組出漁し其一人は舵を取り四人は櫓を押し他は網を投するものとす大抵午後五時を期し網を投して歸村し翌朝六時頃再び漁場に至り網を舉げ其儘船に積み返り上陸して後網に罹れる魚を捕るなり

第十三 蝦網

蝦に種類多し爰に蝦網と稱し刺網を用ふるは専ら龍蝦カマキを捕るものにして東海筋に於て殊に多く之を使用す其漁法概ね相同し今其一を録す

志摩國沿海に於ける蝦網漁の季節は十月より翌年四月に至る間にして尤暗夜に於てするを良しとす網の構造は村浦に依り長短廣狹同しからずと雖大抵網目三寸丈け四尺長さ三十間のものを十間の肩繩に結び縮め之を一把とし三把を連続

第三百四十四圖 蝦刺網



イ 浮標
ロ 錘
ハ 網
ニ 浮標網

して一張となす肩繩足繩とも棕櫚製浮子は桐製長三寸幅八分厚さ四分許のものを六寸距離に附け沈子は陶製にして五尺間に二十二個を附く網の兩端には四間乃至十五間の網を出し之に桐製の浮標を繋ぎ又網の下端の兩邊には石の錘を附し此網は暗礁に懸け廻らし且堅硬なる龍蝦の身體を絡むるものなるが故に弱き絲を以てすれば忽ちに破れ又強きを欲して太き絲を用ふれば蝦は其網なるを覺り逃避して罹ることなし故に絲は極めて純良にして細きものを用ふるを要す

漁法は小船一艘に二人或は三人乗組微風細浪の日を擇ひ夕剋より船を出し蝦の潜居せりと察する岩礁を圍んで網を下し恰も水中に幕を張れるが如き状を爲さしめ而して船を返して翌くるを待つ蝦の

性蓋は岩礁の間に潜み夜出て餌を覓むるものなるに其出んとするに方り網に觸れて自由を得ず依て跳躍するに従ひ網の纏絡する所となるなり曉に至れば復た船を出し網を收め之を海濱の砂上に攤け其罹りたる蝦を捕獲するなり

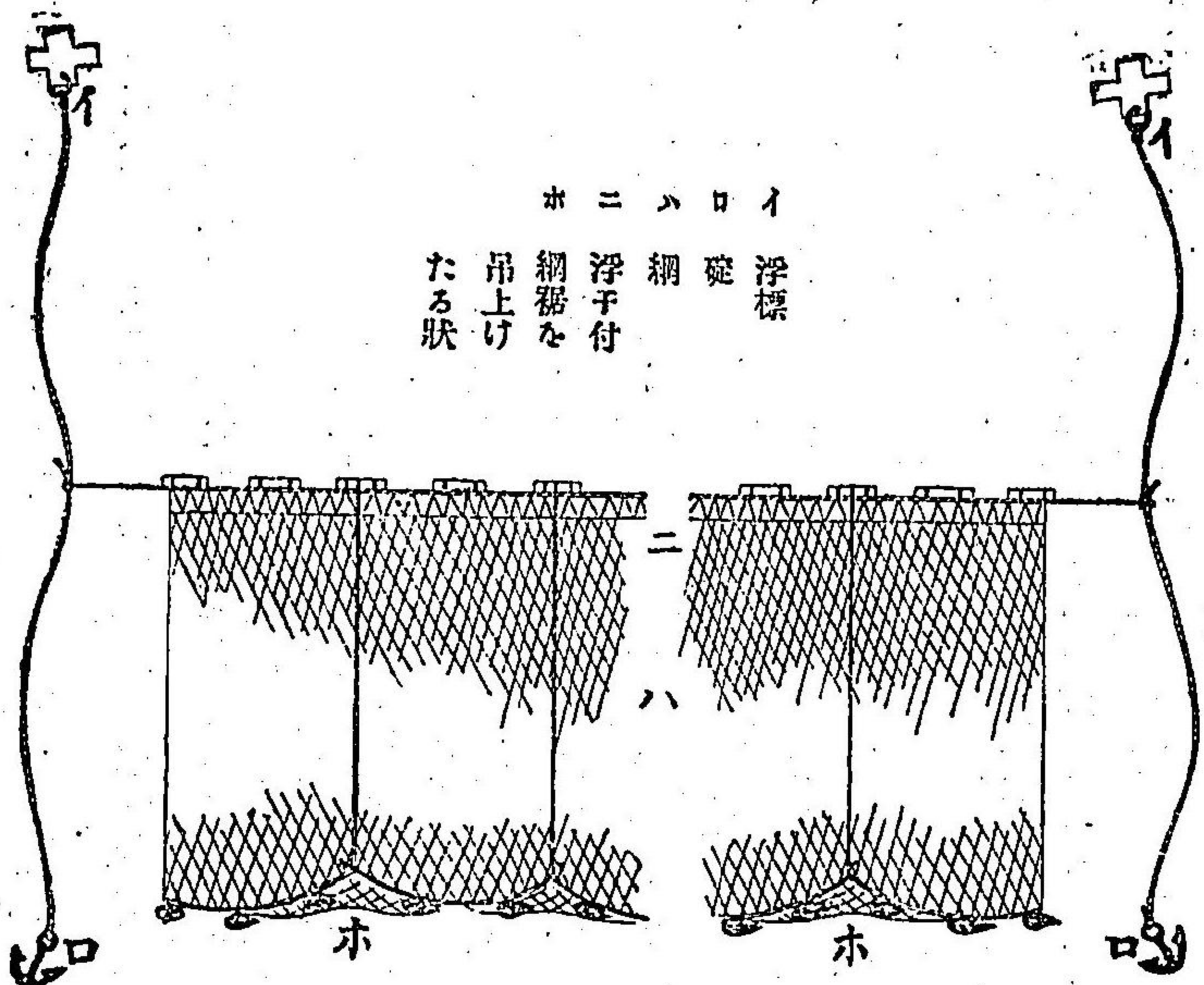
第十四 鱸網

鱸を漁するには曳網を用ひ又間々に建網をも用ふれども冬時に在ては此魚殊に敏捷となるを以て刺網を用ひ驅逐して之に罹らしむるを利ありとす地方に依ては夏冬共に刺網を用ふる所あり今刺網の一を掲ぐ

肥前地方に於ける鱸漁は陰曆四月より十月までは曳網を用ふるも十月以降翌年二月までは刺網を以てす之を掛網と云ふ漁場は海岸を距る僅に二十尋内外深さ凡四尋位の處とす

網の構造は丈け五尋長さ二十五尋一寸二分目にして肩繩足繩共に藥繩を用ふ浮子は桐製長さ八寸圍六寸五分のものを三寸距離に沈子は陶製長さ三寸周四寸のものを五寸距離に附く

第四百四十四 鰈刺網



漁法は降雨若くは西風烈しき日をトし小船一艘に網を積入れ漁夫五人乗にて海岸より沖合へ向け斜に網を張り置き船は魚群の後へ漕ぎ廻り海中に小石を投じ或は棹を以て海面を敲き魚を驅逐し魚其網目に罹りたるを見て網の片端より繰揚げ捕獲するなり

第十五 鰈刺網

鰈刺網は全國大抵用ひざる所なく皆底刺網にして其趣向は大同なるも構造に至ては悉く小異あり今其一を掲ぐ

陸奥國東津輕郡三厩村に於ける鰈刺網漁業の季節は陰曆十二月より翌年二月までの間にして漁場は海岸を距る十八九町深さ二十尋以内にして海底平砂の處とす

網の構造は麻絲二つ撚の細絲を以て作る網目は四寸八分堅十九掛長五十尋を以て一把とす之肩繩十五尋へ下げ絲を以て結び卸し浮子は杉にて長六寸幅七分厚さ七分のもの三十枚を附く足繩の長さは十五尋二尺とし之に一個重量二十匁許の石を苞に包みたる沈子を一尺距離に附く肩繩足繩は共にシナ皮を用ふ而して第四百四圖の如く九尺距離毎に吊絲を以て網裾を吊り上げ假令ば網の丈八尺あるものとすれば吊絲を以て足繩を四尺程上へ吊り上げ使用するなり斯くすれば網は潮流に従ひ膨らみて稍や半囊狀をなすが爲め魚の罹り方多しとす
漁法は船一艘に漁夫三人乗組未明に出船し漁場に至り上り潮と共に游泳し來る所の魚道を測り網三把を一綴とし張下して其儘歸船し夕刻再び到り網を手繰り揚げ罹れる魚を捕獲するなり此網を揚ぐるに際しては足繩の弛まざる様注意を要す

第十六 鱧刺網

筑前地方に於ける鱧網漁業は立冬の頃より始め春分の後に終る漁場は深さ六尋以内にして海底は岩石或は海草ある處とす
網の構造は丈け三尋長さ百九十尋網目八分にして之を肩足繩百二十尋に縫ひ縮む浮子は長四寸幅一寸厚さ七分のものを八寸距離に附け沈子は陶製長一寸二分周圍一寸四分のものを足繩に貫き一尋間に五個を附く
漁法は船一艘に漁夫三人乗組み日出より漕し出魚の游泳するを覗ひ先づ肩繩の端に桐の浮木を附け海面に張り始め夫より他方に向ひ新月狀に張り廻し終りにも亦桐の浮木を繋ぎ而して船を地方近く漕ぎ廻り一人は櫓を取り二人は長三尋の竹棹を以て海面を敲き魚を驅逐して網目に罹らしめ而して浮木を收め順次繰揚げ魚を捕獲するなり

第十七 叩網

叩網とは船舷又は水面を叩き喧噪して魚を驅逐するに由て名づけたるものなり
瀬戸内及び九州に多く行はれ山陰地方にも亦往々之を用ふ今其一を擧ぐ
豊後國北海部郡に於ける叩網は各所磯邊の藻類の蕃茂せる近傍にて雜魚を捕るものにして漁業に定まれる季節なし網の構造は丈け二尋長さ十七尋網目一寸三分肩繩足繩は共に藁製にして之に桐の浮子陶製の沈子を一尋間に四個の割合を以て附け之を一把とす數把を連接して使用す其數漁者の適宜にして定まりなし
漁法は小船一艘に漁夫三四人乗にて岸より沖へ向て網を張り更に廻りて岸に向ひ半圓形に張り廻し水棹を以て藻中に潜匿せる魚を驅出し而して舷を叩き恐嚇して網の方の向て逐ひ其網目に罹り又は網に纏絡せるものを船中に繰り入れ捕獲するなり

第十八 鱧網

豊前地方に於ける鱧網漁業季節は立冬の頃に始まり大寒の頃に終る漁場は深さ七尋位にて海底岩礁或は海草ある處とす

網の構造は丈七尋長さ百八十尋網目一寸六分にして之を肩繩の長さ百二十尋足繩百二十三尋に結び仕立上く肩足繩とも麻二つ撚周三寸浮子は長一尺方一寸五分のものを三握り距離に沈子は重量百匁の石を一尋三尺距離に附く
 漁法は漁船二艘各三人乗にして月夜暗夜を問はず薄暮の頃より出漁し網の中央を二艘の間に卸し夫より左右に別れ岩石ある處を張り廻し終りの兩端には浮樽を置き而して網の正中に至り舷を敲き魚を驚かし網口に罹らしむ三十分間位にして浮樽を取り左右より網の肩足繩を手繰り魚を捕獲するなり

第十九 反撥網

出雲及石見地方に於て使用する反撥網と稱するは鱈小鯖類を漁するものにして漁業の期節は五月より七月までとし漁場は海岸を距る七八町乃至十町餘の海底岩洞ある處に於てす

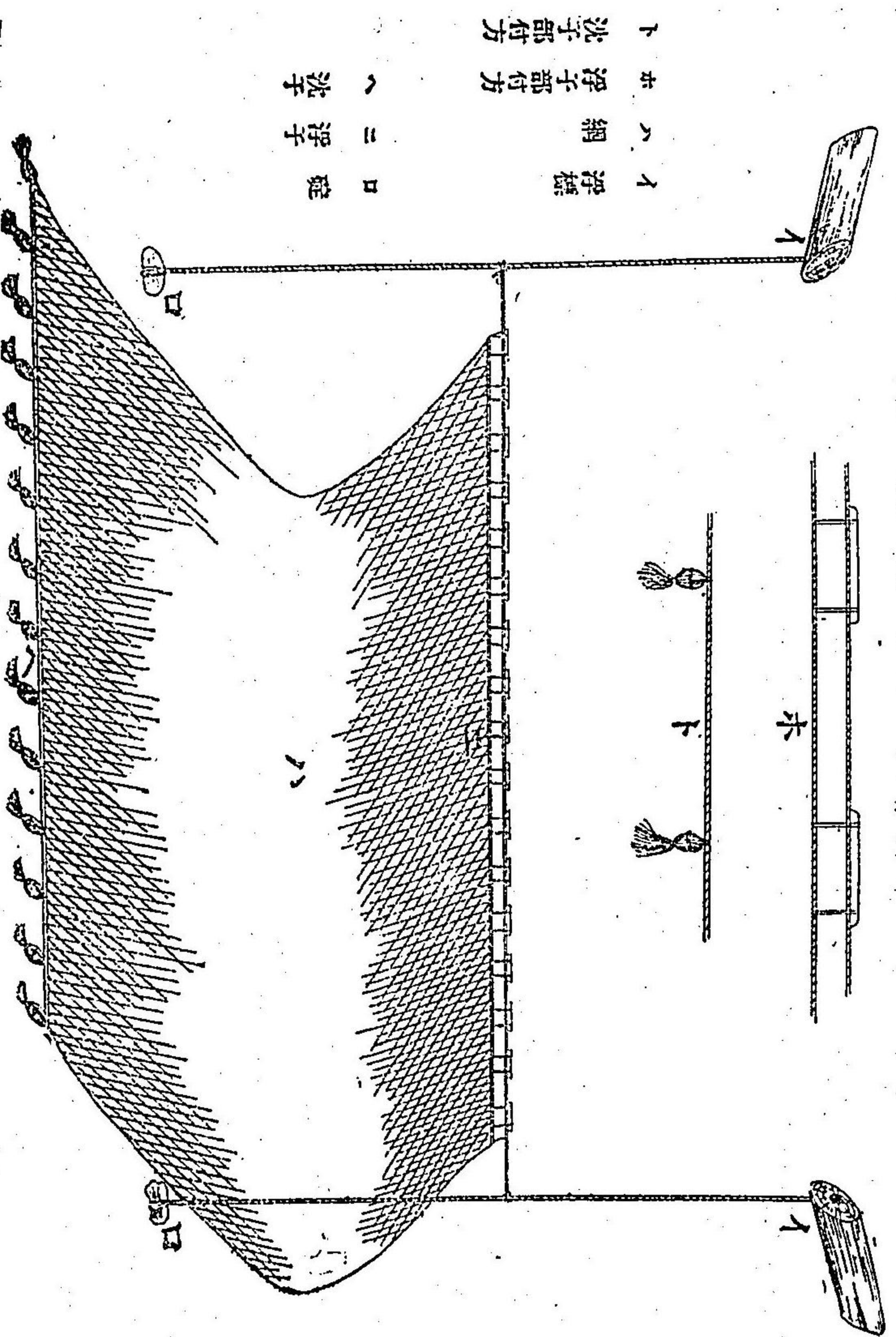
網の構造は七八分目にして麻量百匁乃至百五十匁を以て丈三尺長五尺に作り之を一把とす浮子は桐の細木沈子は石を藁にて包みたるものを用ひ網の兩端に

は繩を附け其上端には桐木の浮標を繋ぎ下端には沈石を附く繩の長さは海の深淺に依り一定せず之を使用するには漁夫二人にて黄昏に網を下し置き未明に曳揚げ罹れる魚を捕獲するなり

第二十 鮑刺網

鮑の捕獲は多くは潜水業に由り若くは又類を以て突捕り間々籠具を用ふるものあれとも網を以てするものは從來會て無かりし然るに陸奥國下北郡奥戸村小林唯八の曾祖父辨太郎と云ふもの鮑を捕獲せんと欲し地先の海面に網を下し置きたるに偶ま其網に鮑の罹れるより爾來工夫を下し局部に改造を施し鮑專漁の網となし使用せるを今代唯八幼少のとき父辨太郎の教示を受け更に一層の改良を加へ明治十八年以來村中の同業者に教示し實用せしめたるに結果良好なるより漸次に播傳し今や百餘戸の漁業者皆之を使用し收穫夥多にして共に其庇蔭を被ふると云ふ

鮑刺網漁業の季節は陰曆四月二十日より七月中に限る斯く期間を定めたるは鮑



の交接時期と認めたるに由る而して七月後は産卵期に當るを以て村中規約を定め固く捕獲を禁止す漁場は陸を距る二十町位の沖合より長さ一里餘幅二十五町許の間にして深さ十五尋より三十尋に至り海底一面の磐石に小石を交へ長藻昆布及び方言青の口草の繁茂せる所とす

網の構造は麻絲二つ撚又は三つ撚の細絲を以て作る網目徑四寸八分より五寸にして鑿目十六掛長さ五十尋とし六寸の下け絲を以て肩繩二十六尋に結び縮む足繩の長さも亦二十六尋とす沈子は一個の重量五十匁位の丸石を藁或は菅を以て包み二尺五寸乃至三尺距離に附く浮子は漆木或は檜にして長一尺一寸より一尺五分幅六分厚さ六分のもを二十八枚を附け之を網一把とす肩繩足繩は共に棉皮製二つ撚徑四分位のものを用ふ

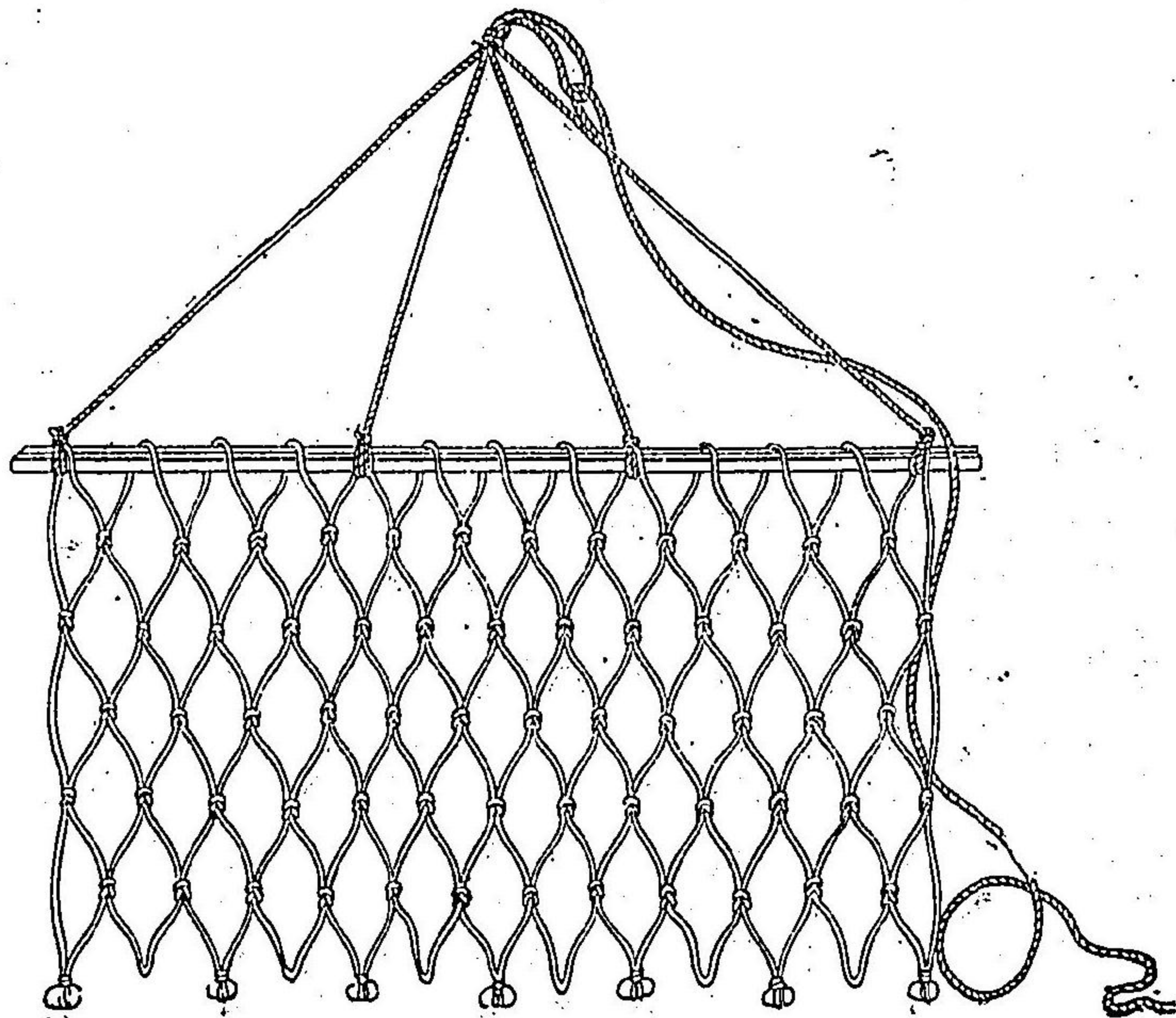
漁法は漁船一艘に漁夫四人乗組網五把を以て一級となしたるを一放しと稱し之を四放し乃至五放し積入れ午後四時頃より出船の準備を爲す五時に至れば豫て村中規約せる所に從ひ漁船一同海濱に船揃を爲す而して漁業總代人は號令の旗を翻すと同時に各船何れも沖合に漕出し適宜の場處を見定めて先づ沈石へ浮網

の本付け網を結びたるを海底に投じ夫より順次に網を下し終りに方言「ステウキ」網及び沈石を投じ一放となし此手續を以て四放乃至五放を下し畢れば其儘歸船し翌朝午前四時又前日の如く船揃を爲し五時に至り漁業總代人の號令旗を擧ぐるを見て一同前日の漁場に至り浮網より順次に網を船中に手繰り揚げ網目に罹れる鮑を捕獲するなり

第二十一 珊瑚採採網

土佐國幡多郡三崎村に於て使用す此網は使用上より見れば線網の如くなるも其構造及採取の趣向は刺網に等しきを以て今此類に編入せり
網の構造は麻絲にて箸程の太きの繩を縛ひ其繩にて横五尺乃至六尺縦三尺乃至四尺の網を敷し此網の一端に幅一寸餘の割竹を合せたるものを通じて桁となし而して小指よりも稍や細き位の麻繩にて桁の兩端と中央二ヶ所とを括り此四筋の繩を伸はして六尺或は七尺位にて二集に括り繩の端には環を備へ以て網を着くるに便す使用の時に至り網裾へ二目隔てに重量百匁位の石を括り附く但た此

珊瑚採採網



日本水産採採誌

石は潮流の緩なるときは量を軽くする等の斟酌を要す
使用法は天氣晴朗風波起らざるの日をトし漁船一艘に水手三人乃至五人乗組み海上凡十里内外の處に至り網を下す而して其海底の淺深一様ならざるを以て海底の深さを計り假令は百尋の深さの處なれば網の曳網を百三十尋とするが如く若干の餘裕あらしめ水手の一人は舳に在りて曳網を持ち一人は艫に在りて櫓を操り船を横行せしむることなく其潮流

に順ひ流るゝに注意す斯の如くすれば海底に在る所の物は網に罹りて船の順流を阻む此時急に網を伸ばすこと四五尋にして暫時放ち置き網をして十分に其物に纏絡するを得せしむ而して水手皆網を取りて引き揚げ以て網に近づけは一人は元の如く櫓を操て船の動搖を防ぎ且船と網との上下の間を直線ならしめ以て珊瑚の網より脱落することなきの豫防を爲し一人は網を船中に引揚ぐることを掌り又一人は手網に四尺内外の長さの柄を附けたるを持ち傍らに立ち珊瑚の網に罹れるものあるときは其手網を以て本網を扶け脱落を防ぐなり又網を船上に引揚ぐるるとき帆柱にて捲き揚ぐることもあれども然かするときは網の傷損甚しければとて用ふるもの少し採取の季節は陰曆三月中旬より九月中旬までとすれども風波静穏の日にあらざれば探採することを得ず就中緊要なるは潮流にして該地方にては東南より西北へ流るゝを下り山湖と稱へ此時を以て好機とし之に反するものは探求するも益なしと云へり

第六節 建網類

建網は豫め魚類の群來すべき通路を測り其魚道に設置し魚類をして網中に陥らしむる趣向のものにして概ね定設のものとする其設置するに一漁期を通じて移動せざるあり或は數日間にて改置し短きは數十時間にして網を收拾するものありと雖畢竟魚を捕るに當りては其網の全體を運用することなく唯纜に其一部分を開閉して魚を誘致し若くは遁逃を防ぐ等の使用に止まるものあり此種の網は地方に依り建網と稱するあり臺網と稱するあり或は大敷網或は根拵網等と稱し是等は皆規模宏大にして構造も亦頗る複雑なるのみならず其最も大なるものは長さ數百尋に及ぶを以て之を装置するにも數日を要するに至る而して其定設たる所以の理由より推究して以て小者に及ぶときは僅々數尺に過ぎざる小漁具も亦此類に屬す夫斯の如くなるを以て網の形狀に至ては方形楕圓形長方形囊狀等一にして足らず隨て構造装置に於ても差異あるは勿論なりと雖今其規模の最大なるもの及び之に次ぐものを概すれば網の周圍の上縁には密に浮子を附着して以て之を浮ばしめ且其網に數多の網を繋ぎ之に錨を下して其周邊を張り以て網の流動を防ぎ其一面に魚の入口を設け左右に翼網を附け又其口際よ

り一條の網目疎大なる垣網を張布し魚道に當らしめ魚をして先づ其網なるを覺らしめ之を避けて路を覓めんとして彷徨迷惑し竟に網の樞要部分に陥るに至らしむる装置のものを多しとす而して本網は仍ほ入口は目を粗大にし奥に入て細密となるあり或は別に囊網を附着し其陥穽を設くるものあり

凡て建網は定設のものなるが故に装置の場處は陸地を距ること遠からざる處に於てす而して之を装置するには大抵網口を陸地に向はしめて開張するを常とす是其魚の陸地に向ひ岸に沿ふて游泳し來るもの先づ垣網に當り其網あるに驚き逃れて洋上に出んとして遂に網中に迷ひ入るを主眼とすればなり中には網口を洋上に向はしむること無きにあらざれども之を逆網と稱し固より止むを得ざるに出るものなれば其漁利概ね饒多ならざるものなり

元來此種の網は游行魚をして知らず識らず網中に陥らしむる装置なれば恰も蜘蛛の絲線を網羅して飛蟲の之に罹るを待つに相類し其趣向迂なるに似たりと雖回游魚にして自から通路に定まりあるものを捕るに於ては甚だ便なり故に鯖、鰈、鰯、鱈、小鰈、鱚、鱈、鱈、鳥賊等を捕獲するに宜しきも他の魚類は如何なるものにも

必ず用ひ得べしとすべからず又此種の網は水の中層以上を游泳する魚を捕るに適し下層に沈栖する魚を漁するに適せず時として鱈の如き深海魚を捕るものありも是其産卵期に近づき漸く浮游する時機に於てのみするものにして殊に之を用ふるもの少し

前述の如き趣向なるを以て此種の網を装置するには漁場を擇ぶを以て第一緊要の事とす若し漁場宜しきを得ざれば多利を得難きは論なく元來定設のものなれば暴風激浪に遭へば或は網を破壊し或は之を流失して意外の損失を致すことなきにあらず是此種の網の或る地方にては之を設置するの數甚だ多く或る地方にては之を用ふるもの絶てなき等の偏頗ある所以なり而して縦令漁場宜しきを得るも尙其装置の位置適當ならざる可からず位置恰も魚道の要衝に當れば多利あり若し其位置當を失すれば魚は網に陥り難くして逃るゝに易し要するに此網に於ける妙處は漁場恰當にして装置の位置宜しきを得るにあり而して魚を捕獲するの一段に至ては深く漁人の技術を逞ふするを要せざるなり

若し其小漁具にして此類に屬するものに至ては爰に概括して論じ難ければ尙其

網の各條下に就きて説述す可し

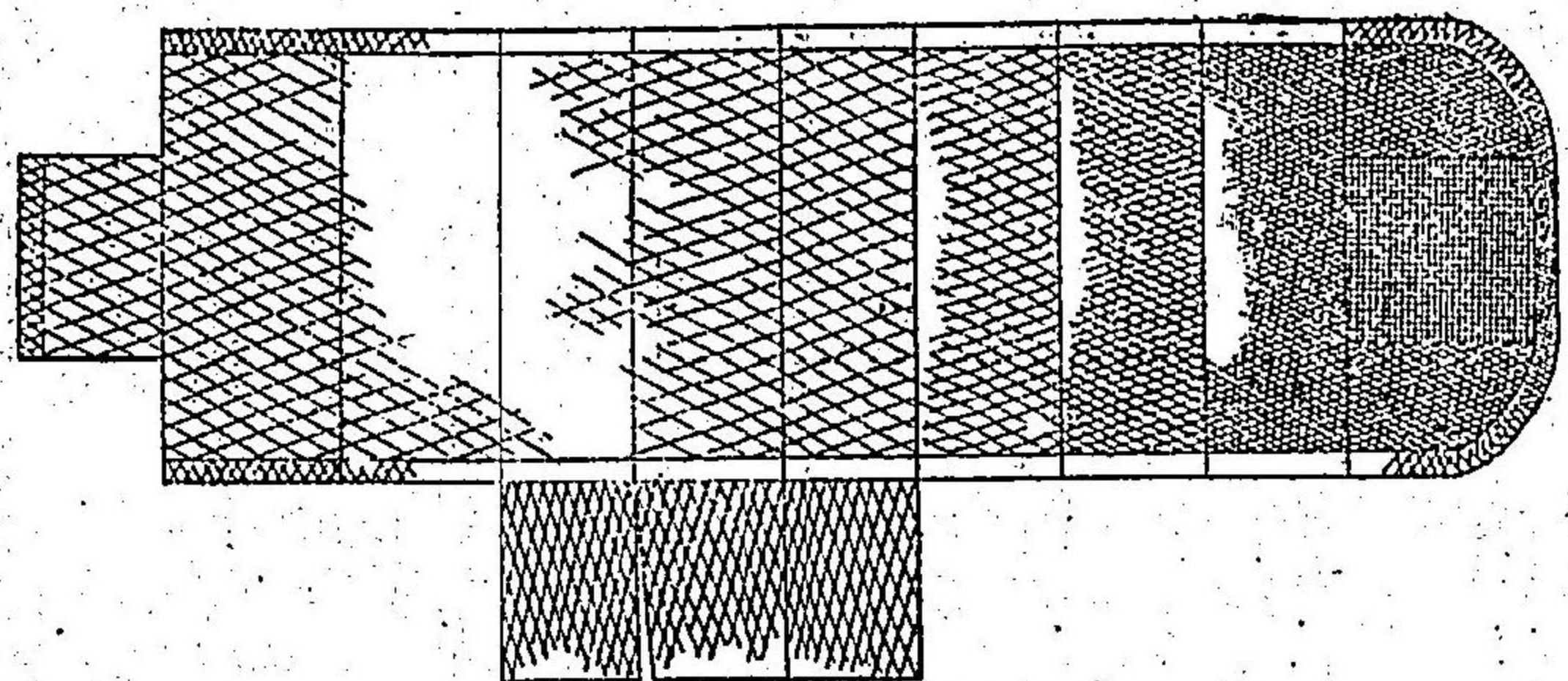
第一 鮪大網

陸前國牡鹿郡に於ける大網は其目的専ら鮪を捕るに在りと雖元來定設漁具なるを以て鯛、鯉、鰻、鮪、姥鯨其他種々の魚類之に入ることあり入れば諏ち之を捕ふ其漁期は夏網秋網の別あり鮪の南洋より來り該地の海を経て北に向ふの時期は八十八夜頃より立秋までの間に在り故に此時期を夏網とす立秋以後寒中までの間は鮪は北よりして南に還る此時期を秋網とす漁場は樹木繁茂し地勢稍や灣環せる處の岬角より岸を距ること凡四百間餘深さ二十五六尋の處に於てし恰も灣を抱けるが如く網を設置す此網の濫觴は口碑に傳ふる所に據れば古昔安倍の一族鳥海三郎初めて構思し漁民に教へて之を爲さしめたりと云ふ果して然るや否を詳にせずと雖要するに該縣下の漁具中無比の大なるものにして其利も亦多し故に舊仙臺藩に於ては風浪等に依り不意に網の破壊せるときは藩主より若干金を與へて修繕せしむるの保護法あり廢藩の後保護の事罷みたるより有志者相謀り

網に用ふる繩を改良し構造を堅固に爲せし爲め能く風浪に堪へ破壊に及ぶこと甚だ少しと云ふ

網の構造は身網と垣網との二者より成る總て藁繩製にして身網のみに底網を附す網の周回大なるものは六百餘間小なるものは三百五六十間とす其身網は上部を桁網と稱し海底に接する部分を底網と稱す桁網の上端には筒トを附す筒とは杉木を以て作れる浮子なり之を網の周邊緊要なる場所に結附け網の沈降を防ぐの用とす而して其局部に隨て名稱を異にす宜しく第十四圖版に對照すべし其沖の目筒メト中の口筒は長さ一丈二尺周圍一丈二尺杭筒キトは長さ八尺周圍八尺並筒ナトは長さ六尺周圍六尺より三尺に至る而して杭筒より沖の目筒に至る間を方言「シド網」と云ひ「シド網」の内杭筒より函尻筒ウシトに至る間を高タカと云ひ函尻筒より沖の目筒に至る間を裏と云ふ又「高ニコメ筒」より「裏ニコメ筒」に至る間の身網の縁に端網と云ふありて其上部を筒に纏付し魚の網に入るとき之を以て其遁逃を防ぐの用に供す其一端には周圍三寸長さ一丈の竹數百本を結び附け以て筒と爲し浮泛力を助く又魚の身網に入るを見て網口を曳かしむる爲め曳繩を附けたるを方言引立と云

鮪建網立圖 第七百四



ふ其位置は網口即ち中の口筒より沖の目筒の間に在り其一端を沖の目筒に繋ぎ平常は海底に沈め置き魚の網に入るを見て引揚げ其遁逃を防ぐものなり
 網目は網端の其一を機なと稱へ葉繩を以て綿布を織るが如くに製す其二及び機脇網を二寸目其三を六寸目其四を一尺目其五六七八九及び引立網を一尺五寸目に脇引立網を一尺目に作り蓋網全部百二十七間とし全形箕の如き状を爲す
 垣網は身網の中の口筒より起り陸に向て大尻手筒に至るの間を前圍と云ふ此圍は甚だ緊要のものにして若し其装置宜しきを得ざれば魚の網に入るを妨ぐること少からざれば最も注意を要す又前圍に横切網一名魚溜(或は魚戻とも云ふ)を附く是既に網口を閉塞したるの後更に魚群の來ることあるも復た網に入る能

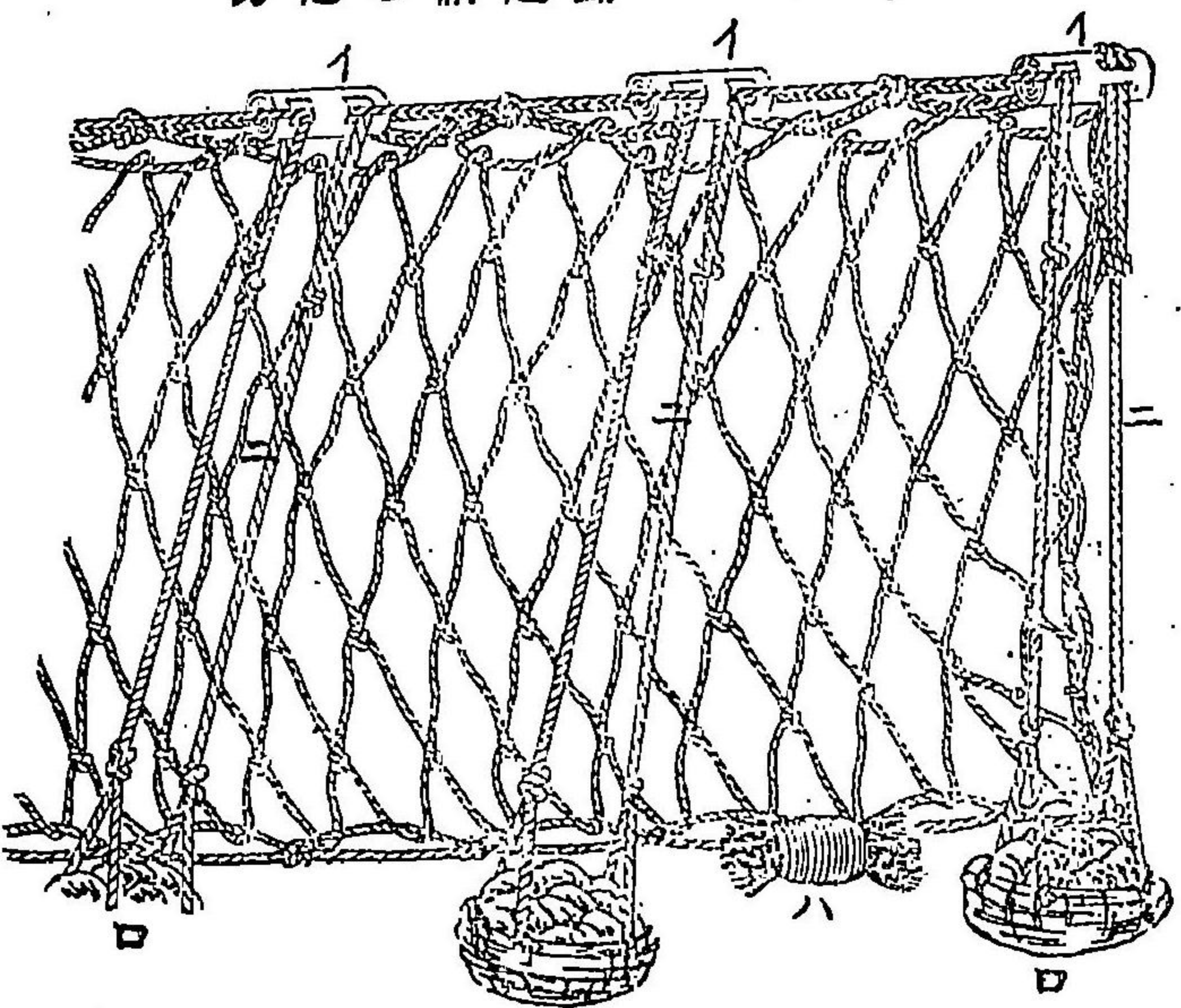
はざるが故に此に溜めて他に去らしめず前の魚群を捕り畢れる後網口を開き其中に入らしめんが爲めに設く故に魚溜の名あり

又二番の鼻筒より尻手筒までの間を二番圍と云ひ三番の鼻筒より尻手筒までの間を三番圍と云ふ各横切網を備ふ此垣網の上縁には徑三寸許の網二筋を合せ之に筒を附けて其沈降を防ぐ又沖の目筒より「小サキ」鼻筒までを「小サキ」と稱ふ是亦垣網の一にして魚溜より網口に入らんとする魚の外に逸出するを防ぐの用に供ふ

凡て垣網は其地形に従て長短と圍ひ方を異にすれども通例は前圍垣網百三十二間其横切網を二十八間とす二番圍は百二十間にして其中の先きの方二十八間は第一横切網より前に出さしむ其横切網は十六間なり三番圍は百十六間にして其先きの方十六間は第二横切網の前に出さしむ四番圍は百三十間にして岸に達せしむ「小サキ」垣網は三十三間とす

碇は凡て石を用ひ「シド」網には筒一個に付量目凡五石位の碇を甲の筒には三個乙の筒には二個と遞番に繋ぎ附け尻網前圍の筒には一個毎に二個の碇を下し其他

方建の網建飾 四百八十八

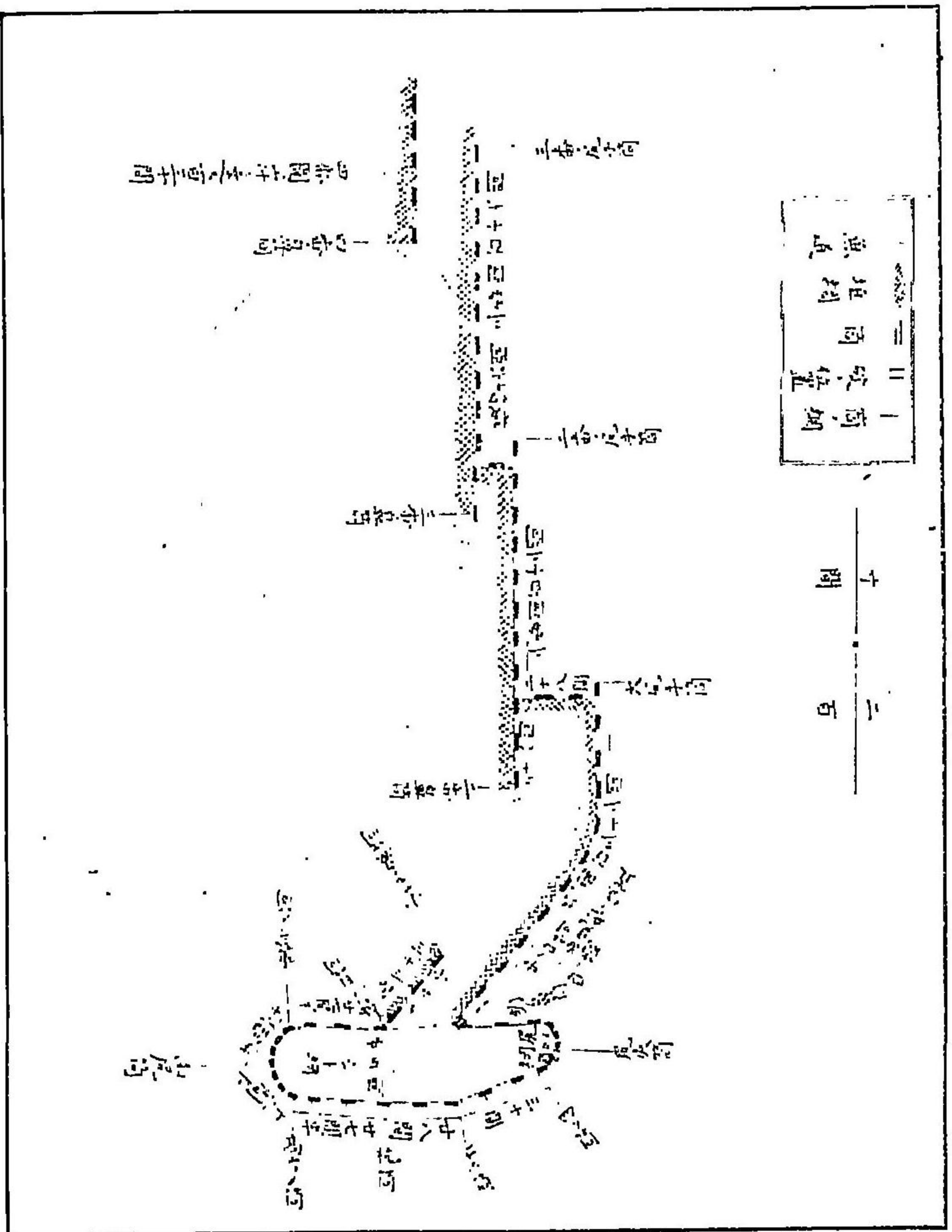


イ 浮子
ロ 碇
ハ 沈子
ニ 碇網

中の口筒沖の目筒杭筒鼻筒及び「シド網」中の緊要なる筒には柴を以て周圍三尺許の輪形を作り之を繩にて籠の如くに縦り中に石數十個を詰めたるものを碇とす方言之を「シカリ」と云ふ碇網は徑二寸五分より四寸に至る各其装置の場所に依て大小の差あり

魚見櫓は身網の後部即ち沖の方の中央に位置を取り身網より凡二十八間の距離にて海中に建て置き魚見番は其頂上に設けたる棚の上に登り居て魚

第十四圖版



方建の網建飾 圖版第十四

の群來を注視す櫓の構造法は尙ほ臺舎部に於て詳説すべし
網装置の順序は最初に魚見櫓を据へ附け次に杭筒次に沖の目筒釣の鼻筒中の筒
等を据へ附け以て網の基礎を作り夫より桁網を入れ筒を附け然る後垣網を入れる
此網代場を定むるには杭筒の位置を擇ぶを第一緊要とす然るに此網は魚道を遮
るの構造なるを以て其位置の如何に依ては他村の漁利に影響を及ぼすこと少か
らず故に中には其關係村方の立會を要する所も之あり此網を全く据へ附け畢る
には人夫三十人日數四十日程を要す毎年陰曆一月下旬より着手し三月上旬に落
成するを常とす

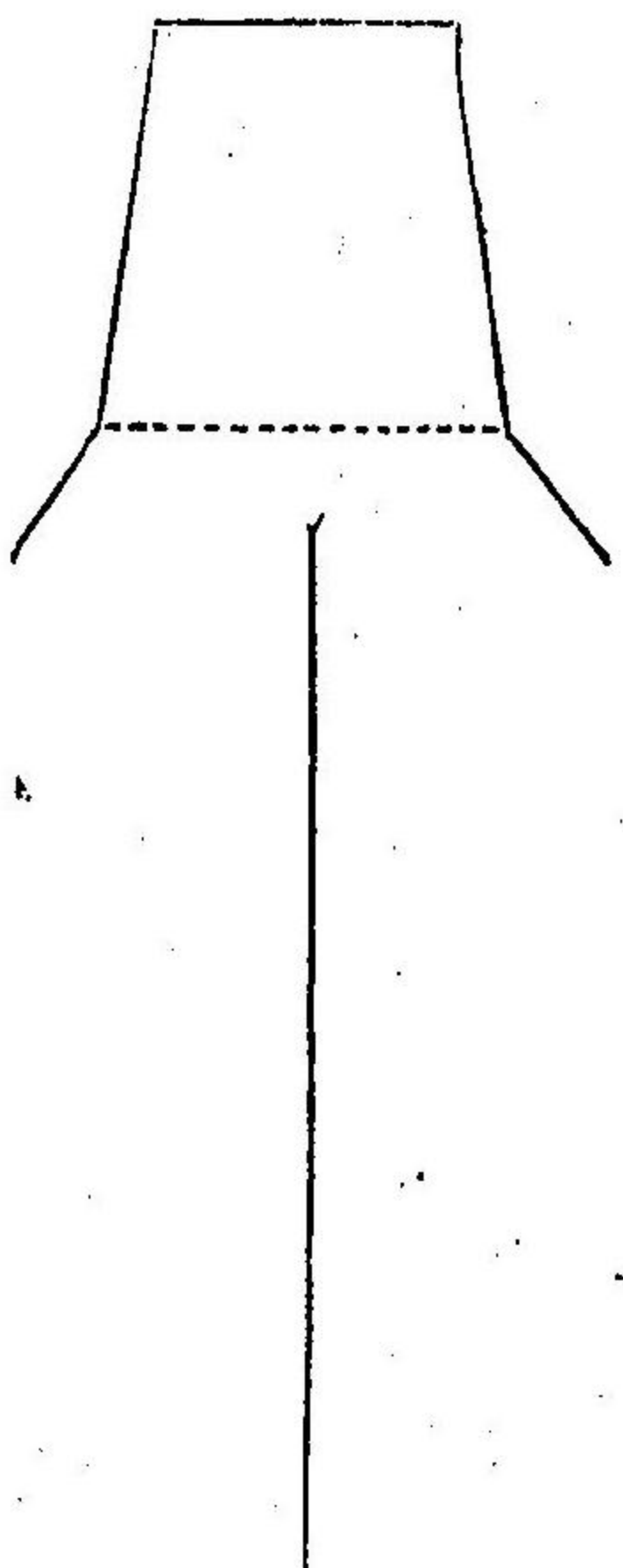
漁法は漁夫の數凡三十人乃至四十五人を程度とし之を五六人づゝに分ち一組と
爲し毎組抽籤を以て頭番を定め内二人は魚見櫓に在て魚の來路を注視し他は船
を網口に繋ぎ魚の入りたるとき魚見番の合圖に依り引立網を引揚げ網口を閉塞
するに備ふ而して魚見番は鮪の網に入りたるを認むれば櫓上に旗を掲げて合圖
を爲し若し鮪の數非常に多きときは旗竿に籠籠を吊して信號となす方言之を「
ボテ」と云ふ陸上に在る衆漁夫等之を見れば直ちに船を漕出す其船は胴船三艘並

搬船十艘乃至二十艘にして胴船は一の大木を刳鑿せる所謂丸木船を用ふ是大魚の奮跳するに觸るゝも毀傷せざるを旨とするが故なりと云ふ此胴船の至る頃は已に魚見船にて引立網を引揚げ網口を閉塞しあるを以て胴船は其處に並列し尻夾筒の方より網を繰揚げ其繰揚げたる網の一端は漸次海中に落し終に魚捕りの處まで魚を追ひ詰め釣を打掛け捕獲して之を運搬船に移し陸上に送らしむ又筒の數非常に多きときは別船を以て網の周圍を衛護す其法高ニコメ筒より裏ニコメ筒までの網端を持ち魚の遁逃を防ぐにあり又網中の魚を未だ全く捕り盡さざる中に復た引續き魚群の來るときは引立網を揚げ置き前魚を捕り盡したる後引立網を下し次の魚をして身網に入らしめ前の手續を以て之を捕ふ若し大群にして網口に入り盡さるときは「小サキ」より二番鼻筒までに別に五厘網と稱する細繩製二尺目に編みたる網を下し魚の他に散逸するを防ぎ置き漸次に魚溜より網口に逐ひ入れて之を捕獲するなり

第二 鯨建網

鯨は本土に於ても北方の地にては漁獲ありと雖其盛漁あるは北海道に比肩すべきものなきことは衆の知悉する所なり然れども全道の沿岸悉く其漁場なるにあらず主たる漁場は西海岸と東海岸の東部とにして就中西海岸即ち日本海の沿岸に於て好漁場多しとす之を漁する網罟は建網刺網曳網の三種にして其

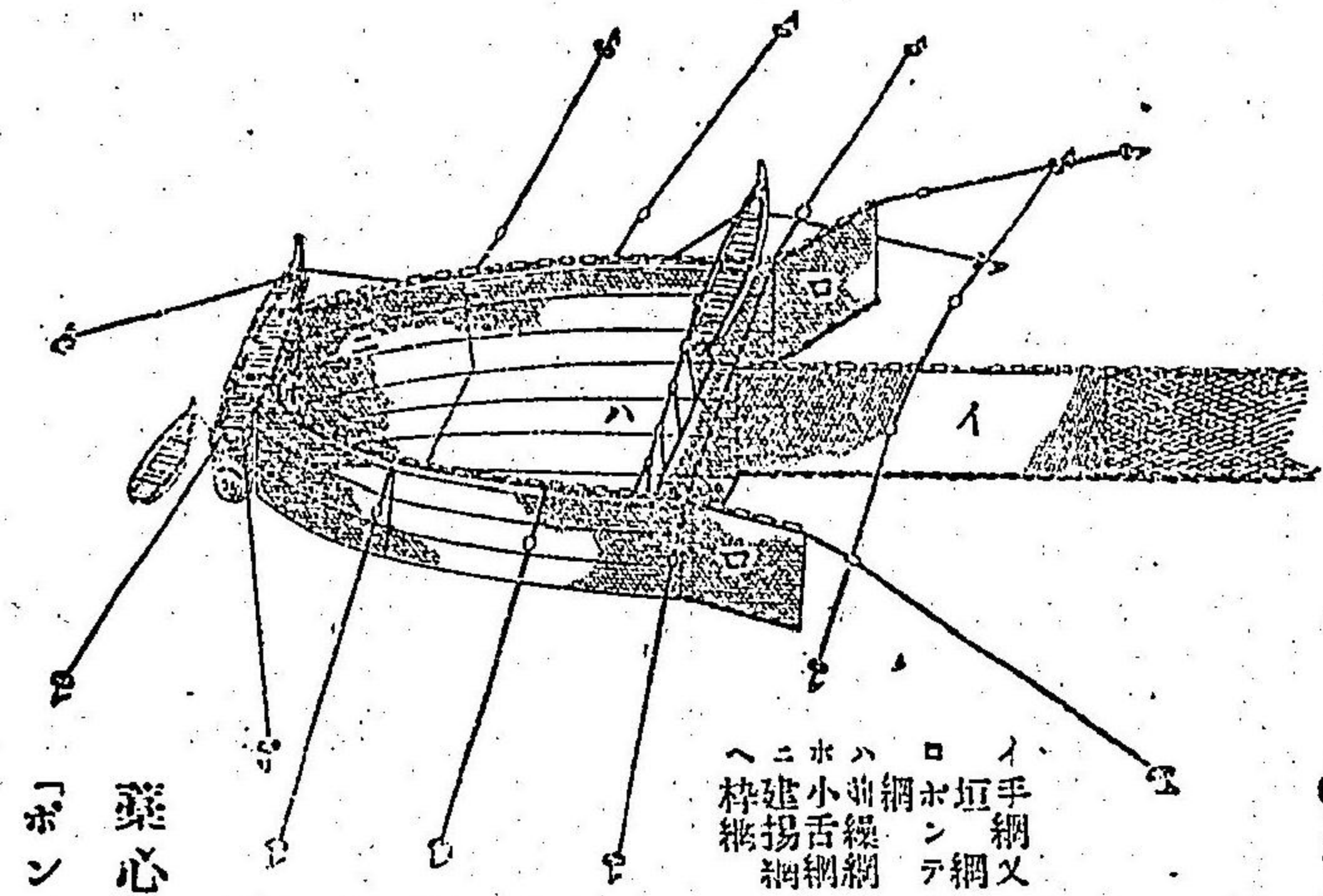
圖九百第 形全置裝網建鯨



大利を占むるものは建網に在り抑北海道に於ける建網に「イキナリ網」「カナヲリ網」「カク網」「フクベ網」「マイボウ網」の數種ありと雖主として鯨漁に用ふるものは「イキナリ網」とす而して鯨は北海道重要

漁業中の重要なものなるが故に單に建網と稱すれば則鯨漁の「イキナリ網」を謂ふなり其漁季土地に由て遅速あり網の構造も亦一ならずと雖今其一を掲ぐ北海道西海岸に於ける鯨漁業の季節は早き地は三月十五日頃に始まり五月中旬に終り遅き地は一ヶ月許後れて始まり六月十日頃に終る其初期即ち清明前後のもの

網建練 四百四十八



のを走り練と稱へ春土用の頃のものを中練と謂ひ

土用後のものを後練と云ふ漁場は海岸より七

十間乃至二百五十間の間を普通とし中には三

四百間の遠きに至る處あり深さは六七尋より

イ手網又
ロ垣網
ハ前線網
ニ建揚網
ホ小舌網
ヘ棹網

が會て第三回内國勸業博覽會に出品せしもの

に就て記さんに手網ボシテ網前線網小舌又奥

車とも云ふ建揚の五者を以て全體を爲す其裝

置の様式第百九圖の如くにして之に棹網を添

ふものとす

手網は上圖中の(イ)にして所謂垣網なり秋田産

薬心製繩網にして網目四寸丈け二丈五尺長さ十丈

「ボシテ」網は其(ロ)にして同上の繩網二反半を用ふ丈

け凡て二丈五尺長さ二丈前線網は其(ハ)にして麻絲網三寸目横五十目掛長さ五尋
を一反とし十反を用ふ幅凡て六丈長さ七丈五尺小舌網は其(ニ)にして麻絲網一寸
目横五十目掛二十二反を用ふ幅凡て五丈五尺長さ六丈五尺建揚は其(ホ)にして同
上の網地九反を用ふ幅凡て二丈二尺長さ三丈とす(ヘ)は棹網にして同上の網目な
れども特に太き絲を用ひ三十反以上を要す幅凡て六丈長さ四丈五尺其兩端に線
網を具ふ使用の際には之を二折して縫合せ囊狀を爲さしむ線網の部は其囊口と
なる此網は最も堅固なるを要す故に良質の麻を擇て製す之を裝置するには先づ
第百九圖の如く網を互直し錨を以て之を鎮定し而る後網を結び付け張下す其要
手網を海岸より一直線に沖に向て張出し身網は陸に向て口を開き魚の兩側より
來るもの先づ手網に遮られ次に「ボシテ」網に支へられ終に迷ふて身網中に陥らし
むるに在り

漁法は起し船一艘に漁夫十人乃至十人餘乗組み口前の脇に備へ帽子船には漁長
他の二三の漁夫を率ゐて乗組み船下に棹網を備へて建場に在り船頭は斷へず網
中を覗ひ魚の入るを認むれば號令一喝聲に應じて起し船は口前に乗出し前線網

より漸く繰り揚げ魚をして小舌網に乗らしめ猶繰迫めて建場に至れば船頭は網を弛めて建揚を卸し魚をして建揚を超て船底に吊る所の枠網に入らしむ故に枠網の縁の一部と建揚とは相綴合し置くなり而して魚枠網に満ちたるときは建揚と分離せしめ更に代りの枠網を前の如く装置し其分離せしめたる枠網は波靜かなる處に引き行き其中の魚は搦網にて抄ひ捕り別に備へたる磯船に移し陸地に運搬せしむるなり

第三 根拵網ネコツギア

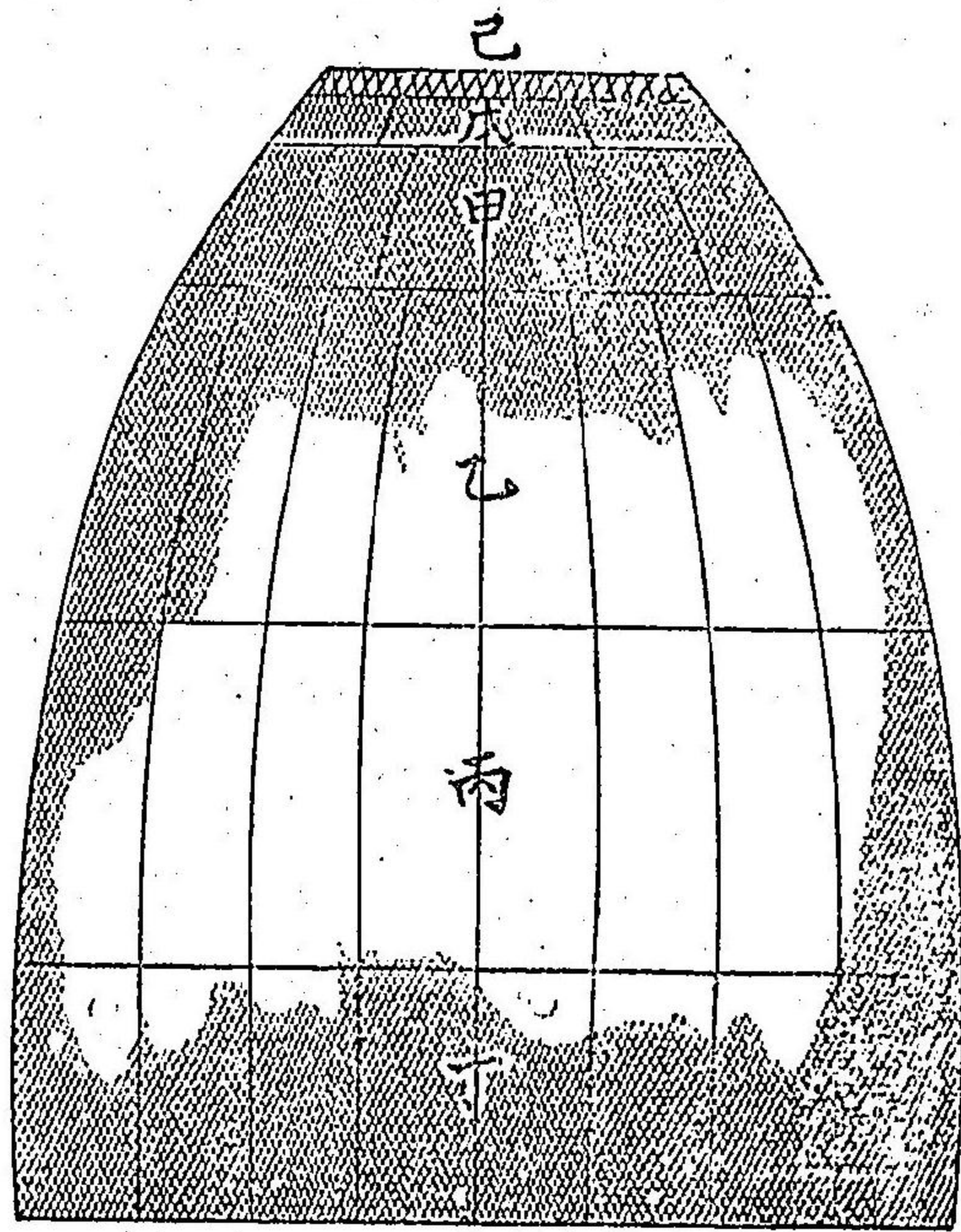
伊豆國賀茂郡伊豆山村等相模接近の各浦より相模國足柄下郡真鶴村方面及び小田原町近傍等に於て多く装置する處の根拵網は大魚は鮪、鰯、鯉の類より小は鯖、鱈、シラスの類に至るまで捕獲して漏す所なし此網の創始は天保年間により傳へて曰ふ當時加賀の人某豆相の間を遍歴し伊豆山村に足を駐め海面の實況を視察し此網を用ふるの利あるを示し之を創始せんことを鼓舞せり然れども該地人民は専ら農樵を事とし漁業に疎く且網の構造巨大にして費用多額を要するが爲

め當時之に着手する能はずして止む後漸く近隣に傳聞し有志者老漁と相謀り之を新設せしに漁業頗る利ありしを以て次第に増加し今は之を用ふること甚だ盛なり漁業の季節は陰曆二月即ち彼岸前後より七月下旬までの間を春網と稱す近來に至り八月以後十一月までも此漁を爲す之を秋網と稱す漁場は豫め定處あり大抵海岸を距る二三百間乃至四百間までにして深さ三十五六尋乃至四十二三尋の處とす

此網を布設するには先づ漁船二艘を以て沖合に漕出し適當の位置を見定め左右に分ること凡五十間にして各二條の大綱に土俵數十を結て沈下し其上端に浮竹一束を結び附く之を端先と云ふ次に端先を距る凡百十尋許の沖合に臺木と稱する大なる浮子を泛べ之に臺碇網八條を結び又臺碇網の末に土俵數十を結び附け海底に沈下し風浪の爲め臺木の流動するを防ぐ次に側網と稱する網に浮竹數十束を結附たるものを以て各其一端を臺木の兩邊に結附け之を引伸はして端先に至り浮竹に結ふこと左右共に同ふし以て網を張るの基礎を定む端先の浮竹は周圍七八寸のものを長さ一丈二尺に切り數十本を束ねて周圍一丈位とし三ヶ所

を縛り別に網の周圍一尺位なるを其中に通し端を竹束の外に出し以て網を緊く

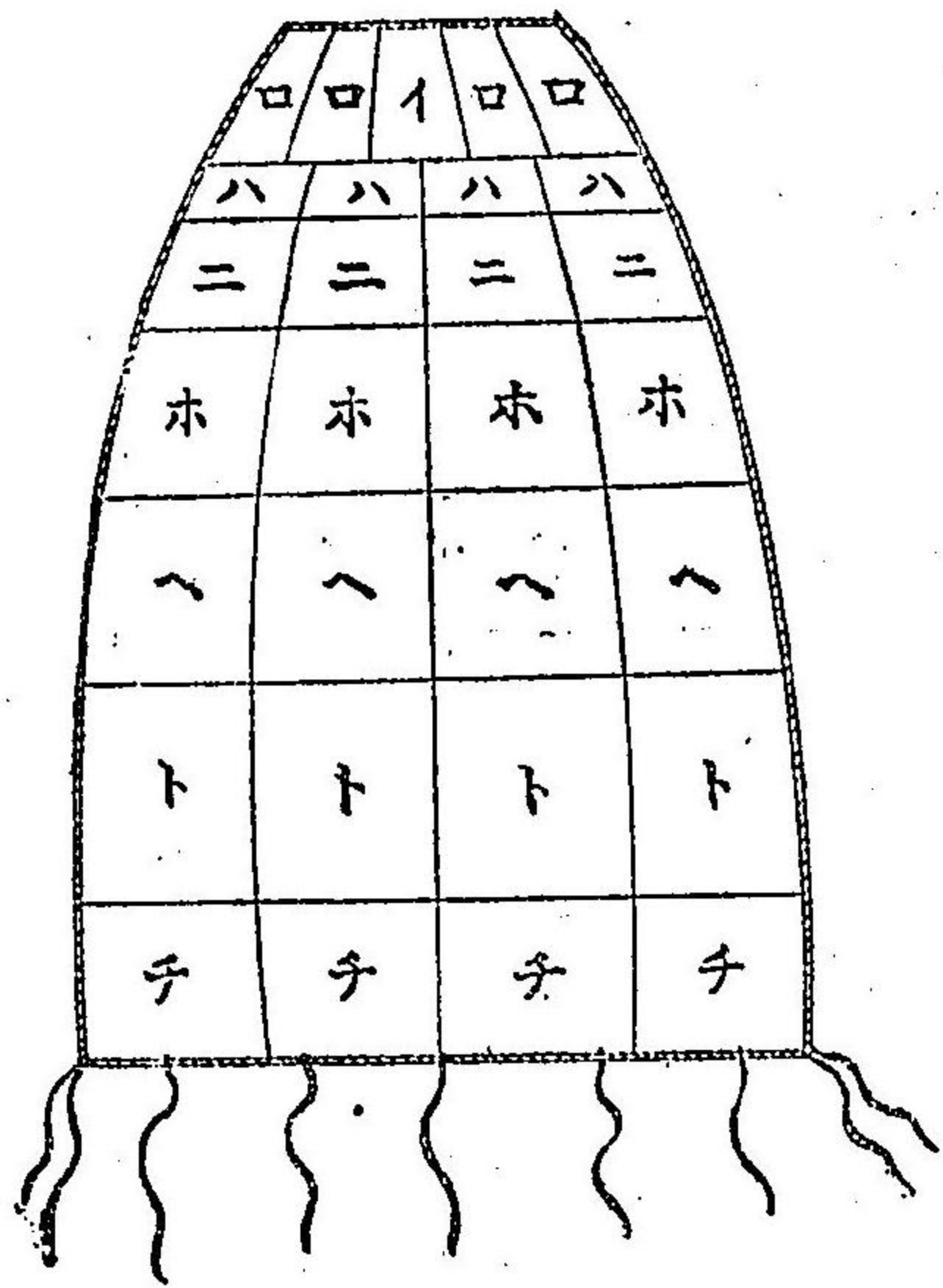
部捕魚の網拵根 圖一十四第



心を用ふ構造は第一百十二圖中の(イ)は魚捕りにして尙其魚捕りの仕立方を細説す

石を充たし其中央を六寸周圍位の藁網にて縛る其總數凡八百四五十俵を要す臺木は杉又は檜の周圍凡五尺位の丸材三本乃至五本長さ四尺二寸許のものを聯ね横に「ヌキ」を通して枠組となす右の装置を畢へたる後網を張る其網は大綱突出網の二者より成る大綱は魚捕りの部分は麻絲製にして他は藁

上立仕の網拵根 圖二十第

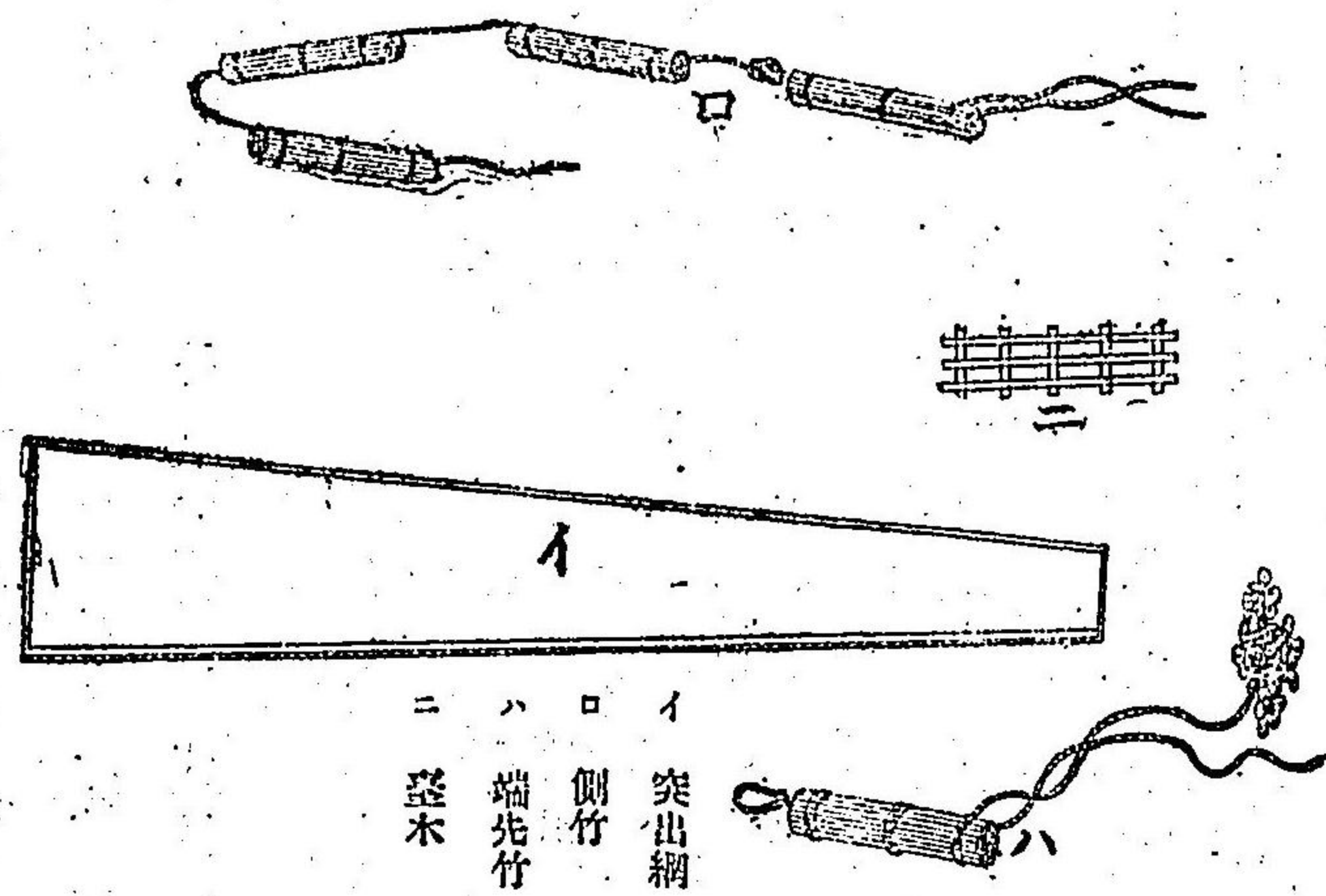


れば第一百十一圖の如く其圖中の(甲)は五間十四節百掛を六枚横繼にして豎目に用ふ長さ三尋乙は同上八枚長さ七尋丙は(乙)に同じ丁は同上八枚長さ五尋戊は前垂と稱ふ同上四枚長さ一尋己は荒目と唱へ三つ刺六掛一枚長さ二尺豎目に用ふ以上

の網地を上を一尋二尺左右を十四尋下を七尋二尺に縫ひ締め以て魚捕りを仕立揚く(ロ)は五寸目十四尋横繼豎目に用ふ目數横に下にて七十五掛上に至り十四掛までに落す之を魚捕りの左右に二枚つゝを附く以下の各網は皆横繼豎目なり(イ)は五寸目五尋上部横七十五掛下部

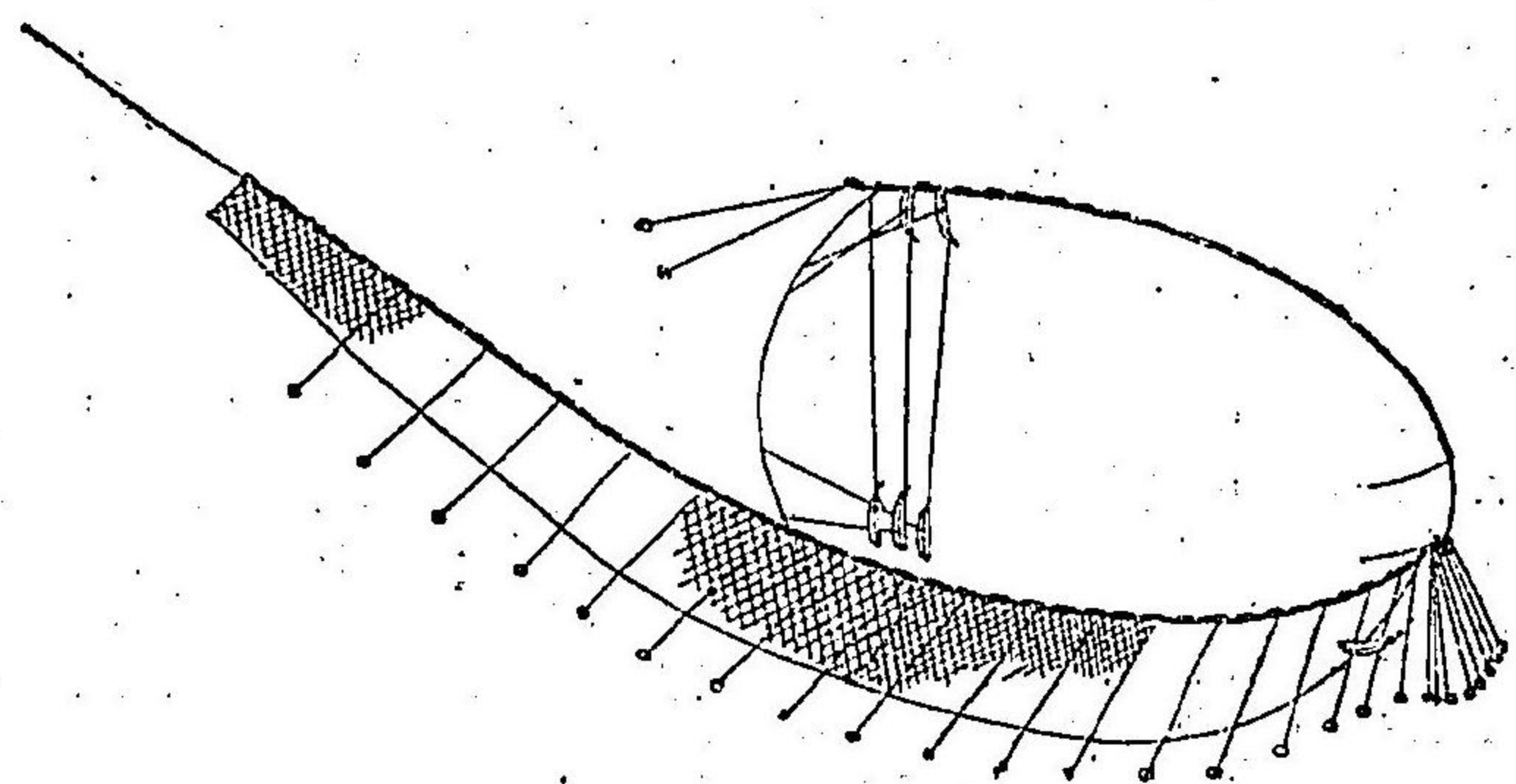
百十掛(ニ)は一尺目十尋上部横五十五掛下部七十五掛(ホ)は二尺目十二尋上部横三十五掛下部六十五掛(ヘ)は四尺目百二十立にして九十六尋位となる上部横三十三掛下部三十六掛(ト)は五尺目立即ち百尋上部横三十掛下部三十三掛(チ)は六尺目十

根拵網副用器具 圖三十四



二立にして十四尋となる上部横三十掛下部三十三掛とす而して之を棕櫚製周圍三寸五分許の縁繩に結附け網口の幅四十尋奥にて幅四尋左右五十尋に仕立揚ぐ
突出し網即ち垣網は網目五尺とし網丈け及び横目掛数は一定せず都て漁場の景況に従ふと雖網丈けは裾の海底に達して猶少しく餘裕あるを度とし長さは海岸に達せしむるものとす
網を張るの順序は網奥の幅四尋の處を臺木の丸材の上に懸けて「ヌキ」に結附け夫より左右を側網に結び而して網奥より一尺目までの間は側竹を三尺距離に附け網目の疎くなるに従て距離を多くし終に六七尺の距離と

根拵網裝置全形 圖四十四



なす又臺木の中の九太より九條の土俵網を下し一條毎に十五俵乃至十六七俵の土俵を附け海の深さ四十尋位ならば網の長さ九十尋とし臺木の背後に向て斜に張下す其網は藁繩製にして周圍七八寸なり網の左右には各十七八條の網を出し之に十俵位つゝの土俵を附け同じく斜に張下す端先に用ふる網は特に太くし周圍一尺二寸位のもの二條にして之に六十俵乃至八十俵の土俵を附く網の長さは海の深さに應じ端先竹の頭の水面上に出没する程ならしむるを度とす之を装置し畢れば網口の左側若くは右側に接續して突出し網を張る此突出し網は潮流の模様により左右孰れか一方より出し末端は海岸に達せしめ上端には一丈距離に側竹を附け網裾には二間距離に重量二貫匁の石を附け尙ほ別に百

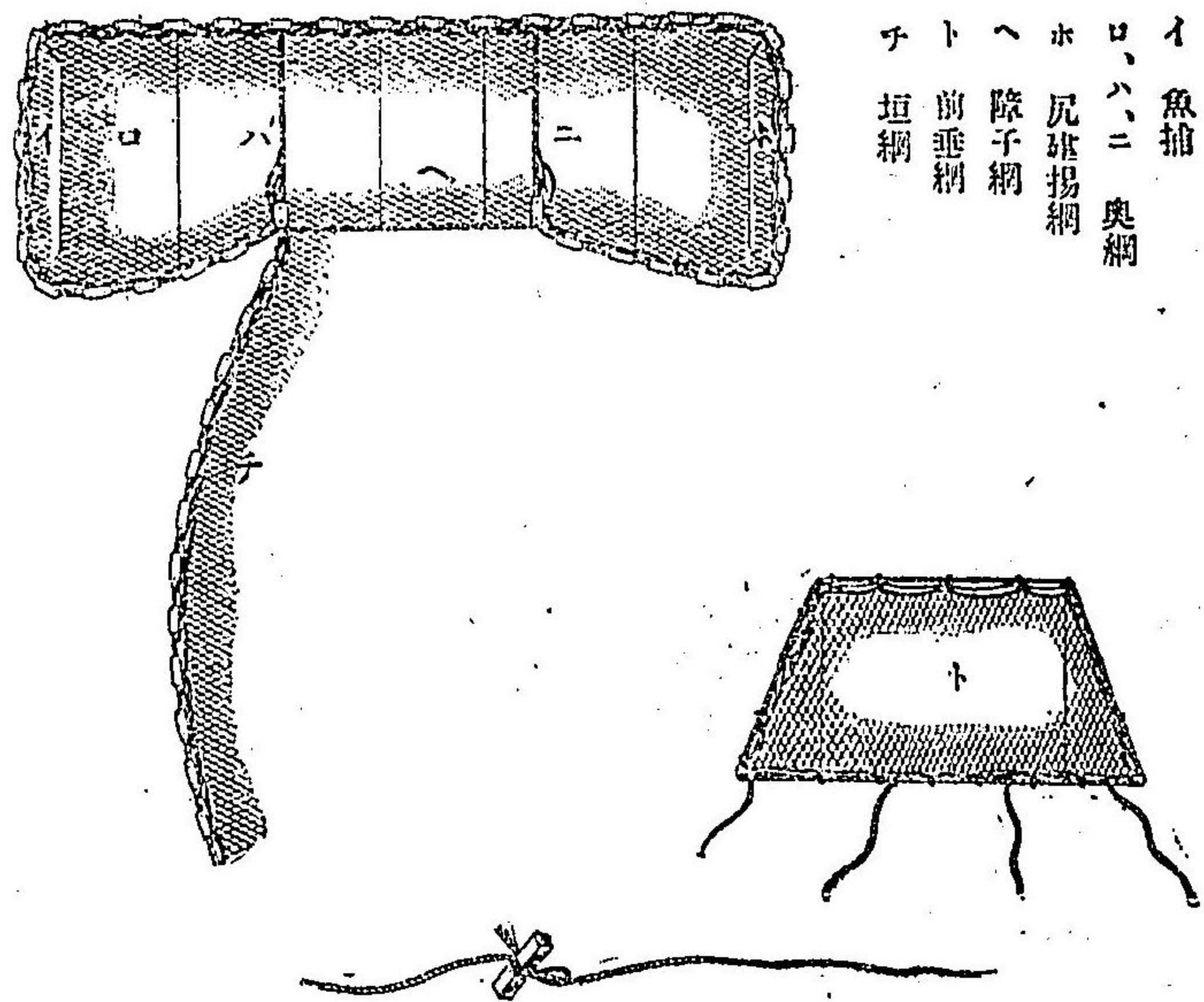
尋毎に網二筋つゝを出し一筋毎に土俵四五俵を付け其一筋は内側に下して網を直立せしめ一筋は外側に下して斜に張り末端には留め碇と稱へ一筋の網に七八俵の土俵を付け斜に張り下し以て網の激動を防ぐ

漁法は常に漁船五艘を備へ外に魚見船一艘合せて六艘を要す其右方海岸に寄りたる方即ち網口にあるものを大中船と稱し漁夫七人乗次を地の中船とし五人乗次を「アマ」船とし六人乗左方側網の端に位するを沖の中船とし五人乗次を沖の脇船とし亦五人乗にして魚見船は網の三尺目と四尺目と相聯絡する邊にありて魚群の網に入り来るや否を監察し魚來りて網に入るを認むれば各船に指揮して網口の左右より繰揚げ終に魚捕りに逐込み大魚は打鉤を用ひ小魚は撻網(方言「サジ」)を以て抄ひ捕るなり

第四 鱈建網

陸奥國下北郡脇野澤村字九艘泊に於ける鱈建網は楯引福藏と云ふ者始めて明治十九年より使用せる所にして漁期は冬至十日前より始め大寒の終りに至る漁場

網 建 鱈 圖 五 十 百 第



の深さは十五尋許にして水底平砂又は處々に小岩ある所なり

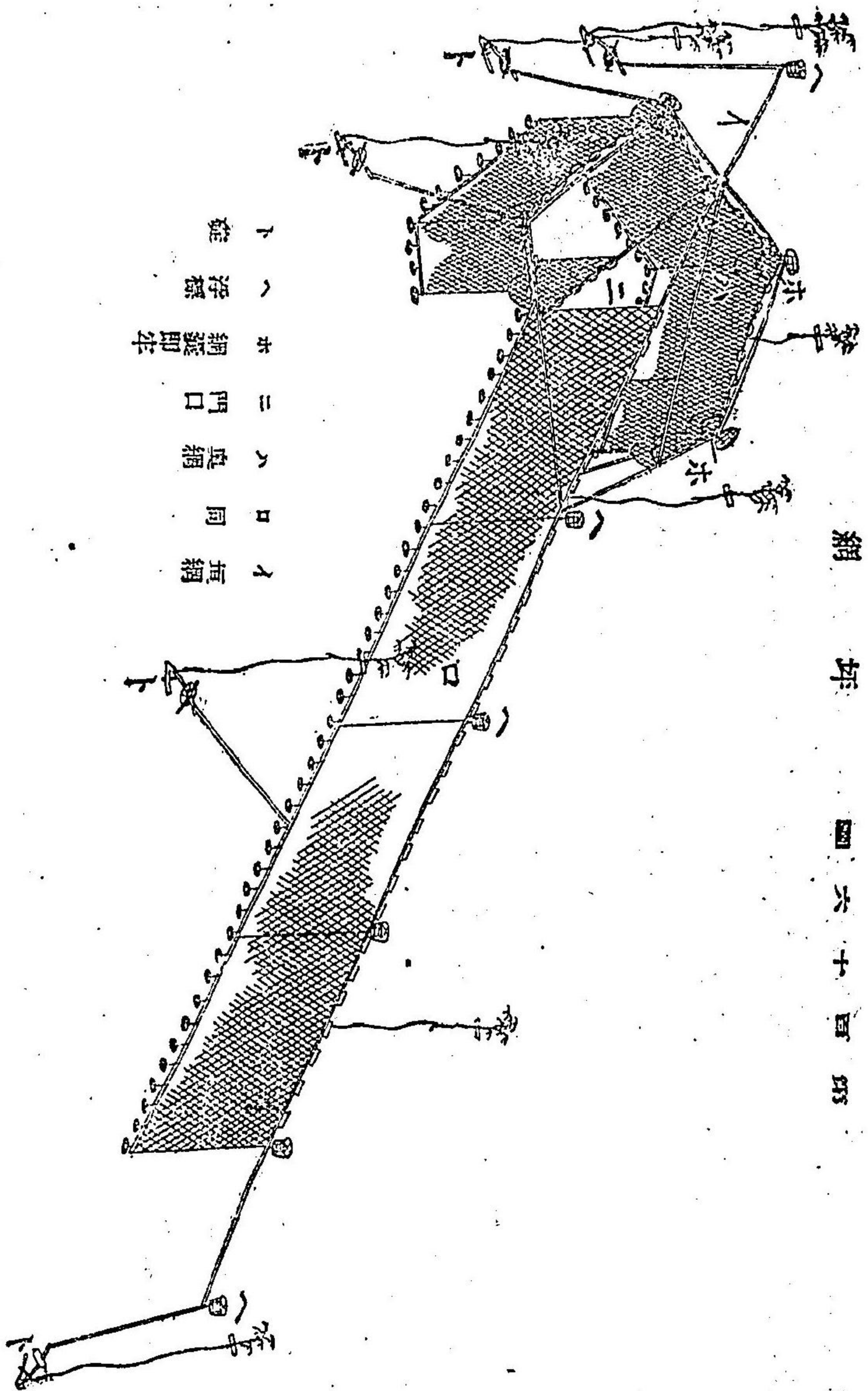
網の構造は圖中(イ)は魚捕りにして網目三寸五十目掛十五間切六枚を合せ九間の肩繩に結卸す(ロ)は三寸目五十目掛二十間切二十二枚(ハ)は同目五十目掛十間五枚(ニ)は同十五間切二十二枚(ホ)は尻建揚網と稱し同十五間切(ヘ)は障子網と稱し同五間半切六枚を合せ之を肩繩に結卸すこと(ロ)は片側十三間(ハ)は七間(ニ)は九尋二尺五寸(ホ)は九尋(ヘ)は四尋半とす(ト)は前垂網と稱し三寸目五十掛十一間切三枚を合せ其左右へ

同目二百目掛十一間一ツ目まで目を落したる「サ」網を附け之を渡り網九尋に結卸し魚の入口に附設す(チ)は垣網にして藁繩を以て製す網目四寸五十目掛九十間五枚を合せ之を六十五尋の肩繩に結卸す肩繩は藁三ツ打徑一寸五分位浮子は杉の角形にして長さ二尺五寸幅四寸五分厚さ三寸五分のものを用ひ圍網に一個の重量百匁位の沈石を三尺距離に附く

漁法は漁夫十二三人にて出船し先づ函眼鏡を網圍中に下し水中を覗ひ十分魚の入たるを認めれば前垂網を引揚げ次に尻建揚網より魚捕りへ魚を逐込み撻網を以て抄ひ捕るなり

第五 坪網

坪網は關西及び瀬戸内地方にて多く用ゆる所の定設網にして地方に依り主として捕獲する魚の種類を異にし隨て其季節は勿論網の構造にも差異ありと雖要するに時に従ひ岸に沿ふて群來する浮遊魚をして網中に陥らしめて捕獲するの具なり今其一二を擧ぐ



漁 坪 網 図 六 十 四 第

和泉國沿海に於て用ふる坪網は主として鱸を捕るものにして漁業の季節は四月より十一月までとし漁場は岸を距ること十二三町以内の處とす
網の構造は先づ一筋の麻繩長さ百四十五尋のものに碇を繋ぎ上には浮樽を附け岸より沖合に向て水面に張り亘す之を心繩と云ふ而して其心繩の先端より凡三十五尋許を退きたる處より藁繩網の網目一尋丈け十尋長さ八十尋なるを附け上には浮子下には沈子を附け以て水中に建切り之を垣網となす次に此藁繩網の先端を距ること五尋許の處に心繩と直角に丈け七尋一寸二分目の麻繩網を張り其兩端を再三曲折し末端を更に曲折し網圍の内部に向しめ略ぼ四角形となし沖の方と左右との三面は長さ十尋次の曲折の處は四尋内部へ向けたる處は二尋とし每曲折の六隅の上層に浮樽を附け又此に網を繋ぎ碇を沈め網の上端に浮子下端に沈子を附し幾んど水中に上面なき蚊帳を吊り下げたるが如き狀を爲す而して内部に曲折せる兩翼と藁繩網との間に各二尋許の餘地を存す是則魚をして網裏に入らしむべき門口とす又網の曲折せる六隅浮樽の下に徑一尺五寸許の孔を開き其孔の外側には別に細目の網囊を縫ひ着く是元來「コノシロ」の性たる物に觸る

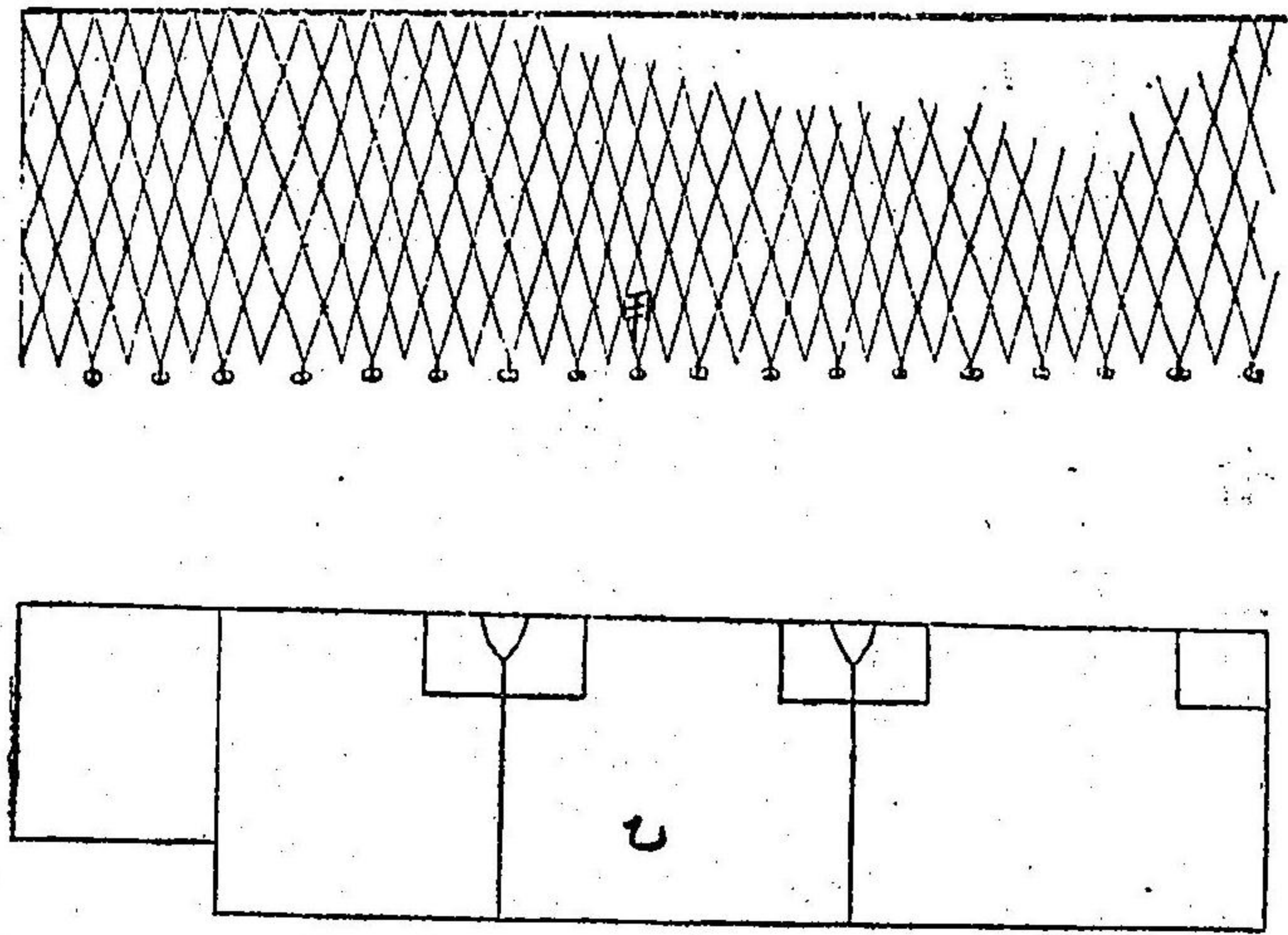
ゝときは驚きて忽ち水面に浮ぶものなれば潮に伴ひ遊ぎ來りて藁繩網に支へらるれば其細目を潜り逃るゝことを爲さず却て之を沿ふて沖に出でんとして終に門口より迷ひ入り四面の網に衝突して愈々驚き水面に浮び出て頻に脱路を索め其網隅の孔を見れば即ち之より逃れんと欲し直ちに孔を潜りて竟に網囊中に陥るなり此網囊を牢と稱す

漁法は前記の手續を以て網の装置全く了れば船を網側に繋ぎて魚の牢に入り來るを待ち其入るに隨ふて上口より撻網を入れて抄ひ捕るなり然れども多くは藁網の目に刺すものなるを以て牢を繰り揚げ罹りたる魚を捕り收むるなり此漁業は晝夜共に之を行ふを得べし船は一艘に漁夫一人若くは二人を要するのみ

第六 袋坪網

播磨國尾上清八の第三回内國勸業博覽會に出陳せる袋坪網と稱するは鱸コノシロ其他雜小魚を捕獲するものにして前者坪網と大體に於ては異なる所なきも藁繩網等に少しく改良を加へし所あり尙其構造を細説すれば垣網は藁繩製にして丈け七尋長

柵網 四八十四第

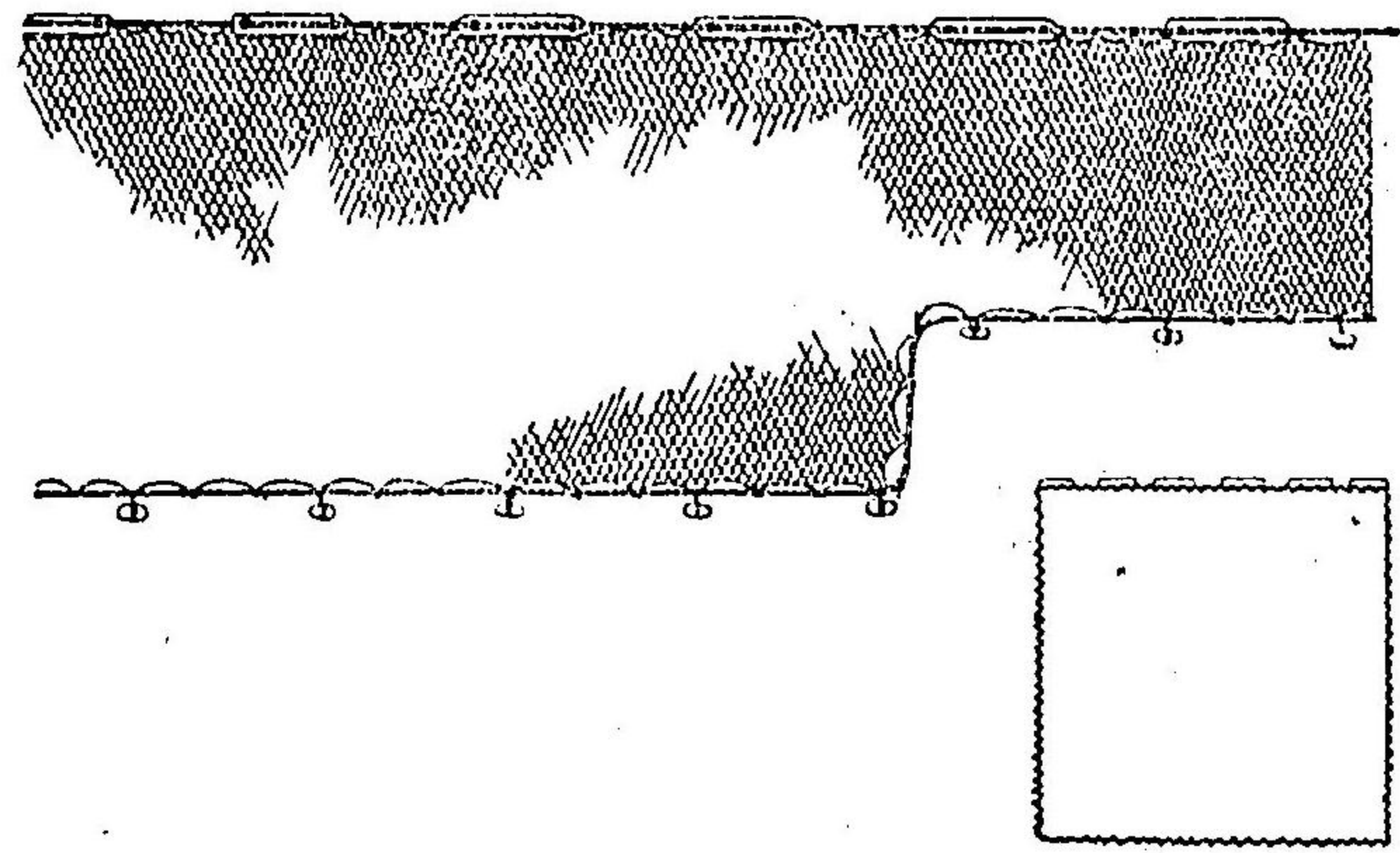


甲 網の構造 乙 装置

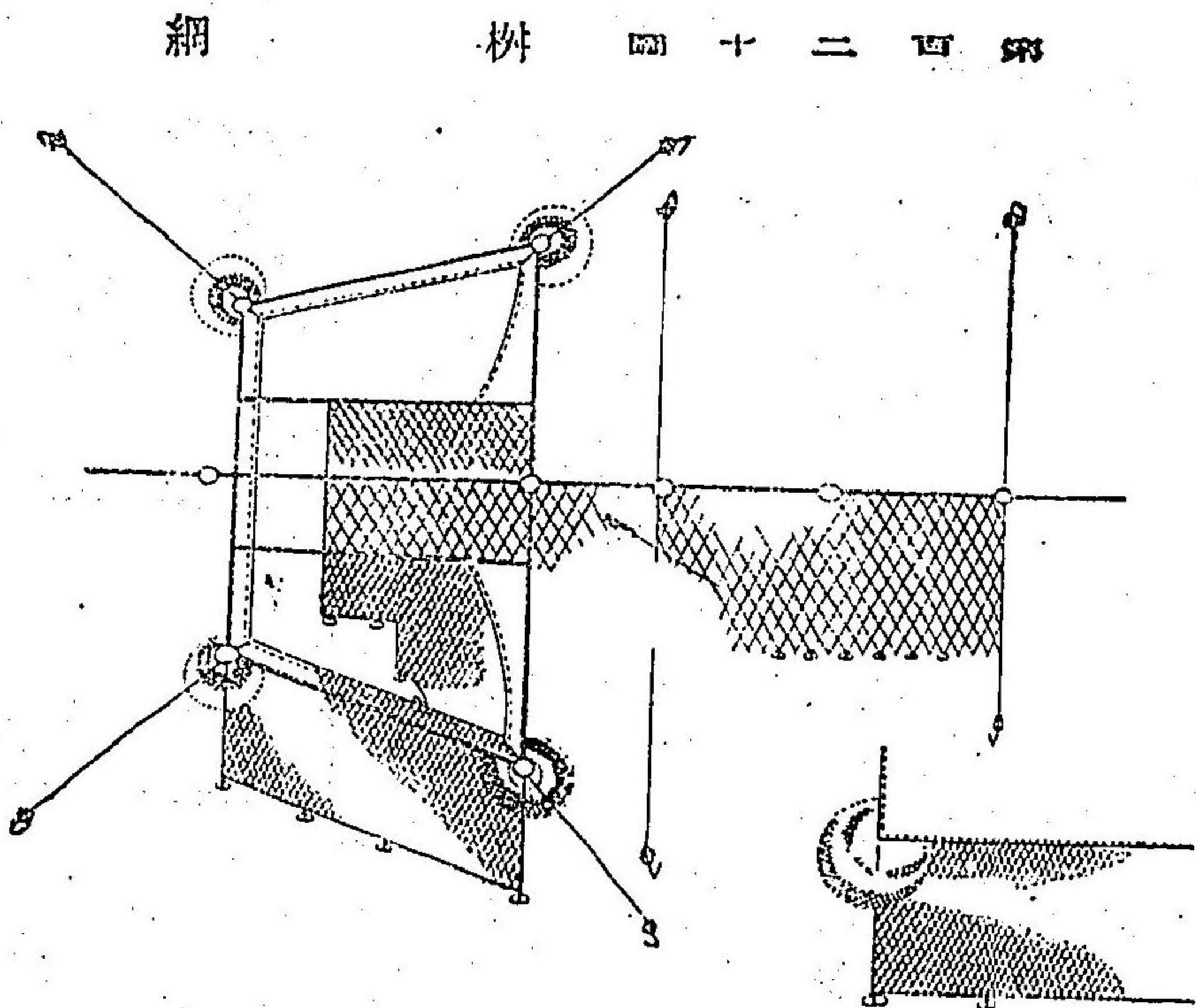
柵網は前者坪網と同趣向のものにして構造装置に於ても大差なしと雖其名を異にするを以て茲に其一を掲ぐ豊前地方に於ける柵網は主として鱈鯛鯛鳥賊飛魚等捕るものにして漁業の季節は陰曆十二月中旬に始め翌年六月中旬に終る漁場は海岸を距ること十町内外にして深さ五尋位海底泥砂界を爲すが如き處を良しとす

網の構造は柵網、牽網、垣網の三者を以て成り柵網は柵繩に垣網は心繩に附けて構成す柵繩心繩とも麻製にして柵繩の長さは總計四十四尋其内十四尋は柵口にして他の三方は各十尋とし一隅毎に

柵網 四九十四第



浮樽を附く心繩は長さ四十四尋にして柵繩を張りたる後面より岸の方に向て一直線に張り直し柵網の方を心繩元とし浮樽一個を附け岸の方の端は錨を以て碇置し又浮樽一個を附く之を錨元と云ふ又柵口十四尋の中央を心繩三十五尋の處に括り合せ是亦浮樽一個を附け尙ほ是より錨元までの間にも浮樽二個を附く浮樽は總計九個各一斗入位のものを用ふ心繩に附くる垣繩は長さ四十尋丈け六尋餘葉製にして堅目十一とす柵繩に附くる柵網は麻絲製にして長さ四十尋其左右後の三面に當る間は網丈け四尋四尺除左右端五尋づゝは前面に折返す所にして丈け四尺を縮め四尋となす之を袖網と云ふ浮子は長一尺幅四寸厚さ一寸五分の

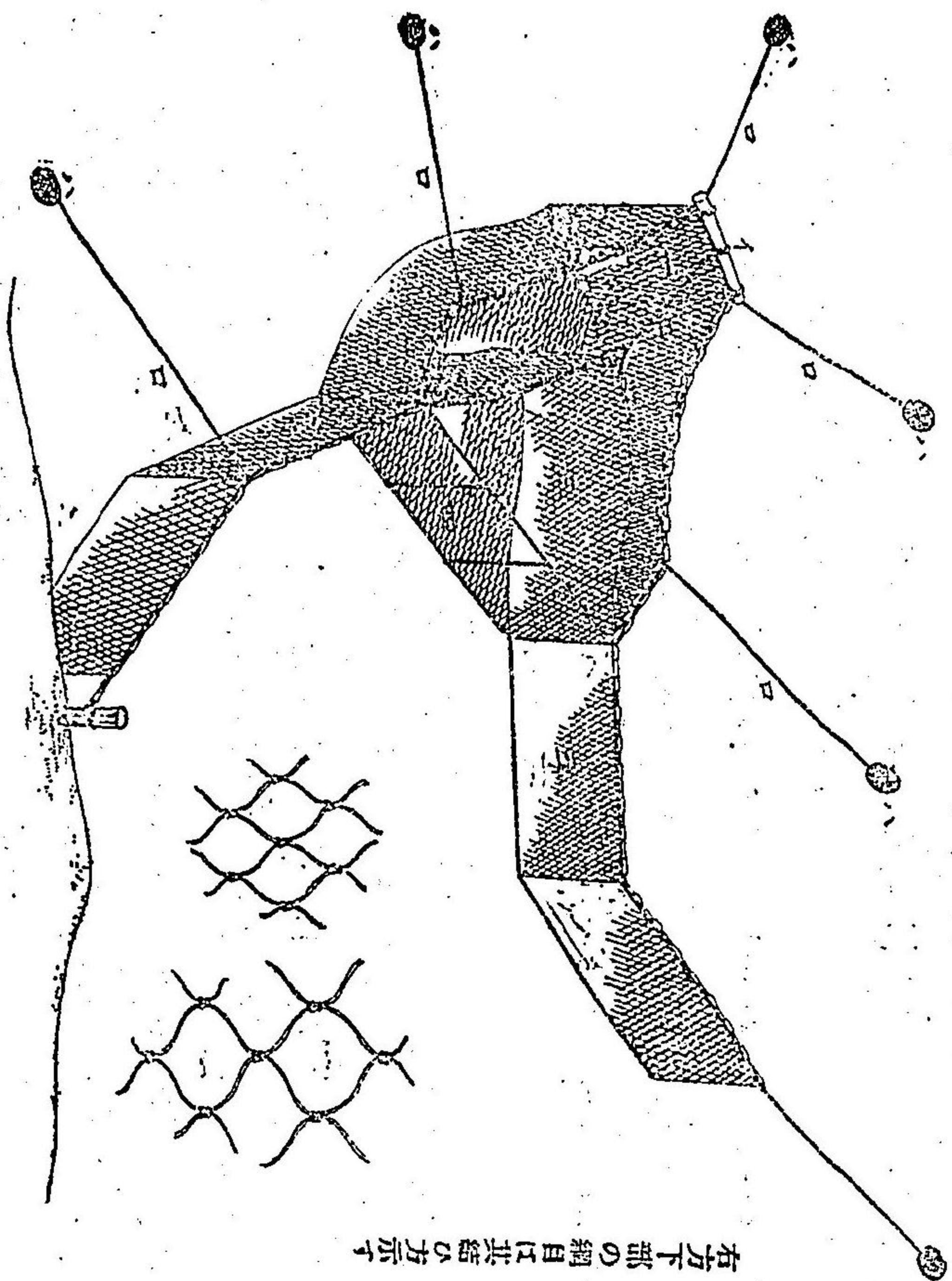


ものを五寸間毎に附く沈子は樹網の四隅には重量五貫匁其外は一貫匁袖網には百匁の石を附く又樹網の四隅は網目十五を破り其外部へ牽網を附く其牽網は堅目六十あるを本網の堅目三十に横目百七十を本網の横目八十五に結び附け長八寸幅三寸厚一寸五分の浮子を附く之を装置するには晝間潮流の平穩なる時を量り満潮の流れを斜めに受くべき位置に先つ心繩樹繩を張り錨元心繩元及び樹網の四隅には長さ十五尋の網に重量五貫匁位の錨を繋ぎて碇置し若し風浪の虞あれば垣網の中央にも左右にも錨を沈め以て網を直立せしめ而し

て樹繩に網を張り三尋間毎に肩繩を括り附く
 漁法は朝夕兩度一艘の船に一人或は二人乗にて漕出し先づ樹繩の正中に至り湖上にある袖網の肩足繩を取り網目に罹りたる魚を捕りたる上網は元の如く沈め置き四隅の繩に陥りたる魚は搦網にて抄ひ或は釣を以て捕獲するなり此際は船の動搖せざる爲め樹口より繩を船に挽き置くを常とす此網は常設漁具なれども漁獲減少するときは位置を移轉することあり

第八 瓢網

能登國鹿島郡深浦村に於ける瓢網は凡近岸に寄來る魚は種類を擇ばず捕獲するものなれども主として獲る處のものは「ハチメ」ハチメにして鳥賊鱈等之に次ぐ漁業の季節は十月より翌年三月までの間とす之を設置するは海岸より僅に二三間乃至四五間を距りたる藻類の繁茂せる處とす
 網の構造は局部を分ちて五となす即ち圖中の(一)は魚捕(二)は胴網(三)は銚子口(四)は前垂(五)は「ハヒノ」と稱す都て麻絲製にして(一)魚捕は網目一尺間十二節二百目掛を



右方下部の網目は其網の方示す

一	魚掛	イ	基
二	胴網	ロ	錠網
三	銚子口	ハ	錠
四	前垂	ニ	網
五	ハヒノ	キ	銚子口の錠

一反とし丈け五尋乃至六尋にして二割を縫縮め長さは上端即ち圖中の(イ)なる基に接着する所を五尺とし(ニ)胴網は一尺間九節百三十目掛を以て一反とし丈けは六反縫ぎ長さ十尋を七尋に縫縮む(三)銚子口は網目同上にして丈け六反縫ぎ長さ五尋を三尋半に縫縮め長さ六尋を四尋に縫縮む(五)ハヒノは網目同上にして丈け三反縫ぎ長さ十尋を七尋に縫縮む肩繩は總て藁製にして太さ周一寸餘乃至二寸弱浮子は桐丸木周七八寸なるを長さ五寸に切りたるものにして胴網に二十個銚子口に十個ハヒノ左右に十四個位を附く圖中(イ)は基と稱し杉木を用ふ太さは周一尺五六寸位長さ六尺位とす(ロ)の錠網は藁製にて太さは周三寸位とし長さは海の深さ二丈に對し三丈乃至四丈を通常とす(ハ)の錠は空俵に小石を詰めたるものにて重量十貫匁内外とす(ニ)の網は通常の小繩を用ゆ(キ)の銚子口の空隙即ち魚入口は上層にて幅一尺位下底にて五六尺位とす此網は網足を海底に接着せしめて尙ほ若干尺地に敷く程に作る故に沈子の設けなし

漁法は船一艘に漁夫一人乃至二人乗にて先づ銚子口より基に引渡せる張繩を解き伸ばし次で前垂網の縁繩を引揚げ漸次起して魚捕まで繰詰め魚を捕獲し畢れ

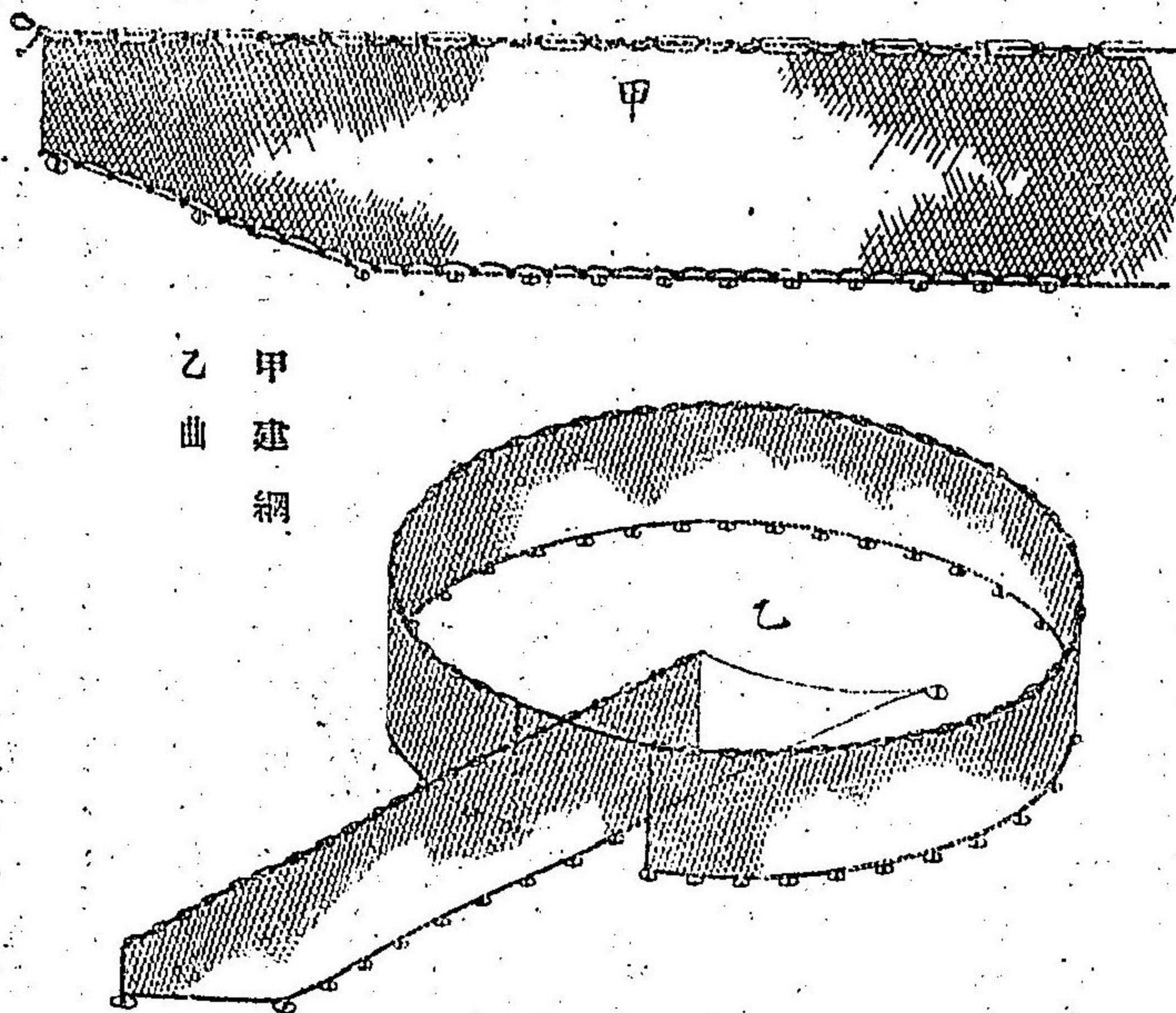
ば又繩を張り縮め網を原形に復し
幾回にても斯くの如くして捕獲す
るなり

第九 鳥賊曲網

筑前地方に於ける鳥賊曲網は甲鳥
賊を漁するものにして漁季は陰曆
四月中旬に始まり六月初旬に終る
漁場は海岸の接近にして深さ三四
尋以内海底土砂相交り海草ある處
を宜しとす

網の構造は肩繩百尋足繩百尋内五
十尋は建出し網に五十尋は曲網に
附く肩繩は二筋周圍一寸二分許足

網 曲 賊 鳥 圖 二 十 二 百 第

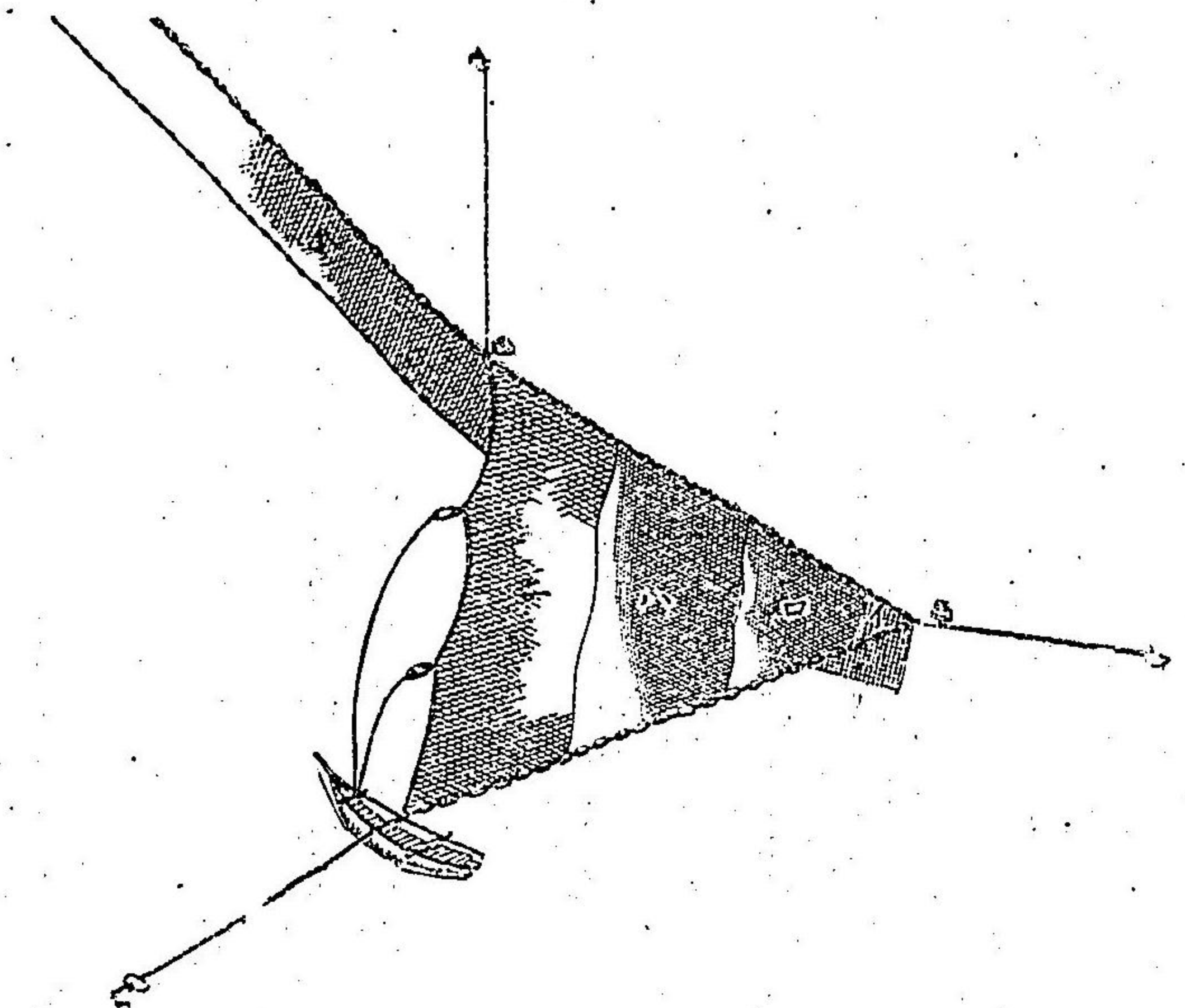


繩も亦二筋太さ肩繩に同じ之に絲網五割或は七割を増し作る建出し網は初めは
丈け三尋曲網に近づくに従て六尋となる目合二寸八分曲網五十尋丈け六尋目合
二寸浮子は長さ八寸幅一寸二分厚さ八分のものを八寸距離に附け沈子は石を用
ひ建始め建終り曲げ始め曲げ終りには各重量五斤其他は百匁のものを五十尋間
に凡二十七八個を附く

漁法は漁船一艘に網一張を積み三人乗にて漁季の初めは晝間其後は日出或は黃
昏より出漁し始め海岸を距る三四間位の處より沖へ建出し網を直線に張り其張
先きより五尋位地方に寄り左右二尋位の距離を置き曲網を輪の如く張り廻し置
けば鳥賊の此曲網に迷ひ入り潮下なる網の開張したる處に漂ふを一晝夜二三回
潮上に至り船に錨して一人は潮下なる曲網の足繩を取り二人は潮下なる曲網の
肩足繩を取り繰揚げ凡六七分位繰揚げたる頃より潮下なる足繩を徐に繰揚ると
きは網の開きたる處に群集するを捕獲するなり

第十 鯉張揚網

鯉張揚網 四百三十三



豊後國南海部郡に於ては七八月の交鯉は近く海岸に沿ひ群集するを以て此時に當り張揚網を其線路に張り魚の自がら網中に陥るを待て捕獲す網の構造は圖中(イ)は「ミソコ」と稱し網目七分位丈け五尋横幅六尋(ロ)は網目一寸二分位長さ五尋横幅十六尋(ハ)は網目二寸三分位長さ五尋横幅二十尋(ニ)は網目三寸三分位長さ五尋横幅二十五尋とし之を奥行十八尋網口十五尋の縁繩に縫ひ縮め浮子は桐製長六寸幅三寸厚さ一寸八分にして網の沖に向ふ片側には五寸距離に附く之を沖「アバ」と云

ふ其一方の片側には二寸距離に附く之を中「アバ」と云ふ網口には二筋の曳網を附け一筋は長さ十尋一筋は五尋其附け元には各重量一貫目許の石を括り附く垣網(ホ)は網目三寸三分位長さ五十尋丈けは本網に接する所四尋末に至り三尋となる浮子は三尺距離に附け之を地「アバ」と云ふ沈子は陶製にして五尺距離に附く之を装置するには先づ垣網の一端を陸地の岸に繋ぎ沖に向て張り出し而して三處に錨を投ず其網の頭に附くべきものを沖錨と云ふ網の長さ三十尋とす網口の右端に附くべきものを向錨と云ふ即ち陸地の方にあり網の長さ二十五尋とす網の左方にありて船に結び附くべきものを後錨と云ふ網は總長六十尋なれども錨元より船に結ぶまでの間大抵十五尋とす錨を投じ畢れば本網を卸し其頭を沖錨の網に右端を向錨の網に結び附け各大き一斗五升入位の浮樽を附く網は總て棕櫚製とす

漁法は長二三間の漁船に漁夫二人乗組み船を網の左端に停め後錨の網を中梁に結び附け網の左側の縁繩の端を鰹梁に結び附け網口の曳網二筋を船に取り以て魚の來るを待つ魚は地方に沿ひ來り垣網に路を遮られ繞りて本網に入り來るを

以て其十分に入りたるを測り豫め繰縮めある後錨の網を伸ばし曳網を手繰り船を進め網の左端より魚捕に向て魚を逐ひ入れ撻網にて抄ひ船中に捕入るゝなり其運用は尤迅速なるを要す此本網の頭と右側及び垣網とは更に位置を動かすことなく魚を捕り畢れば復た錨網を手繰りて船を開けば網は原との如く自から張るを以て再三再四此の如くして捕獲するなり

第十一 落し網

但馬國美含郡竹野村伊藤與四郎の第三回内國勸業博覽會に出品せる落し網と稱するは一名四つの天井網と呼び例年十月より翌年六月まで或は場所に依ては終年定設し凡何魚に限らず網目より大なるものは種類を擇ばず捕獲する漁具にして漁場は深さ十二尋より二十尋までの處とす
網の構造は袖網底網囊網の三者を以て成る凡て麻絲網にして其袖網(イ)は八節目を用ひ右方は長さ九十尋左方は四十五尋幅は前端八尋二尺にして漸次に狭まり囊網に接する處を四尋とし尙ほ囊中に入るに隨て益々狭まる底網(ロ)より(ホ)に至

るは略ぼ三角形を爲し(ロ)の前端幅最も廣く即ち十五尋とす囊口(ニ、ホの界)にて四

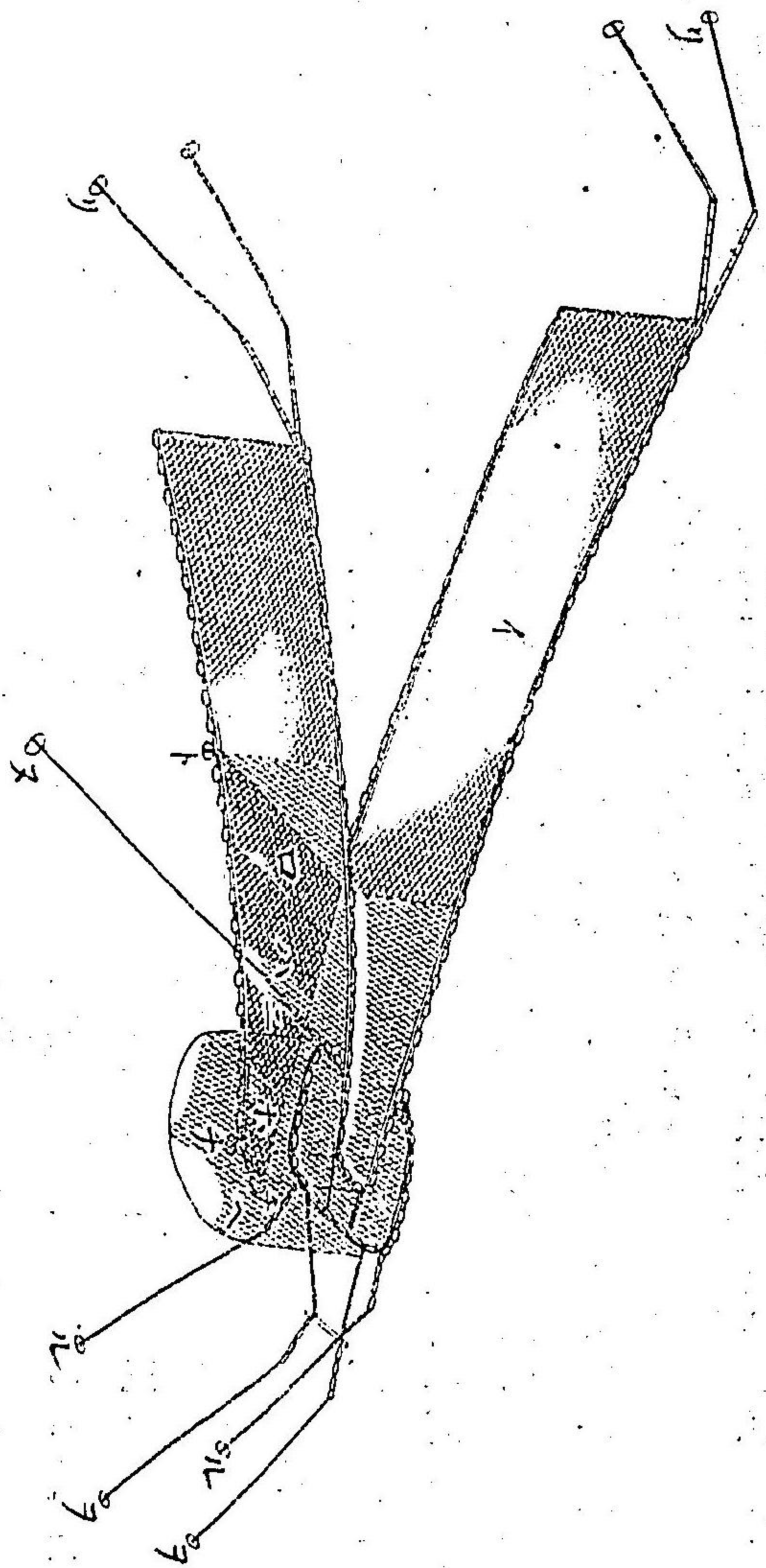
箇

し

尋

圖四十一 落し網

(網井天ノシ四名一)

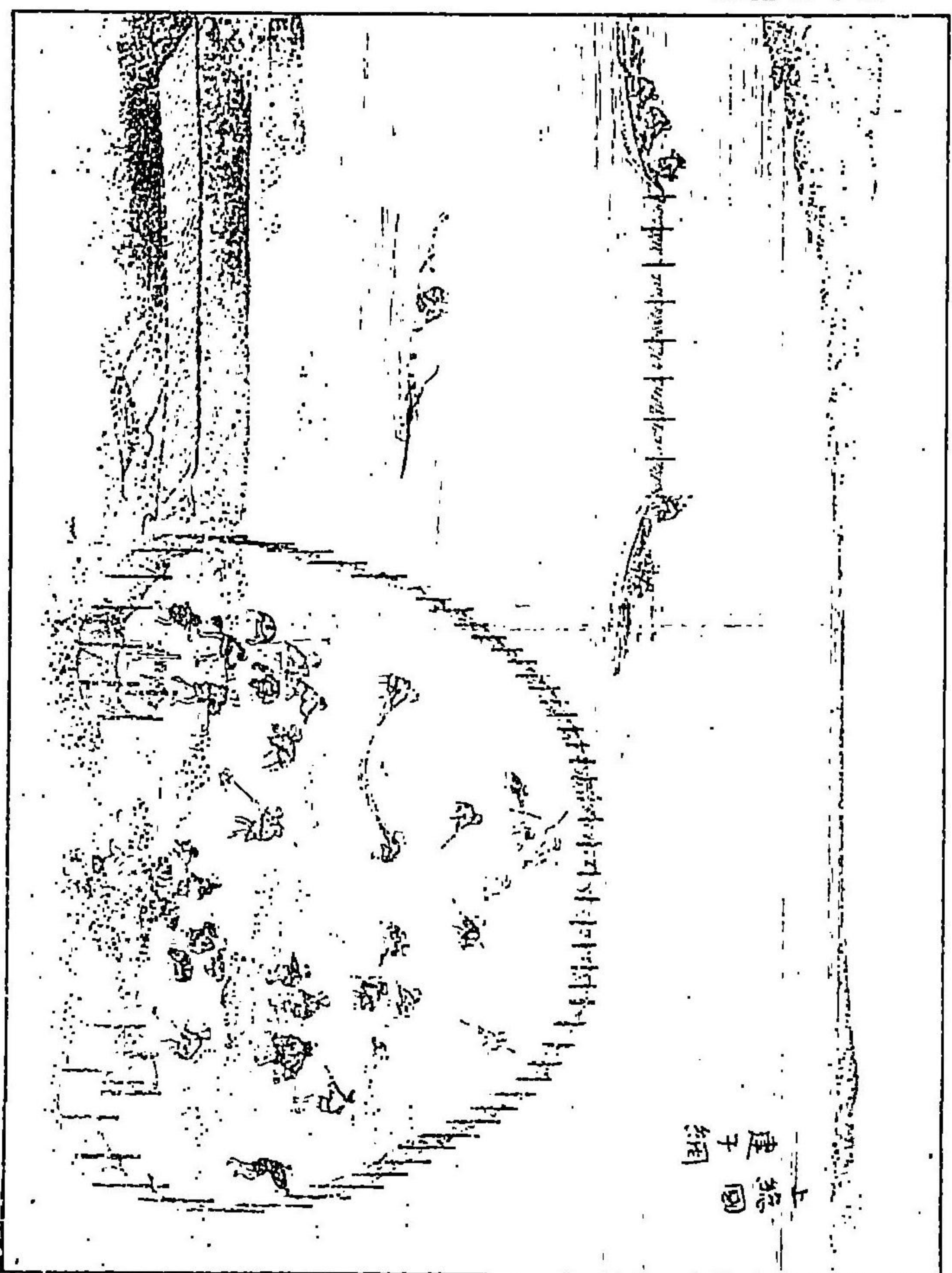


尋囊に入りて愈々狭し其長さ凡十八尋にして(ロ)の部長さ三尋四節目次の(ハ)は六

尋六節目次の(ニ)は三尋八節目囊中の(ホ)は六尋八節目(ヘ)は落し囊と稱ふ八節目を用ふ幅七尋長さ十七尋一尺を以て作り底網の左右兩縁は袖網の下縁に綴合せ其前縁には重量一貫二百匁の石(ト)二個を附け囊中の底縁には五十匁の石(チ)二個を附く袖網の浮子は桐製圓形にして長さ凡三寸周圍九寸のもの一尺五寸毎に一個つゝ沈子は陶製にして二尺間毎に一個つゝを附く囊網の浮子も亦桐製長さ二寸五分乃至三寸周圍八寸其距離は五寸乃至一尺五寸とす又(リ)の沈石は重量各二十五貫匁乃至四十貫匁之を繋ぐ網の長さ四十尋(ス)は右の量各十貫匁網の長さ三十尋(ル)は石の量各三十貫匁網の長さ五十六尋(ウ)は石の量各三十五貫匁網の長さ五十六尋而して其網の網に接する處には竹を添へて浮泛力を助け且網を緊張せしむ此網は囊網の底は底網よりも深く且袖網の末長く囊中に入りて自から喉網の用を爲し入たる魚の脱路を塞く是構思の見る可き所なり

漁法は海の深さ十二尋までの漁場なれば三人乗の漁船二艘夫より以上二十尋までの深さなれば三艘にて午前五時頃より正午頃と午後六時頃と又時としては夜間にも兩三回網代に至り囊網に陥りたる魚を捕獲すること他の建網の漁法に同

第五十圖



建網
浮子

じ

第十二 建千網

建千網は海岸淺處にして湖の干満著しき處に建設し滿潮に乗じ海岸に集まる處の魚を圍み退潮に際し去らんとするも網に支へられ逃るに路なからしめて之を捕獲するものにして魚の種類に於て擇ふ所なし所在之を行ふと雖今其一二を擧ぐ

一、上總國君津郡地方に於ける建千網

上總國君津郡地方内海に於ける建千網漁業季節は四月より十月までの間風なく浪靜なる口をトし之を行ふ其網は麻絲製五寸間十四五目網丈け六尺長さ五六寸間にして藁製の肩繩足繩を用ひ陶製の沈子を附け之を一枚とし數枚を連続し凡千間を以て一張とす

漁法は湖の未だ満たざるに先ち海岸を距る十四五町の處に漁船三艘を漕き出し網の中央より海に下し一艘の船は其處に繋ぎ他の二艘は左右に分れ滿潮に従

ひ網を下しつゝ岸に向て漕き進み方言「クボウ」と稱する太さ三四寸位の樫棒を四五間毎に建て之に網を掛け灣月狀に張廻し海岸を距る僅に二三町の處にまで至らしめ其兩端を渦狀に同旋せしめ魚の逃脫を防ぐ此の如く装置すれば潮の退くに從ひ魚は沖合に出んとするも能はざるを以て全く干潮に至り徒歩して網圍中に入り或は抄網を用ひて抄ひ捕り或は又類を以て突き捕り其他各種の手段を施して捕獲するなり

二、豊後國東國東郡岐部村に於ける建干網

豊後國東國東郡岐部村に於ける建干網の漁法は稍や巧を加へたるものなり其法漏斗落と云ふを設くるに在り是明治十三年の發明に係ると云ふ尙は之を細説せん網は五寸に十四節丈け三尋長さ四百尋にして干潮の時適宜の處に網を置き石を以て其下部を壓し浮上を防ぎ網の全體は別に砂石を覆ひ其兩端は海岸の樹木又は岩石に結び置き以て満潮の時待つ而して満潮に至れば網を引揚げ上部を浮はしめ豫め長さ凡二間許の竹數多を備へ置き之を二本つゝ又形に結び數間を隔て海中に建て其中央の處に上端に別に長さ百尋の平網を結び附け沖の方即

第十圖



豊後國東國東郡岐部村に於ける建干網

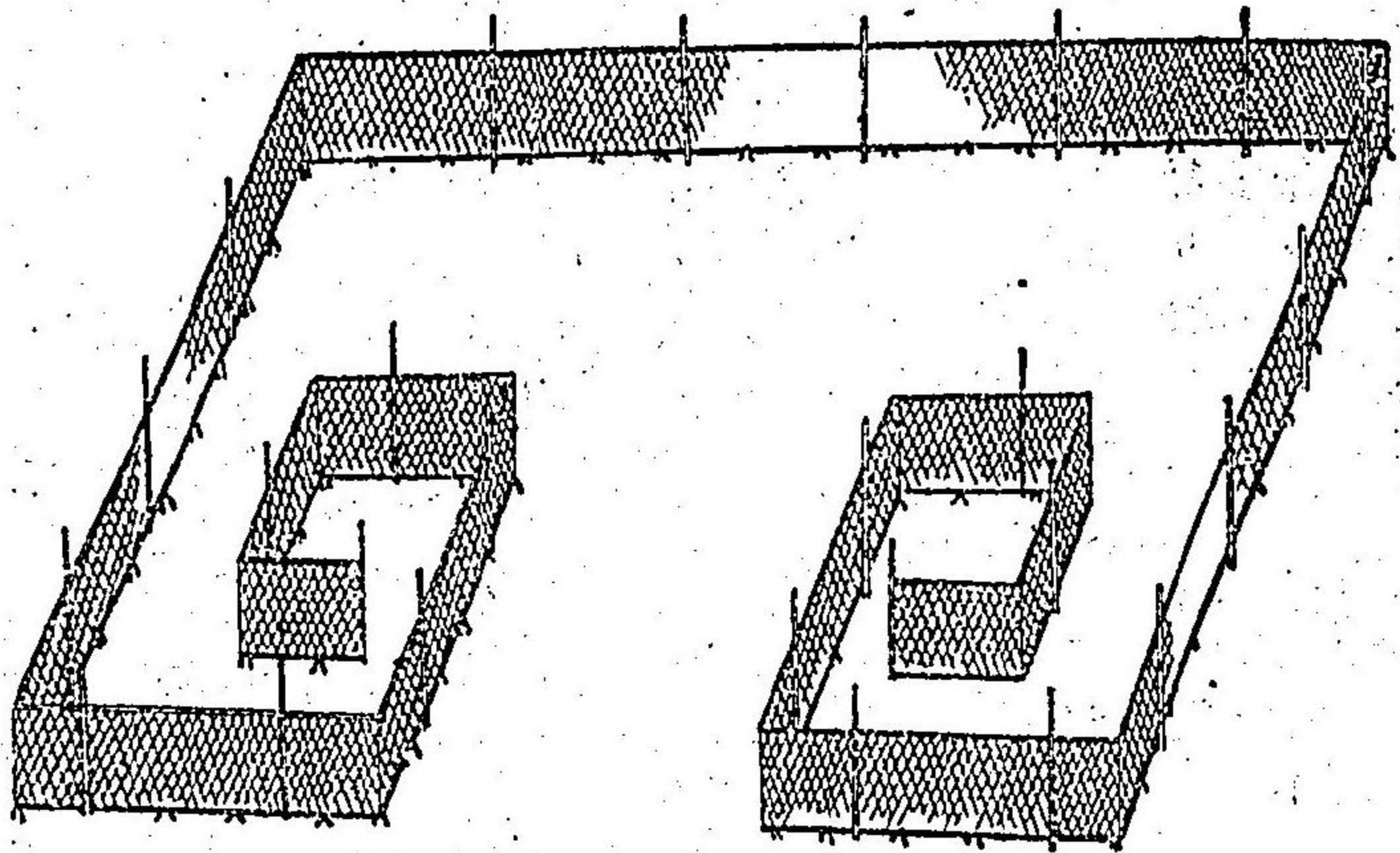
ち水深き方位に向て海底に敷き置く之を漏斗落とす然して潮の將に退かんとす
る際漏斗落の兩側處々に船を寄せ錨を下し船中より其網の兩邊を取て少しく引
揚げ建干網の中央漏斗落に接する處の上端を弛め少しく沈下せしめて潮水をし
て其上を退流せしむるときは建干網に遮られたる魚は悉く潮に従ひ脱出せんと
して漏斗落の中に陥る爰に於て該網の前端より漸次船に繰揚げ魚の一處に集ま
るを待ち船中より之を捕獲するなり又満潮の時に於て建干網の上端に浮子下端
に沈子を附け海に投して群魚を圍み前記の如く漏斗落を装置し舷を叩き一方よ
り魚を驅逐し漏斗落に陥らしめて之を捕獲することあり

第十三 建網

肥後地方に於て建網と稱するは是亦前者建干網の一種にして漁業の季節は魚類
に依て異なり即ち六七月は鱈八月より翌年四月までは仔鱈、仔鱈、鯉、鯉等を多し
とす網は長さ五百間、目は五分より八分まで網丈け六尺とす之を装置するには干
潮を待ち漁夫五人にて第二百二十五箇の如き形状に張り竹を建つ其長さ五尺にし

圖五十二百第

建網



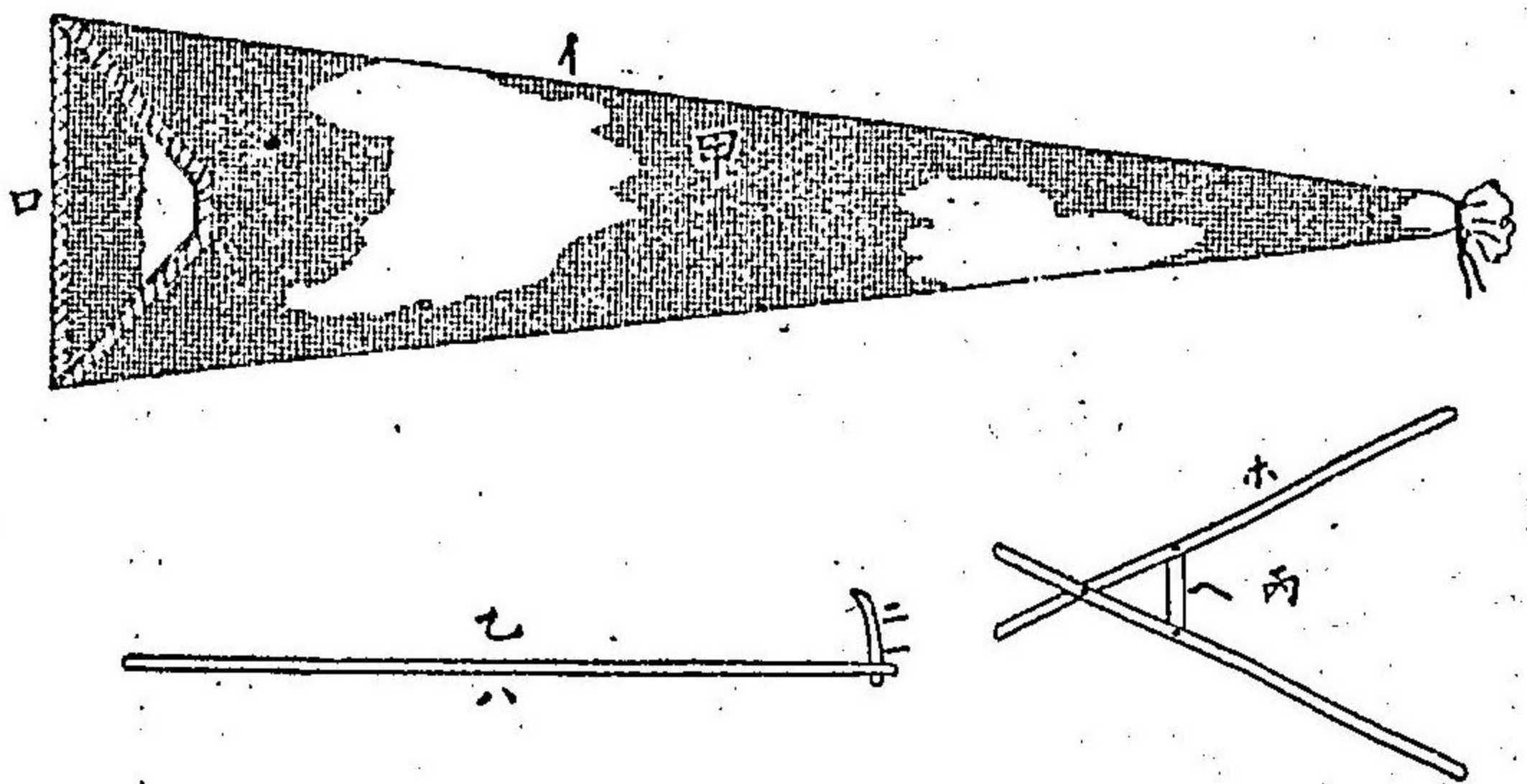
て四間毎に一本を立て百二十五本を以て一
張とす之に網を張り廻し網裾には目串と稱
し長さ二尺五寸の割竹の中央を折り之を三
四尺距離に水底に挿し其網口は陸に向はし
む而して進潮に乗じ魚乗りて網圍に入り退
潮に際し狼狽出んとすれども路なく遂に潮
に残され網に罹るを捕獲するなり

第十四 江張網

肥後國八代郡八代町に於て使用する江張網
は白魚を漁するものにして他に之を用ゆる
地なし八代町にては舊來此漁業は波瀬場(波
瀬の事は以の部に於て詳説すべし)に附屬せ
るものとし波瀬十株に江張船三十艘と定ま

圖六十二百第

江張網



日本水産捕採誌

- 甲網
イ長六丈
ロ長一丈
五尺
- 乙手鈎
ハ長一丈
五尺
- 丙張木
ホ長二丈
ヘ長三尺

れり故に波瀬を有せざるものは容易に此
株を得る能はず今猶此慣行を確守し缺船
あるにあらざれば決して定限を超えしめ
す然れども此株を買賣するは所有主の隨
意たるに依り大抵代價七八圓より十四五
圓までにて買賣することあり夫斯の如く
なるを以て漁場も亦各々定處あり八代は
球磨川々尻加々島と稱する所の上流凡百
間餘の間にして水底深さ三尺以上一丈五
六尺までとす鏡町は「モドウ」と稱する波瀬
場の上流にして皆舊時よりの網代場なり
水底砂にして鱸殘魚の放卵に適するが故
に年々來聚を變ずることなく漁獲多しと
云ふ季節は例年陰曆十一月十二日より翌

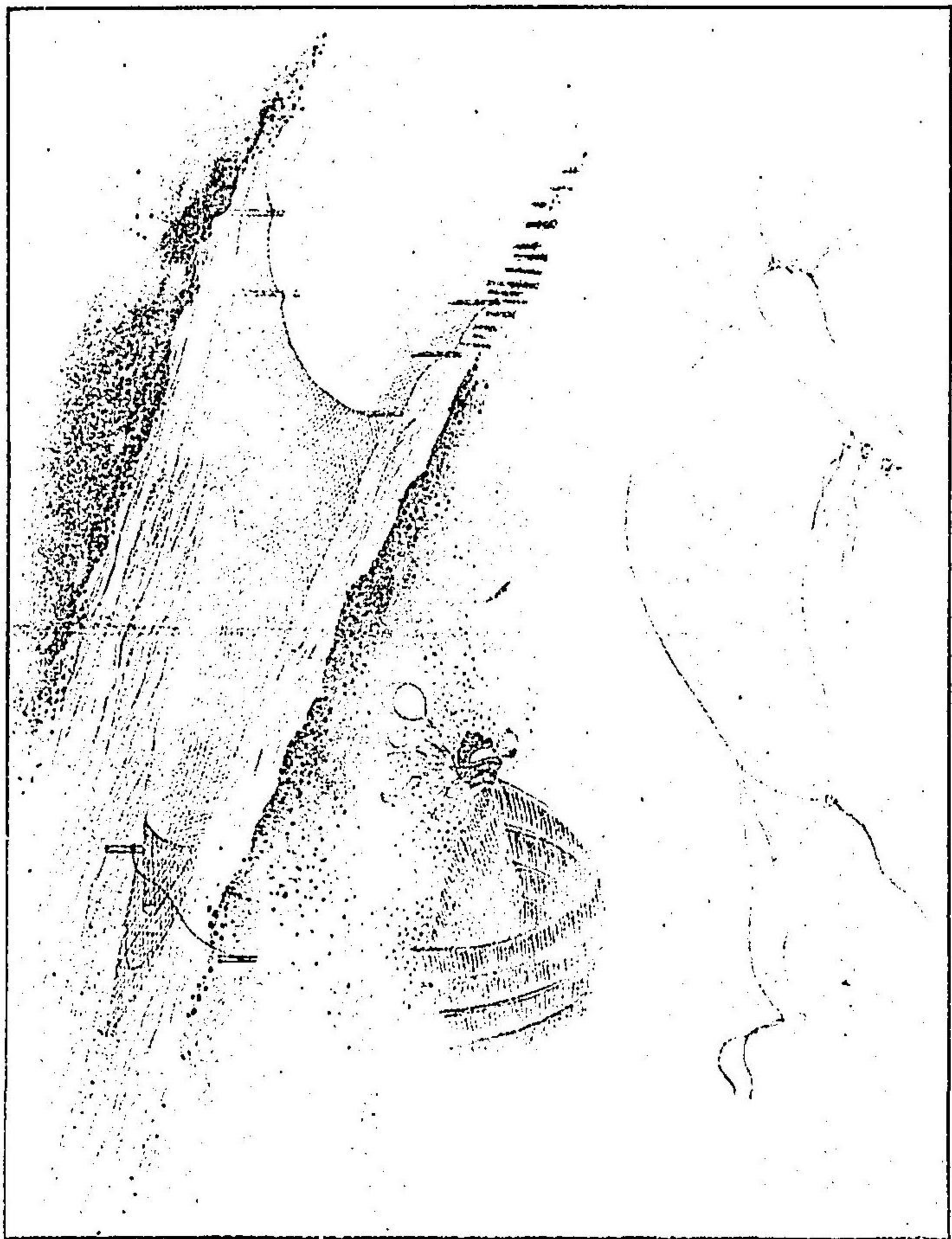
年三月三日までとす此漁は暗み潮及び干潮を嫌ふか故に毎月十日より二十一日まで凡十日間とす但だ正月二月は鱈殘魚孕鰯の時候なるを以て潮に關せず晝夜とも漁業を爲す網の構造は緞子七反を以て長さ六丈口幅一丈五尺とし上下の中心を差通にし兩脇は總て「ハヌワ」を以て繼立長三角形に製し囊尻一間は別に麻布を繼ぎ之を張木に結び附け水中に建るものとす

漁法は漁船一艘に漁夫二人乗組み網二張を載せ漁場に漕出し豫め定めたる順番に従ひ各船駢列して網を建置す其船の駢列は漁場の廣狹に依て異なり八代にては一段十艘づゝにして三段に配置するを法とす網の建方は進潮には沖に向ひ退潮には之に反す凡て潮流に向て逆張するものとす魚を捕ふるには張木を動かすことなく艦より手釣を下し囊網を引揚げ囊底を括りたる紐を解き魚を船中に收め畢れば復た底を括り水中に投じ幾回となく此の如くして漁獲するなり

第十五 袋 網

石見國那賀郡濱田川周布川三隅川等に使用する袋網は鰻、鯉、鯰の類を捕ふる漁具

袋網の構造



袋網の構造

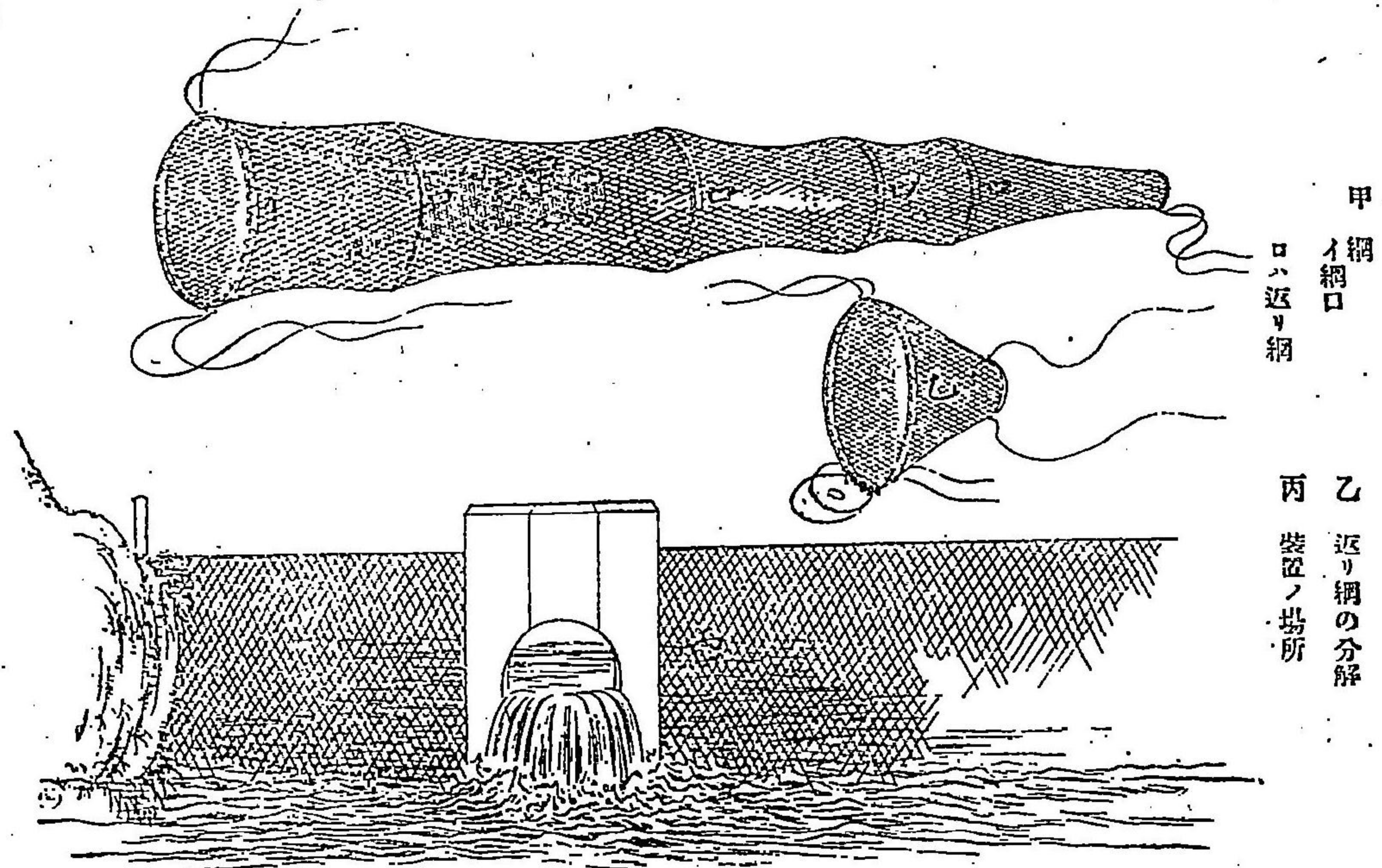
にして漁期は四月頃より九月頃までとすれども就中秋彼岸の頃夜陰を以て最良とす此網は麻絲を以て編み長き囊狀に製したるものにして漁法は水勢急ならざる淺瀬にて通水能き處を擇び川の中央六尺を殘し左右河岸より下流に向て斜に杭を打立小竹を以て柵を結び出水(大水にあらざる)の際豫て殘し置きたる川の中央に網を張ること圖の如くにし魚の下りて網の中に入りたるを捕獲するなり

第十六 網 笠

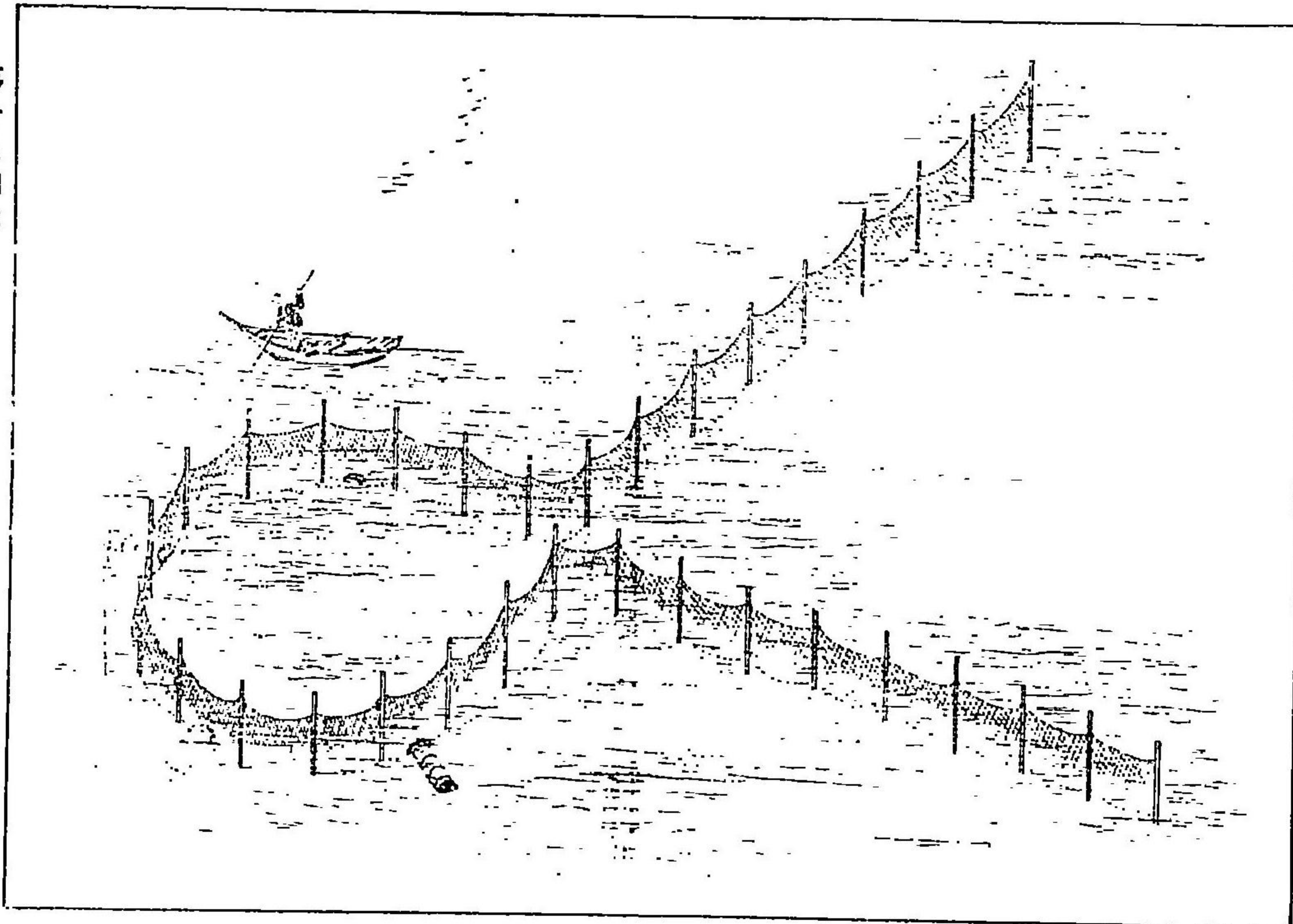
網笠は淡水漁業に用ふるものにして所在之あり而して其大體の趣向は皆同じきも形狀に至ては地方の異なるに従て悉く差あり隨て其名稱同しからずと雖概括すれば凡て網笠なり固より小漁業にして記するに足るものなければ唯其二三を擧げて梗槩を知らしむ

一、サカドウ

因幡國知頭川筋に用ふる「サカドウ」は深瀬に裝置し鮎鰻ウツメを捕る漁具にして季節は五月頃より七月頃までとし晝夜使用すれども就中降雨に際し水の濁りたる時を



第十八圖版



漁代網の川根利

宜しとす其構造は麻絲にて五分目の囊網を編み處々に竹製の輪を張る其輪は口の方より中央までを大にし夫より末端に至るに従ひ漸次縮少せしめ囊網も亦之に準す而して別に三分目に編み網口には輪を張りたる返り網を前の網中に掛し一たび網口に入りたる魚は復た脱するを得ざらしむ之を装置するには川の中央へ堰板と稱し杉の五分板の中央に圓き孔を穿ちたるを立て其左右より櫻欄繩を張り繩端を兩岸に繋ぎ堰板の兩側の空處には麻絲一寸目の網を張り而して堰板に穿ちたる孔に網筈の口を結び附け置き之に陥りたる魚を捕獲するなり

第十七 網代漁

利根川筋に於て網代漁と稱するは古來最も盛に行はれ沿岸の地到る處此業を營みしも元來此漁事たる水路に妨害多きを以て舊幕政の時一旦禁止せり爲めに現今に於ても此等を爲すもの甚だ稀れにして獨り常陸國行方郡浮島に相對せる下總國香取郡霞ヶ浦及び同郡與田浦等に於て僅に遺存せるのみ是畢竟其地漁場廣濶にして他に障害なきに依る

此漁業は淺き處に於て河岸より河心に向け木竹等の杭を建て之に沿ふて左右の袖には藁繩網中央には麻絲網を連續したるを張る此麻絲網の部分を方言魚籠と云ふ魚籠の網裾には蒲鉾狀に造りたる筥三四個つゝを附く斯く裝置すれば魚は游泳し來りて知らず識らず魚籠に入り竟に筥に陥り復た脱すること能はざるに至るを漁者朝夕に筥を揚げて魚を捕獲するなり漁季春秋二度あり獲る所は鯉、鯽、鯰の諸魚とす

網代は漁場に依り廣狹一ならずと雖大抵周回四十間より五十五六間に至り其藁繩網は長さ凡二十五六間幅八九間麻絲網は長さ凡三十間幅一間四尺建木は五六尺のものを用ふ

第七節 掩網類

掩網は魚類を水上より掩蔽被包して漁獲する漁具なり此種の網は概ね船上或は陸上より單獨にて使用し唯船を運らす所の水手を要するのみにして其數人にて網を使用するは僅に一二に過ぎず且十中の八九は世間最も多くある所の打網に

して地方に依り「トゥ網」「ナゲ網」「マキ網」等の稱あるものは是なり之を除きて異狀なるものは僅々指を屈すべし

第一 打網

打網に鯿打網、鯉打網、鮎打網等の名ありと雖唯其魚の種類に依り網の大小と目の疎密を異にするのみにして形狀に至ては敢て大差あるにあらず即ち其大體は圓錐形にして下端は圓潤に上端漸く細尖なるを常とすと雖中には鐘狀を爲せるもの往々之あり下端には大抵鉸狀を爲せる鉛製の沈子を連附し上端に浮子を須ひす然ども河川の水底石多き處にて用ふる網には圓形の沈子を用ひ恰も念珠の如き狀を爲さしむるものあり是鉸形なるときは石に支へられて網裾に空隙を生じ魚此より脱することあるを以て之を防ぐに在り其上端の尖頭をば龍頭リウツと稱し其龍頭より一條の繩を附く之を手繩と云ふ此龍頭に樞を設け以て手繩の附元をして回轉すべからしむるものあり斯く裝置せるものは手繩に撚の掛ること強からざるが爲め使用甚だ便なりとす此網に船打、陸打の二様ありと雖是唯船上に在て

使用すると徒行して用ふるとの差あるのみ但だ陸打は通例小形にして手繩短く船打は稍や大にして手繩長きを用ふ共に網の下縁を一尺乃至二尺を内側に折り返し沈子三個位を隔て細繩にて吊り上げ網目に結び附け以て獲となす之を使用する方法は先づ網を手繩より漸々繰りて左の手に持ち網の下縁より高さ三尺許を除し尙ほ網幅の凡三分一を左の指に支へて左腕に懸け三分一は右の手にて握り餘る三分一は其儘垂下し其將に網を投せんとするや體の上部を少しく左に曲げ又直ちに右の方に廻旋すると同時に網を投すれば手の握り方と沈子の重量とに依り網口廣かりて水中に沈降す是に掩はれたる魚は網に驚き一たび水面に浮び逃れんとするも能はざるを以て又沈んで網の下縁を潜り逃れんとす爰に於て靜に網を引寄せれば魚盡く籠に入るを以て徐々に引揚げ捕獲するなり而して之を引くに緩急適度を得ざる可からず何となれば若し引くこと急に過ぐれば網裾水底を離れて隙を生じ魚之より脱す緩なれば亦網を破り或は網目を潜りて脱するの患ひあればなり

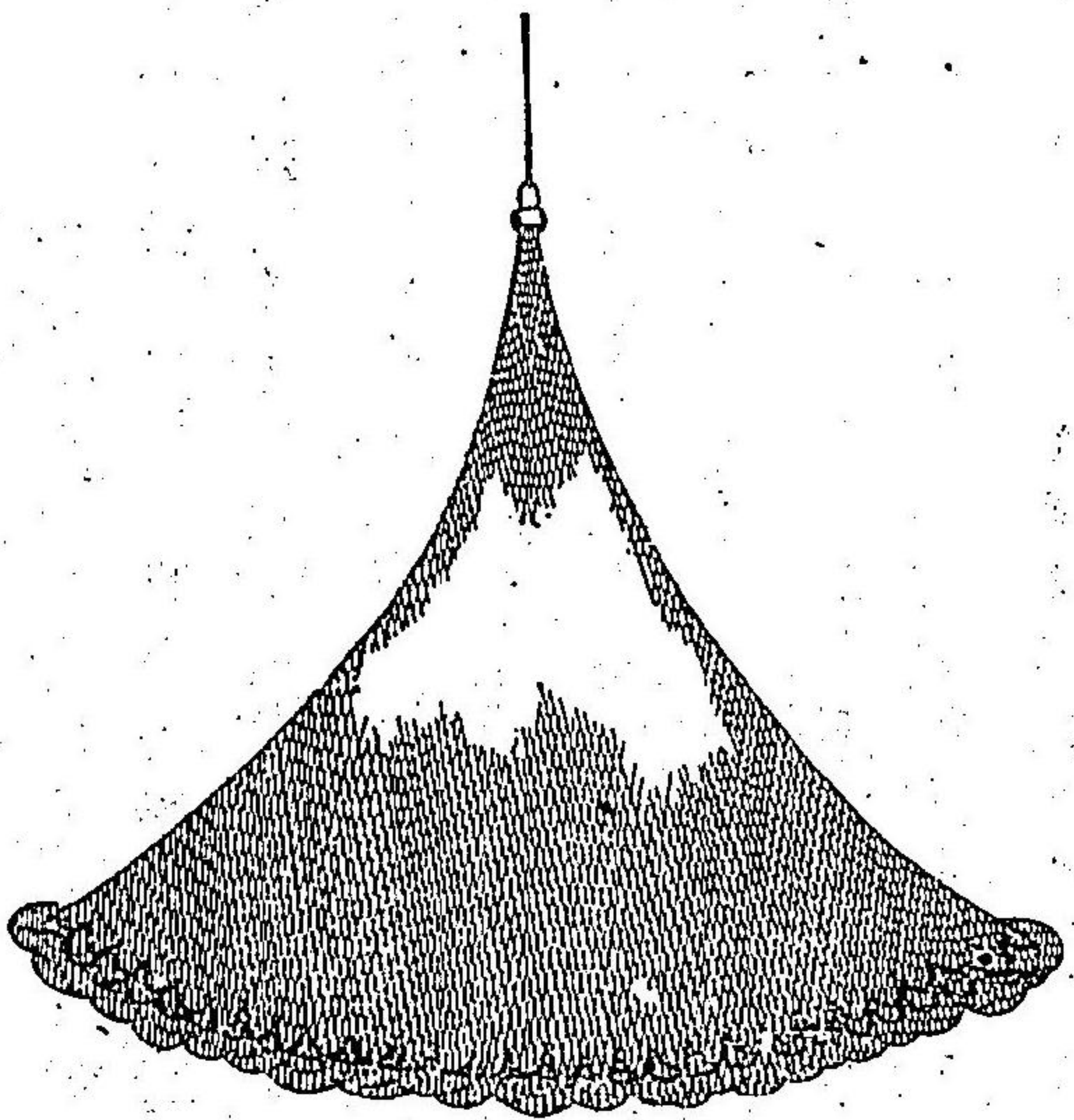
通常船打は漁船一艘に網打一人船押二人にて隨意に魚の栖處を覓め網を投する

ものなりと雖場合に依ては數艘或は數十艘集合し隊を成し二列に分れ雙方順番を定むと雖其交互するや間髪を容れず又暗夜にして唯魚の跳躍する音を聞くに止まるが如き場合には各船聯合し群魚を圓形に圍んで網を投することあり之を寄せ打と云ふ又河魚を漁するに其潜匿する場所を覗ひ或は河流を張網にて遮斷し魚の躊躇するを見て網を投じ捕獲することあり

打網の使用は膂力を要し壯夫にあらざれば爲し難きか如き觀あれども必しも然らざるものあり膂力ある固より好しと雖單に膂力を以てするのみなるときは唯物を擲つと等しく網飛へとも結んで攤からざるを奈何せんか弱きは不可なれば無論なるも之を要するに腰と足との構へ其宜しきを得るにあり故に其力は網を支持するに足る以上は技に熟すれば容易に之を使用し得べし

抑打網は規模甚だ小く大洋の群魚を漁すべからざるは論なく其業も迂遠なるに似たりと雖之を製するに資金を要すること多からざると使用上輕便なるとに由り各地一般之を使用し利益亦少からず東京大阪其他都會の地にては遊覽者の爲めに雇はれて之を爲し魚の價よりも寧ろ雇錢に由て利する者頗る多しと雖九州

第百二十八圖 打網



筑紫潟の如きは専ら職業として之を用ふること甚だ盛にして其技精練を極むるものあり隨て利潤大なりと云ふ該地漁者の此技を習ふ次第を聞くに先づ幼時家に在りて足の踏み方を習ひ次に網を腕にし其構へ方を習ひ稍や長するに及んで腰の据りより網を打出すの模様を習ひ全く備はりて之を船上に移し實地に熟せしめ數年を経て初めて一個の打網漁者となると云ふ其技に巧妙なる亦宜ならずや

打網は其大小固より一ならずと雖構造法は最初網目數目を設け漸次編み下し七位の網目に至り初めて隔度目數一個を増加し次九回は二目間に一目を増し十一回は三日間に次十三回は四目間に次十五回は五目間に各一目づゝを増加し周回目數八百乃至一千目に至りて成るも

のを普通とす其増目の様式は第百二十八圖に示すか如し網目の結び方は概ね「カヒルマタ」とす是魚の網目を刺すもの往々之あるが故なり而して大抵柿澁を以て染む然れども染色を嫌ふものは白網にて使用するあり唯腐朽の速なるが故に稀には鶏卵の蛋白を塗抹するものあり其法總論中網保存法の項に述たるが如し又稀には淡藍色に染めて用ゆるものあり是れと同一色にして魚眼に觸れ易からざるを欲するが故なり打網を以て漁する主たるものは鰯類、鯉、鮎、鱸等なりと雖尙ほ黒鯛、小蝦、鰻、鮒、鰯の類をも漁すべく而して其捕獲の目的とする魚類に應じ網目に疏密ありと雖形狀に至ては皆一轍にして使用の方法も亦相同じ故に今唯一圖を掲げ各種に就ては圖せず漁法も亦稍や趣向に異なる所あるもののみを記し前に述たる所と同一なるものは凡て省略す唯大に面目を異なる所のは下に之を詳記す

一 鰯打網

鰯打網は河海共に所在之を使用し其漁法も大抵相同じと雖肥前國南高來郡島原町に於ける漁法は少しく普通に異なる所あり其季節は陰曆十月より翌年三月ま

でにして網の構造は上部は最も良好なる所の細絲を用ひ下に至るに及び糸を太くす網目は八分乃至一寸三分まで鱈の成長の度に應ず目数は上部百二十より始め裾に至り五百乃至七百に止む沈子は一個の重量十二匁より十六匁までにして其數網の大小に由り増減ありと雖大抵百十個乃至百八十個とす手繩は麻三つ絢長さ五尋乃至七八尋とし別に五升入位の浮樽を具ふ

漁法は漁船八艘乃至十艘を一組とし一艘毎に網三張を備へ暗夜に出漁し海岸を距る凡十五町以上深さ十尋以内海底沙或は泥の處を擇び各船圓形に排列し海水の閃くと鱈の跳る音とに由り機を察し合圖を爲して第一番船より順次網を投す而して其網は普通の即時に引揚ぐるが如くせず手繩の末に浮樽を繋ぎ海面に泛べ網は其儘放置し船は更に内部に進み圍みを狭め又網を投して其儘放置し尙又進んで圍みを狭むれば船と船と殆んど接近す依て復た各船網を投すること前の如くすれば船に備ふる所の三張の網皆投し畢る爰に於て浮樽を取り網を舉げ捕獲するなり是蓋し鱈の性たる四面を圍み網を投すれば其音に驚き逃れんとして其外部に出ることを爲さず却て圍の中央に集合するものなるを以て斯の如くす

るを利ありとするなり此法は島原澳町の漁業者梅村莊衛平野孫平治の創意にして明治七年より行ふ所なりと云ふ

肥後國沿海に於ける鱈漁に石打と稱することあり石礫を五尺四方位に積り竹を建て、目標とす之を石塚と稱す日を経れば鱈來りて石に聚るを以て時々打網を投して捕獲するなり網の構造及び其使用上に於ては普通に異なる所なし此石塚は不知火海に最も多く行はれ各自祖先傳來の専用漁場にして一切他人の漁事を爲すを許さず愛重すること恰も農家の耕地に於けるが如し時としては賣買することありと云ふ

二 鯉打網

鯉打網漁業に於て各地大なる差異あるものを見ず網目大抵八分より一寸四分までにして絲は稍や太きを用ふ夏期に在ては河川中水深く流平かにして杙の如きものゝ多く在る所の邊側を覗ひ網を投すること普通に異なるなし冬期に至れば鯉は沿川林籬等の下網の入る可からざる處に潜伏するを以て此時に於ては數艘の船にて左右に分れ鯉の潜伏すべき處を擇び竹棹又は其他のものを用ひて魚を

驅出し而して鵜繩と稱し一條の繩に鵜鷺或は鵜の羽を挿み結び付たるものを水中に下し二船にて其場を取り漸々淺所に向き曳き廻せは鵜繩の水中に動搖するに恐怖し魚は其逐はるゝ所の淺處に抵る此時直ちに網を投して之を覆ひ或は網に纏終せしめて船中に引揚げ或は鐵叉を用ひ突て捕獲するなり

三 鮎打網

鮎打網漁業は河流の深淺と季節とに由り其方法に差あり網目も季節に依て異なり大抵最も細きもの二分五厘位より疎きもの六分に至る夏季に在て水深き河川に漁するには船を用ひ深くして流れ緩なる處を擇び水に折りつゝ網を使用し或は數艘聯合して合せ打をなすことあり淺き河川に於ては徒行して水に入り其淺湍に魚の聚るを見て網を投す鮎の性上流に向て脱せんとし且斯かる淺湍にては網を押流さるゝの恐れあれば網を下せば直ちに兩手を以て上流の網裾を壓へ手に觸るゝ魚は手つから之を捕へ然る後靜に網を曳き猶網中に在る魚をして囊に陥らしめて捕獲す此漁は晝夜とも爲す可しと雖晝よりも夜に利あり就中太陽の出沒の時に於て漁獲多しとす又鵜繩を用ふるものあり其法前者鰓打に用ふるも

のと同じく唯徒行して使用するを異なりとするのみ又一種鮎「カシ網」と稱するあり網の形狀は通常の打網に異ならされとも上端に於ては目を五寸間に三つとし漸次裾に下るに随ひ目を細かにし裾囊に至て五寸間に三十目とす之を使用するには先づ柴篠等を以て河流を横斷し魚の下るを防ぎ其下に網數張を投じ上流に竿を建て竿頭に手繩を繋ぎ龍頭の纜に水面に露はるゝを度とす斯く装置して一夜间浸し置くときは魚は流に従ふて下り柴篠等に遮られ進むことを得ず躡蹠逡巡するの間知らず識らず網圍中に入り驚き恐れて尙ほ水に溯らんとして復た網に觸れ狼狽して水底を潜らんとし終に裾囊に陥る之を翌朝引揚げ捕獲するなり専ら晩秋に於て之を爲す此漁は捕獲少からざれども其河流を横斷するは即ち築の法にして漁利を壟斷するものなれば不良の漁法と謂ふ可し

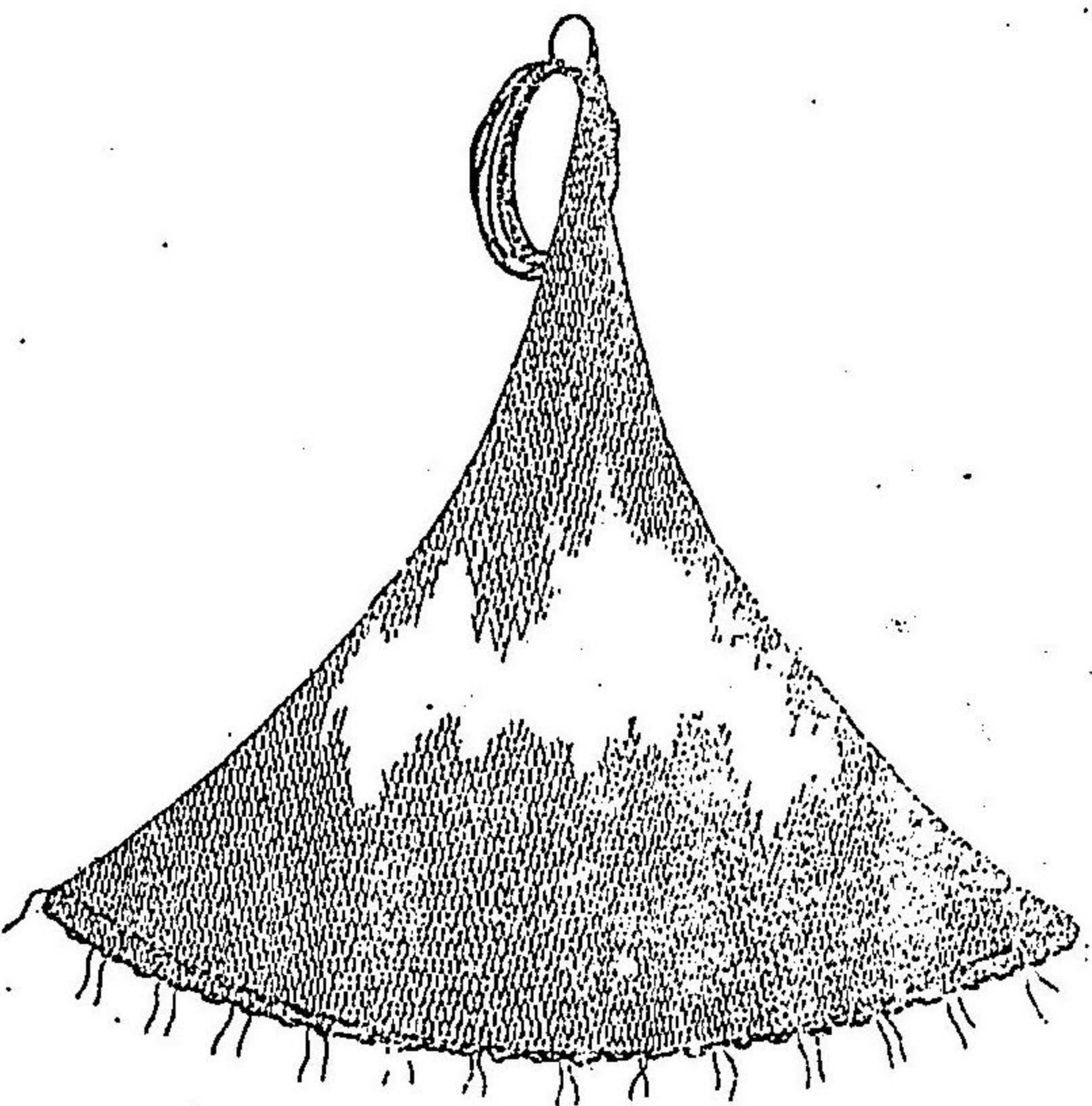
四 ハダラ打網

肥後國宇土郡網田村に於ける「ハダラ」打網は方言「ハダラ」と稱し鮎の稚兒に似たる一種の魚を漁するものにして同縣下に於ても網田村の外未だ他に使用する所あるを聞かず此「ハダラ」の性たる網を被ふれば直ちに衝て水面に出るが故に普通の

網の製にては魚の網目に漏るゝ患あり又海底網の達せざる處にては使用し難く漁法頗る不便なるを以て同村曾方林平と云ふ者工夫を下し此網を創製せり其形状は普通の打網の如くなれども長さ五寸半の内裾の方三尋半を大目に結ぶ而して絲の太さを増さず是網の水に抗抵する力を減し其沈下を急ならしめんが爲めなり其上二尋間は目を細くし五寸間二十節とす是魚の脱漏を防ぐに在り沈子の量は之を撒下して魚の海面に上昇するとき網の龍頭は已に水中に入り然も網裾は海底に接着せざるを度とす蓋し其趣向網は海底に接着せざるが故に沈子の重力にて初め撒したる時廣がりたる網裾速に狭まり一たび上昇したる魚は翻て下部に退却するに暇なく以て網の上部に於て恰も魚を包むが如くならしむるに在り故に網を下して其沈下尙ほ緩なりと認むるときは竿を取て龍頭を突き込み手繩を繰りて網裾を寄することあり斯かる異製たるを以て之を使用するには最も老練の漁者に非ざれば能はずと云ふ方俗之を幽靈網と呼ぶ腰以下殺き足地に達せざること畫ける幽鬼に似たるを以てなり

第二 卸網

卸網 圖九十二百第



此網も肥後國に用ふるものにして主として鯉、鯡、鮎、仔鱸等を河川に漁す網の形状打網に異ならざれども其製頗る大にして蓋し河漁に用ふる網の最たるものなり網の長さ十六尋裾の周廻九十尋あり目は八分龍頭の處一寸五分沈子は一個の重量十一匁のもの九百個を附し手繩の長さは五十尋とす網絲は墨絲位のものを用ふ之を使用するには船六艘毎船二人乗にして内一艘を本船と定め漁事一般の指揮を掌らしむること猶海漁の船頭船の如し漁場は急流ならざる深淵を擇み先づ五艘の漁船は網を卸すべき場處を圍みて配置を爲し各々錨を投す爰に於て本船は網の裾を各船に配布すれば一人は錨網を手繰り一人は網を張りつゝ次第に進み全く圓形を爲したるとき一時に水底に沈下せしむ網の沈むや直ち

に各船は本船に就きて手繩を執り本船は龍頭を持ち神速に網を引揚げ裾袋に陥りたる魚を捕獲するなり此漁は使用の速かにして且静肅なるを要す其大漁たる

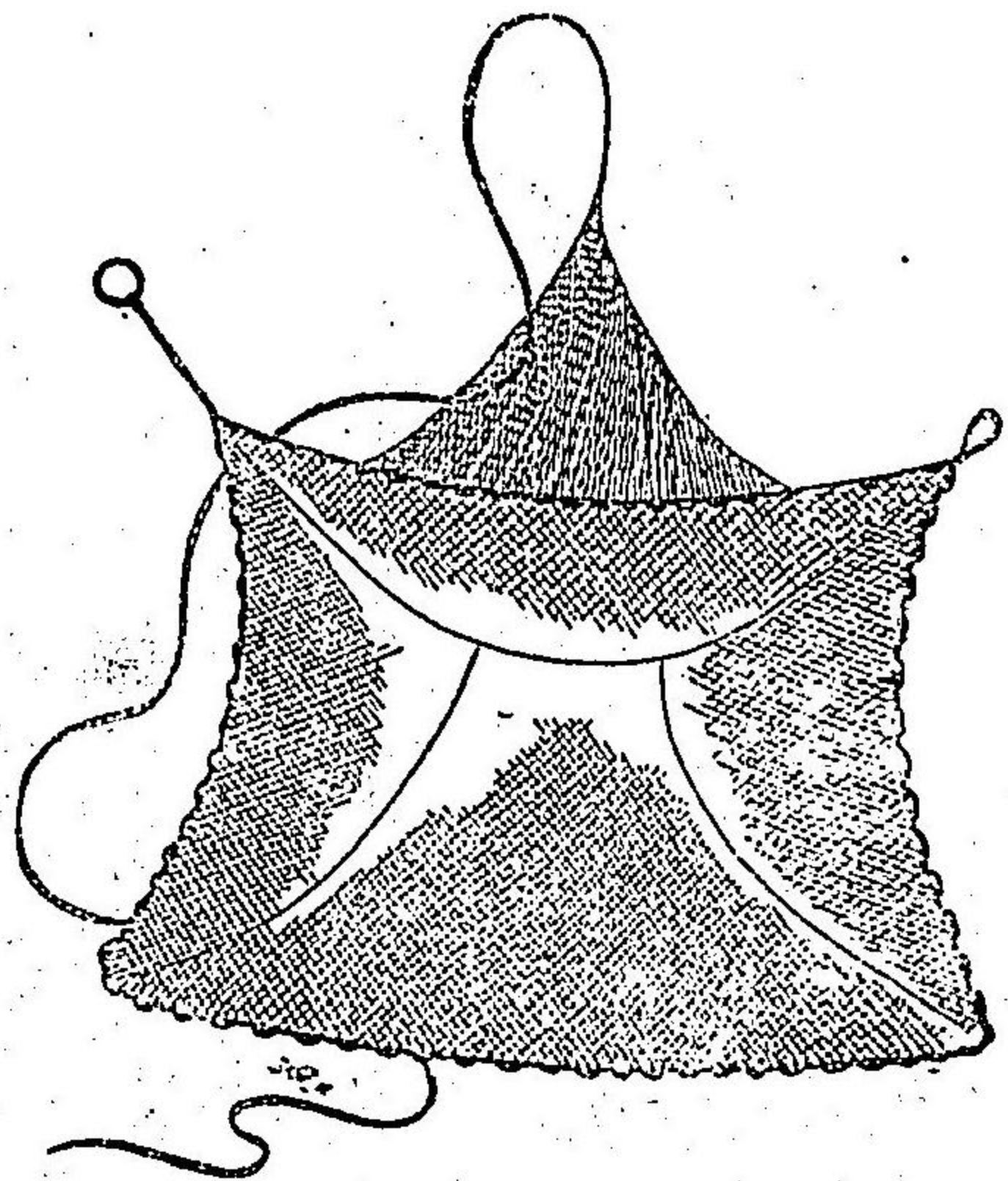
ときは一回に數十貫匁の魚を獲ることあれども若し使用宜しきを得ざるときは一尾をも得ざることありと云ふ

第三 流し網

下總國河川に於て使用する流し網と稱するは拖網の種類にして彼の刺網類中の流し網とは全く異なり方俗一に「バカ曳網」と稱ふ主として鮭鱒及び鯉鱸を漁し猶其他の雜魚をも捕獲する具にして

漁業の季節は鱒鱒は二三月頃鮭は十月頃とし鯉其他の諸魚は敢て季節なしと雖大抵十一月以降冬季は休業す

流し網 圖十三百第



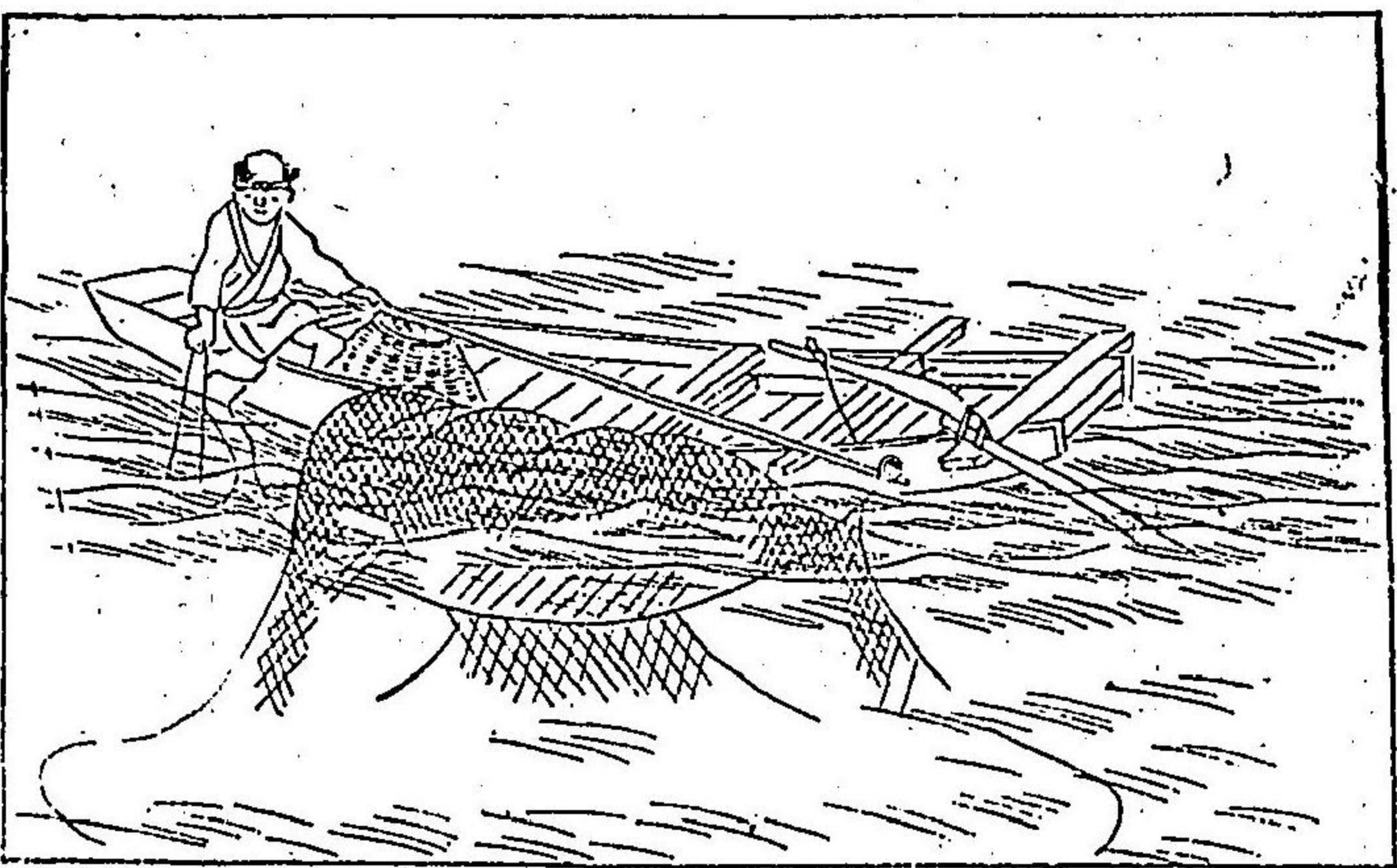
網は太き麻絲の二縷撚を以て作る其構造略は

打網に類似し打網に比すれば稍や大なり長さ一丈五六尺にして網はの周廻は凡十間より十六間許に至る網目は曲尺一尺六寸若くは二尺許の間に三十六目を以て通常とす龍頭には長さ一丈餘の手繩を附し網裾には鐵製にして長さ三寸許の沈子八十四個を附し其總重量凡一貫匁許とす又網裾の一方に一筋の繩を附く之

圖一十三百第

を脈繩と云ふ而して脈繩と反對の位置に又一筋の繩を附け其末端に鐵製の環を附く

漁法は先づ船を河流に横たへ漁者一人船の舳に腰を掛け而して網の半ばを水中に下し残る半ばを船舷に懸け又網裾の一方より出せる脈繩を漁者の右足に懸け他の一方より出せる繩

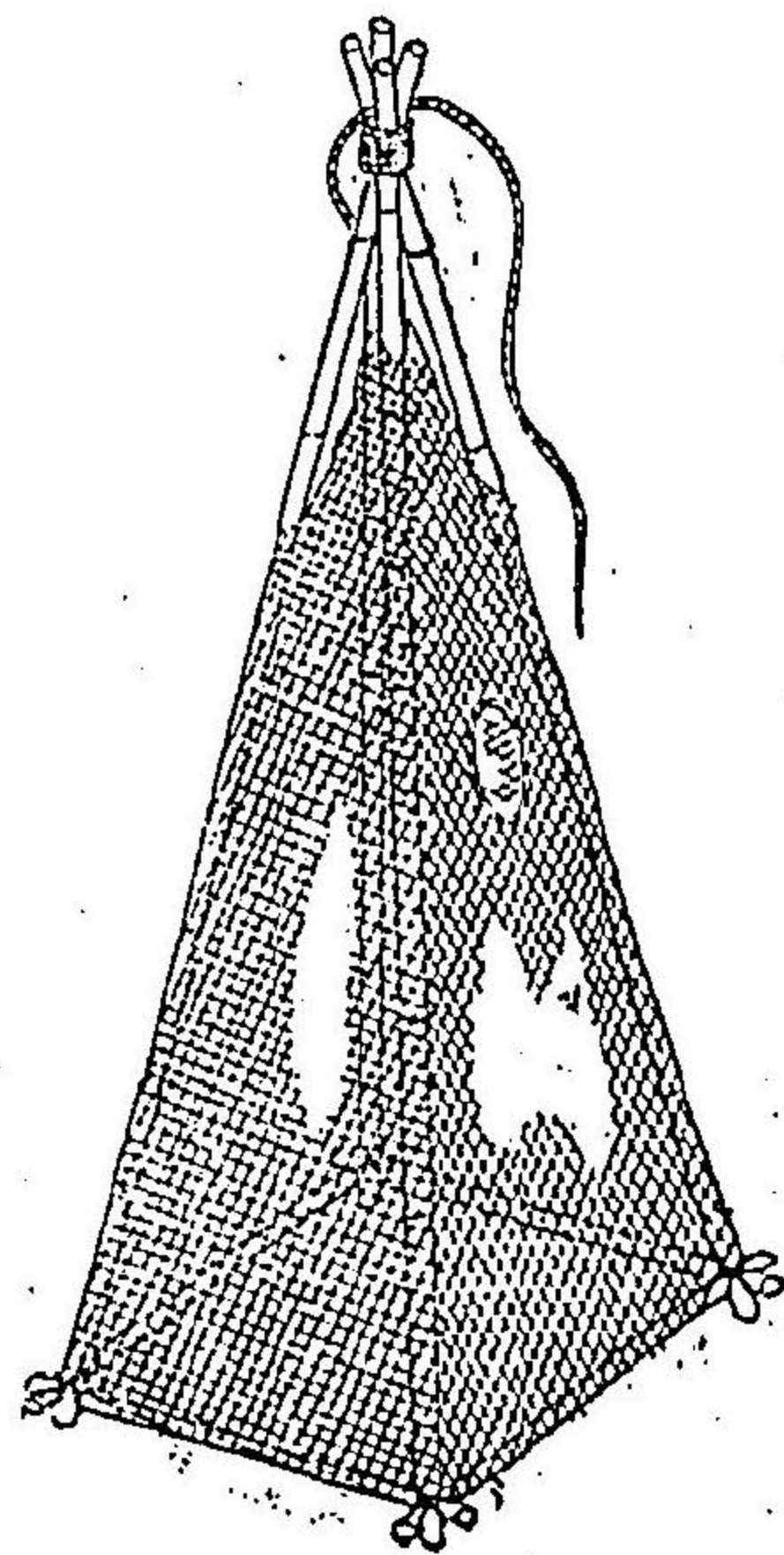


端の鐵環を豫め船の艦舷に備へたる鈎に引懸け右手に握を操り船を平かに流すときは網は沈子の重力と水勢の作用とに依り恰も帆を張りたるが如き狀を爲す斯くて魚の來るを待つに魚下流より浜り來り網に觸るれば忽ち脈繩に感應するを以て漁者は急に棹を取り其頭にて艦舷の鐵環を鈎より脱落せしめ之と齊しく足に懸けたる脈繩を脱すれば船舷に掛けたる部分の片網は忽ち水中に沈下して魚を網裏に包む其狀殆んど打網を下したるに同じ然る後網を引揚げ入りたる魚を捕獲するなり

第四 提燈網

下總國印幡沼、手賀沼、長沼及び利根沿川に於て多く此網を使用す此網に二様あり一を鰻夏網と云ひ一を鯉鮒「ヲシ」網と云ふ
鰻夏網を使用するを方言「ダツ」漁と稱し七月炎暑の候より始め九月中に終る網の形狀は打網に類似し長さ六尺許網裾の直徑三尺七寸許網目は上邊に疎にして中邊は密にし四分許に製す而して之を四本の竹を以て組みたる籠に結び附け網

圖二十三第 鰻夏網



頭に附けたる手繩方言「ナルナワ」を伸縮して以て網の張弛を自在ならしむ

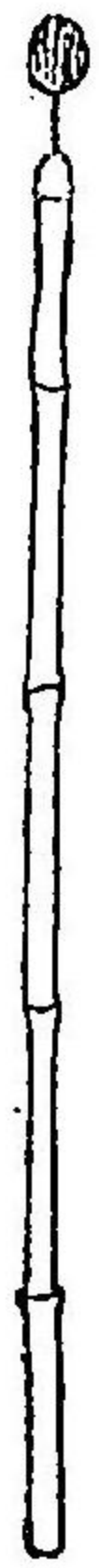
漁法は漁者一人にて或は船上より或は陸上よりし共に便宜に従ひ先づ水中鰻の潜在すべき處を考へ棹を以て水底を衝けば鰻は驚き一旦

泥中より浮み出逃れて更に他の處を覓めて泥中に潜入す潜入すれば必ず水濁るが故に漁者は其水の濁れる處を窺ひ網の手繩を緊縮して網を張り以て上より覆

ひ伏せ然して手繩を伸せば網は弛まりて籠の側面より長く一方へ膨出し殆んど籠の如き狀を爲す此網の上部の一面には豫め孔を設けあるを以て其

圖三十三第

メ ナ ワ



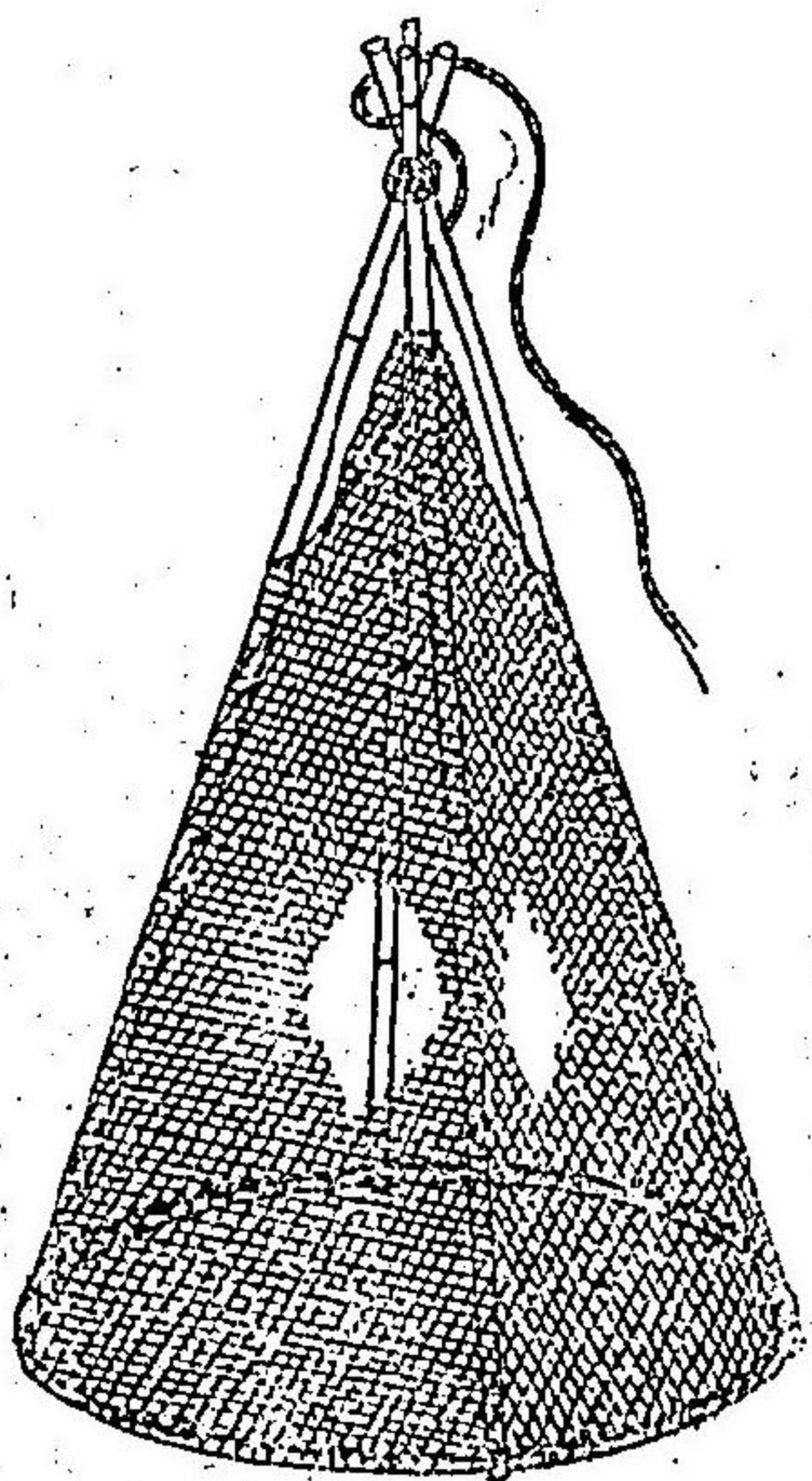
孔より方言「ワナメ」と稱し頭部を薄き鐵板にて作り之に篠竹の柄を付けたるものを挿入れ其頭部を以て鰻の潜める處を衝て逐ひ出し其浮ぶを見れば網の弛みて囊状をなせる處に逐入れ引揚げ之を捕獲するなり

「ラシ」網漁業は一に覆笠漁と稱へ夏月霖雨に際し利根の河水暴漲し濁水兩涯の水草を浸すとき鯉、鮒、鯰等の諸魚淺水の處に來り兼葭の間に栖息し漸く退水するに臨み潞水の水藻中に潜伏するものを捕ふる漁具たり此網の構造も大抵鰻夏網と

同一にして長さは五尺五寸水裾の徑三尺五寸網目は大凡九分とす但た鰻夏網は篋の下口方形なるを多しとすれども「ラシ」網は總て下口を圓形に作れるの差ありとす

此漁法も鰻夏網と略は同一にして初め棹を以て潜める魚を衝くときは魚は驚き小泡を噴出しながら疾走して更に他の處に潜む漁夫は其泡の止まる處を

網シヲ 圖四十三百第



認めて網を下し果して魚の入りたるや否を試み魚の入りたるときは裸體にて水中に入り網を弛めて一方に囊状を爲さしめ此中へ逐入れ捕獲すること亦鰻夏網に同じ

第八節 抄網類

抄網は木竹若くは金屬を以て網の周邊を支持し底は囊状をなさしめ水中の魚を抄ひ揚ぐる具にして網罟中最も構造の簡單なるものなり其網口圓形のものあり三角形のものあり東國にては圓形ものを「タマ」と云ひ地方に依ては「タモ」と云ふ三角形のものは一般「サデ」と云ふを普通とすれとも九州にては圓形のものも共に「タブ」と稱ふ今茲には圓形なるを摺網に作り三角形なるを灑網に作る蓋し「籠」の字義本と網に同じ故に網の字を添ふるは重複に似たりと雖通俗之を用ふるもの多きを以て敢て省かす

此種の網は凡全國中到る處として之を用ひざるはなく其之を用ふるは既に網を以て魚群を圍み繰り寄せたるるとき其魚を抄ひ捕る等副漁具として使用するを多

しとすれども亦之を以て主用漁具とする場合も少からず之を主用漁具とするに際しては種々の名稱を付すと雖今一々名稱に依て種別するの必要なきを以て本編には之を概括して記載し其副漁具として使用するものは都て省略す

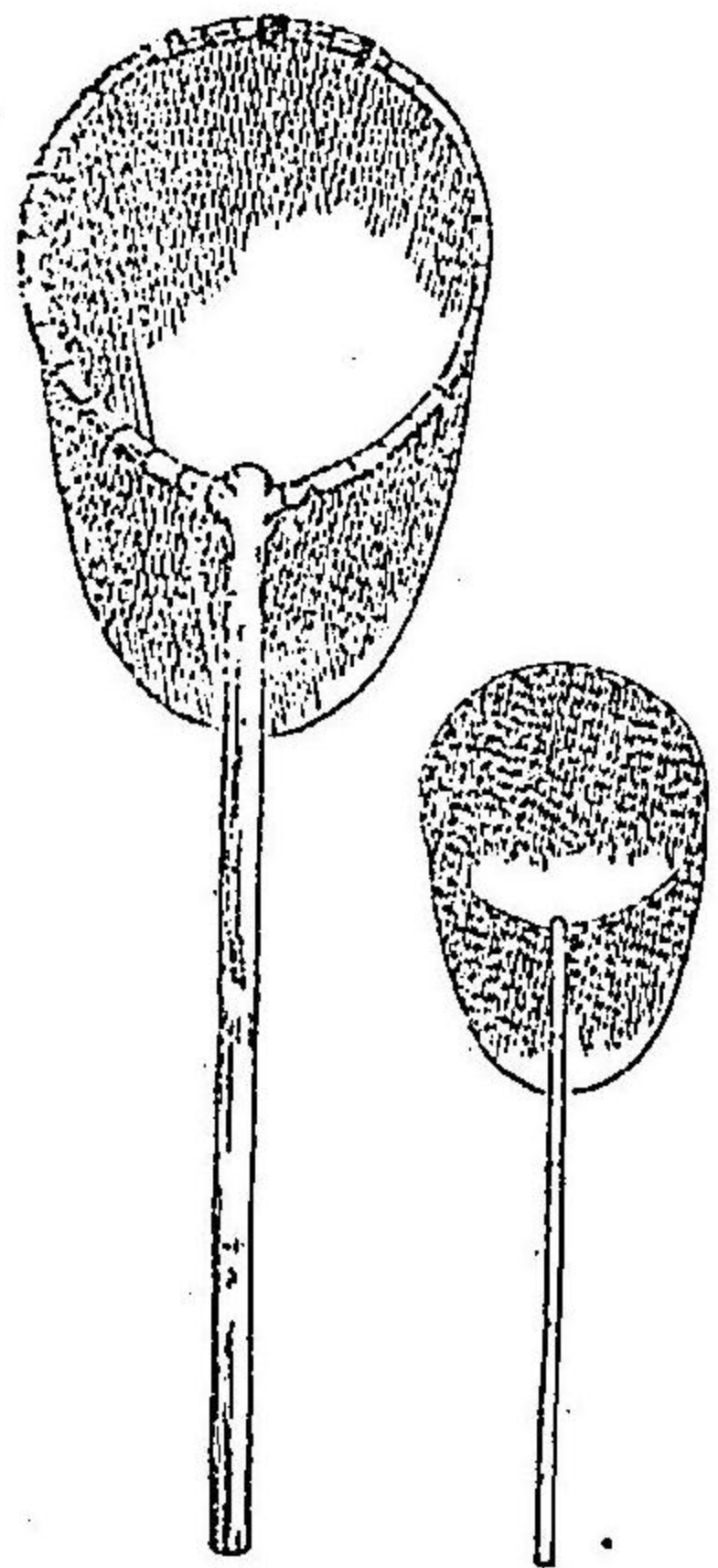
撒網纜網を主用漁具とする場合に於て之を船上より使用するあり陸上よりするあり或は水中を徒行して用ふるあり其使用の方法に於ても豫め柄を備へ其柄を把持して抄ふてふ恰も杓を以て物を汲むが如くするものあり或は香餌を水面に撒布し若くは火を焚て魚を誘聚して後抄ひ捕るあり或は先づ網を下し魚の之に入るを待ち若くは振繩を以て驅逐し網に入らしめて抄ひ捕るあり是稍や敷網と趣を同ふすと雖敷網は之を水底に開張するに全體恰も帛袱フシを攤けたるが如くならしめ運用必しも周邊木竹等の力にのみ頼らされども抄網に在ては必ず周邊附くる所の物に倚て網口を開張せしむるを異なりとす

抄網の運用は柄を以てするを多しとすれども稀には柄を附せずして網を以て上下し抄ひ捕ふるものあり又一種網口に爬瓜を具へたるものあり貝類を抄ひ捕るには多く之を用ひ専ら柄を把て運用するものなり

第一 撒網

撒網の周邊は松樹等の梢抄に左右相對して枝を出せるものを選び其中心を切り

網 撒 圖五十三百第



去り兩枝を撓めて雙方より抱き合せて之を括り輪形となし之に網を結び付け樹幹を柄となすものあり其輪形は多く正圓にすれども中には稍や橢圓なるものあり大洋に出て罾等の類を抄ひ捕るには多く之を用ふ又篠竹若くは籐或は籐蔓の

類若くは鐵線等を以て輪となし別に竹或は木を以て柄を附するあり鮎又は小鰈の類を抄ひ捕ふるには多く之を用ふ今其一を圖し小異あるものは一々圖出せず

一、罾抄網

罾を捕るを目的とする漁具は規模大なる曳網敷網旋網等ありと雖鯉を漁するに

當りては其餌料に供する活鯛の需用多し故に鯉釣の爲め出漁の際には船中必ず此網を備へ海上鯛の群あるを認むれば之を以て抄ひ捕るなり之を張摺ハツタテと稱す其大小地方に依て差異あれども今安房國に於て使用するものに就て之を記さんには周邊は前に記せる如く松木にて作り徑凡三尺二三寸網は麻絲を用ひ綱目上端に一二寸下るに従ひ漸く細かくし藁底に近づけば四分目とす深さ四尺五寸許にし檜樹皮の澁液にて染む柄の長さ八尺許とす之を使用するには魚群を認め柄を把て網を挿入れ抄ひ揚るまでにて別段なる手術なしと雖方言餌床と稱し大魚の鯛を食はんとして四方より取圍むに際し鯛は恐れて偏に水面にのみ浮び群團し他に散逸せざるを以て斯かる場合には一抄して鯛は網に滿ち數抄に及ぶことあり抄ひ捕りたる鯛は直ちに船底に設けある籠中に放ち生活せしめ以て鯉の釣餌に供するなり

二、豊後國南海部郡に於ける鯛抄網

豊後國南海部郡宮野浦邊にては鯛の外尙ほ小鯖、鯉等を捕るに専用するあり其網の構造は綱口の徑三尺許藁の深さ三尺五寸乃至四尺にして綱目五百許を立て周

邊は徑三分許の鐵製の輪を附し杉木を柄となす其網は淡藍色に染めて用ふ之を使用する季節は鯛、鯉は三月より五月まで鯉は八月より九月の間にして沖合に魚群の寄り來るを見れば長さ三間位の小船に漁夫二三人乗組み其處に至り鯛、鯉等の肉を敲き潰したるものを海面に撒布し其下層に網を入れ魚の餌を食はんとして集まるを下より抄ひ揚げ捕獲するなり

三、仔鯛抄網

駿河國有渡郡村松村邊に於ては冬季十二月頃より翌年三月中旬までの間仔鯛を捕るに用ふ其構造は大約前記安房の鯛張網に同じく綱口の徑二尺七八寸綱目五分位藁の深さ三尺位に作る其漁法は西風烈しく波濤山を爲すの時を機とし暗夜に乗じ一艘の漁船に漁夫四五人乗組み網二張乃至三張を備へ二人は櫓を漕き廻りて魚の所在を索め一人は篝火を焚きて海面を照らし他は摺網を執て魚の集まるを待つ「コハダ」は火光の水面を照すを見て忽ち紛拏聚集するを以て更に一層火勢を熾にすれば魚は愈々激刺として水面に跳躍するに至る爰に於て網を下し幾回にても抄ひ捕るなり而して此間魚走るときは船も走せながら抄ひ魚止まれば

船も亦止まり凡そ緩急其度を失せざるを要す然れども幾はくもなくして魚は散逸するものなるを以て此時篝火を滅し待つこと少時にして再び火を照せば魚復た群集すること前の如くなるを以て同一の手續を以て抄ひ捕るなり此漁法を「仔鱸火振り」と稱す

四、玉筋魚抄網

越前國丹生郡米ノ浦に於ては玉筋魚を漁するに抄網を用ふ漁業の季節は凡三月中旬より四月下旬までにして網の構造は周邊は松木を用ふること前記安房の鯉張網の如く網口の徑上下は四尺左右は三尺許にして略橢圓形を爲し罟は凡て麻絲の緞子織にして深さ五尺許に作る漁法は海岸を距ること一里内外の沖合に方言「アゲドリ」と稱する水禽の群聚飛翔するを見るときは是玉筋魚を驅て追啄する象なるを以て小船に漁夫三人乗にて漕出し玉筋魚の驅逐せられて岸に向て寄り來るを撒網を挿入れ抄ひ捕るなり又時としては大魚の爲め圍繞せらるゝを抄ふことあり前記鱒の餌床に同じ

五、鯉鱒網

豊後國北海部郡に於ける鯉鱒網は九月十月の候土佐海或は日向海の沖合まで特に出漁し使用するものにして其構造は周邊は鐵製小指大の輪を用ひ其直徑三尺五六寸網目は五寸間に七節罟の深さ凡六尺柄は檜にて手輕に製す長さ凡八九尺とす

漁法は船一艘に漁夫三四人乗にて出漁し魚群を認むれば先づ網を海中に下し而して豫め罟を煮て十分に細碎せるものを船中に貯へ置き之を其傍に投下す魚は此餌を食はんとして集り來るも投し居る餌の爲め海水の濁れるを以て網あるを覺り得ず知らず識らず網中に陥るとき漁夫は持ちたる網の柄を急に捻るが如く爲して網口を塞がしめ之を引揚げ捕獲す其機會間髪を容れざるものにて頗る熟練を要す故に多くの漁業中能く其術を得たる者は概ね十中の一に過ぎずと云ふ

六、鮎抄網

鮎を抄ふに撒網を用ふるは所在爲す所にして大低春季小鮎の河川に沂るときに於てするを多しとす其構造は概ね周邊は藤を以てし或は眞鍮線を用ふ大小齊しからずと雖大なるは徑二尺餘小なるは一尺内外柄は多くは篠竹を以てし長さ三

四尺乃至五六尺網は細き麻絲を用ひ網目五寸間二十五節位より魚の長するに及んで漸く疎目なるを用ふ中には生絲にて製するものあり之を使用するには河流の淺瀬に石を積み其上に踞し或は便宜の處あれば岸上より網を下し鮎の昇り來りて網に上るを見て最も神速に抄ひ揚ぐるなり此魚は一見殆んど兒戯に類すれども鮎の多産の地に於て盛に浜る季節には熟練者は網を擧ぐるに終日空網なく非常の漁利を得ることあり

七、紀伊國有田郡に於ける鮎抄網

紀伊國有田郡有田川の上流なる松原村に鮎瀧と稱する處あり兩岸より巨岩横出し有田川の激流之に盛められ中央の缺處より瀑布の勢をなして流下す其高さ凡八尺幅一丈餘あり春夏の際鮎河川に浜り來り瀑に阻められて其下の淵に群聚し尙ほ上流に上らんとして一躍水を離れて飛跳す其疾きこと電閃に似たり此時漁夫其巖石間に立ち攔網を以て抄ひ捕る其技巧妙一回に數百尾を得世に松原の鮎瀧と稱し頗る奇觀とし故さらに遊覽に赴くものあり斯かる漁場なるを以て攔網の構造前者に比すれば稍や大にして堅牢なり柄の長さも七尺に至る漁季は六月

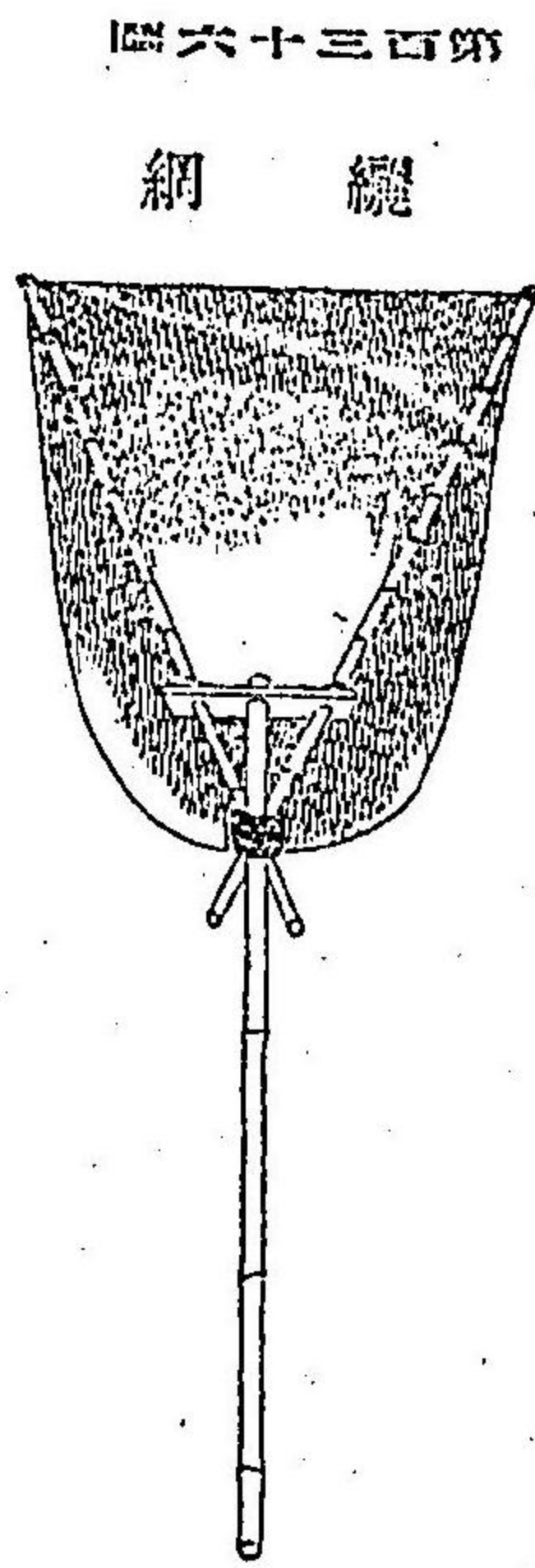
より九月まで四ヶ月間に至るを以て網目の細大一ならず初期は四分目より起り末期六分目に至る又此瀑下に於て「モドリ籠」と云ふを使用す籠具の部に於て詳記すへし

八、紅蟲捕

大和國添下郡山町及び添上郡大安寺村邊にては専ら金魚を飼養するを以て其餌料に供する紅蟲を捕るの具なり紅蟲とは「アカコ」と稱し關東にて「ミゲンコ」と稱する小蟲の種類なり其捕具の製攔網に異ならずと雖獲甚だ長し網口の徑一尺八寸にして周邊は鐵線を用ふ囊は三段に分ち網口より下七尺五寸の間大和木綿の太織を用ひ其下を五尺底を六尺とし共に上等の天竺木綿を用ふ其口の方濶く底に至て漸く殺く柄は竹にして長さ四間許あり囊の底は綴ぢす之を使用するに際し繩にて括り野中の泥溝等「アカコ」の發生せる處を見て之を下し網口を傾け泥の上層を横さまに摩するが如くにして「アカコ」を抄ひ入れ幾回も斯の如くし終に底の繩を解き別器に水を盛りたる中へ泥と共に移し入れ淘汰して其「アカコ」のみを採收するなり

第二 總網

總網は大体の形状は皆同じと雖小局部に至ては種々の差異ありて一々圖出し難きのみならず之を解説するも亦以て煩に堪へざれば茲に普通多く在る所のもの一圖を掲げて餘は皆省略す而して普通のものとし雖二本の竹を兩側とし手元の方を板に貫き末端を交叉し之を柄と共に繩にて締括し其頭の開きたる方は繩にて張り此繩と兩側の竹とに網を結び付くるあり或は兩側若くは柄も共に木を用ふるあり或は頭の一面も亦竹若くは木を用ふるあり柄の甚だ短きあり



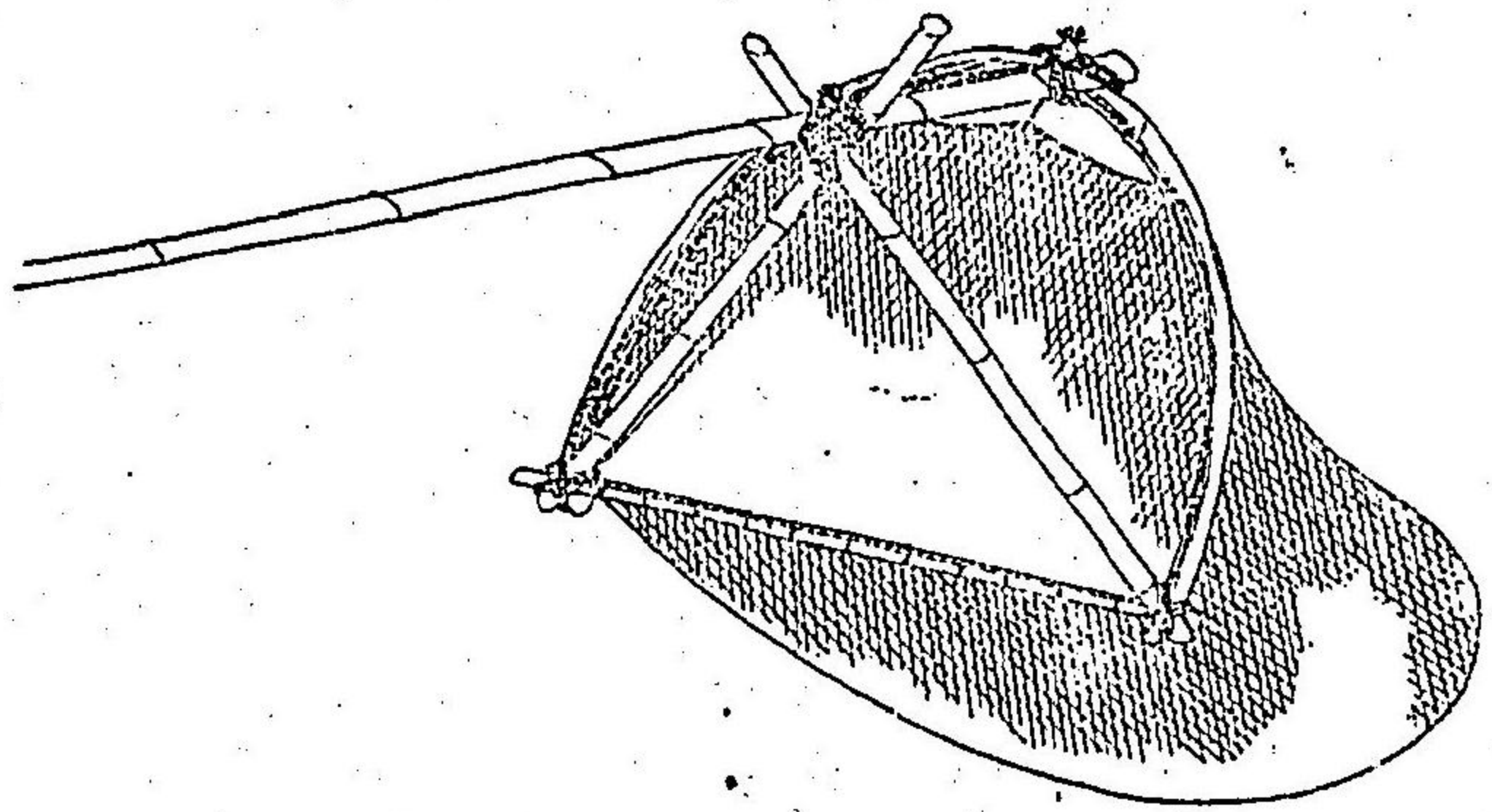
全く柄を闕如し兩側の竹若くは木を把持して使用するあり又網底の深淺も一樣ならず要するに其捕らんと欲する所の物と漁場の景況等に應ずるものなり其中専ら一物を捕獲する目的のものは別に標記すべしと雖今先づ何種の魚を論せず在るに隨て捕る所の普

通總の網に就て其梗概を記す

雜魚を捕るの總網は河川の水淺き處若くは流水蘆葦叢生の間或は溝梁又は池沼又は田圃間の用水路等に於て農民の餘暇に之を爲し或は雜業者の兼業とし或は霖雨新たに霽るゝの後の如きは遊漁に之を爲す者あり此漁を以て專業とする者は稀にして或は之あるも老幼輩の纔に生計を支ふるに過ぎず故に季節に定まりなく又晝夜の別なし網の大きさも小なるものは兩側の竹木の長さ三尺内外より大なるものは五六尺に至る其網は緞子を用ふるあり或は極めて細目の麻絲網を用ふるあり之を使用するに魚の影を認めて網を下し抄ひ捕るあり先づ網を上流又は下流に向て沈め置き魚の其上に昇るとき急に舉げて抄ひ捕るあり又木挺を以て潜在せる魚を驅て網中に入れ捕獲するあり是等は概ね單獨にて使用す又鵜繩を曳き魚を網中に驅入るゝものあり此の如きは其鵜繩を曳くもの一人或は二人を要す大抵水中を徒行し若くは陸上より使用すれども時としては小船に棹さし使用することあり

又一種搔網と稱するあり嚴冬互寒の際藻中に潜匿せる雜魚を搔き出し網に陥れ

網 搔 四七十三百四



て捕ふるものなり其形普通のものとして少く異なる所あるを以て茲に圖出す之を使用するには河岸よりするあり水中を涉りて爲すものあり漁場の形勢に由て同じからず此漁は場處に依ては雜魚の捕獲多く貧民頼て以て生計を支持するに足るものあり
肥後國他田郡中には多く引タグと云ふを使用す其形狀前者搔網に同じと雖下縁の竹に鐵釘十八本許打込みたるを異なりとす此具は海に使用するものにして退潮の際深さ二三尺位の處を徒行し海底を搔き廻し靴底鱗鰯等の類を捕獲するなり

一、白魚網

白魚を漁する抄ひ網は撻網あり又纏網あり阿

波國吉野川の流末なる板野郡各村に使用するものは網口正圓形の撻網にして周邊は松木を用ふること前記安房の鯉張撻に同じ口徑三尺餘並は緞子製にして深さ三尺許とす季節は陰曆十二月初旬より翌年二月下旬までにして漁法は小船一艘に漁夫一人乗にて暗夜に乘じ篝火を舷外に焚き魚の火下に集まれる頃ほひ網を水中に入れ柄を船舷に支へ抄ひ揚げ捕獲するなり

甲 備前地方に於ける白魚網

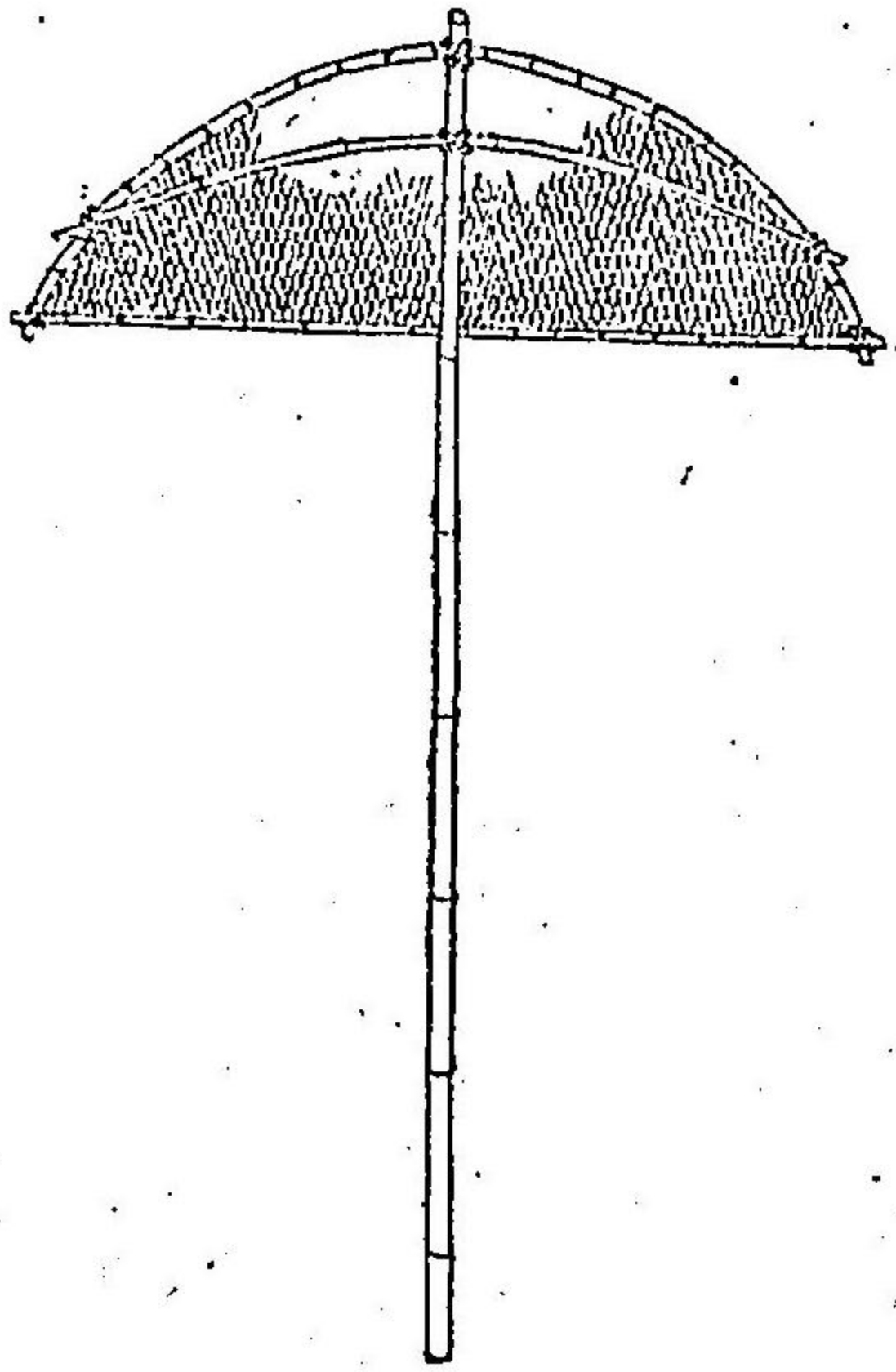
備前國に於ける白魚網は纏網にして其形狀は前に圖せる普通の纏網に異なる所なく亦緞子を用ふ漁法は前者阿波國のものと同様に差ふ所なし

乙 豊後地方に於ける白魚網

豊後地方に於ける白魚漁は敷網を以てするものあれども亦抄網をも用ふ即ち纏網にして其製は布を用ふ而して網の兩側の竹の末端を交叉して括り合せたるのみにして柄を附せず漁法は前者に異なりて漁者二人を要し徒行して水中に入り一人は網を下流に構へて待ち一人は上流より河岸に沿ひ嚇し竹を以て水中を撃ち魚を逐ひ下し其網に入るを見て引揚げ捕獲するなり

二 公魚網

網漁公 四百三十八



出雲國出雲郡三部市村内斐伊川の支流の宍道湖に注がんとする處に於て使用する公魚網は九竹二本を屈撓して圖の如く結び合せ更に之を一本の劈竹の兩端に結び附け九竹の柄を添へ之に網を結び附けたるもの網口即ち劈竹の長さ六尺網の深さ五寸網は麻絲製四分目柄の

長さ四間とす漁業の季節は四月より五月中にして晝間の業とす漁法は漁夫一人にて陸上に在り柄を把て網を水中に下し魚の入來るを見て引揚げ捕獲するなり

三 蝦抄網

蝦抄網には襪網あり纏網あり又前記出雲國の襪網の形狀に類似せるものあり襪網は蝦の種類に依り緞子を用ふるあり麻絲網を用ふるもあれども紀伊國和歌山

近傍に於て川蝦を捕るもの、如きは概ね生絲を以て製す川蝦にも數種あるを以て網目に細大あり大抵四分より二分目に至る而して目の細大に應し口徑を異にす大者は二尺餘小者は一尺内外皆周邊は篠若くは眞鍮線を以て正圓形に作る冬季の外は大抵漁せざるなく概ね陸上に在り柄を把て抄ひ捕るものなり

甲、下總國利根川沿岸の蝦漁

下總國利根川沿岸及び印旛沼、手賀沼、長沼等に於ける蝦網は主として襪蝦を漁するものにして漁期は大約二月より四月まで及び十一月の間とす其網は則纏網にして大小あり大者は兩側の竹の長さ凡九尺網口の幅凡六尺筮の深さ凡五尺、サイミ布を以て作り長さ九尺許の竹の柄を附く是専ら船上より使用するものあり小者は側竹の長さ凡四尺網口の幅凡二尺五寸筮の深さ凡二尺亦、サイミ布を以て作り柄の長さ一丈許とす是専ら陸上より使用するものなり漁法は篠又は柴等を束ねたるものを水中に浸し置くこと兩三日すれば蝦其處に群集するを以て漁者其期を測り場處の淺深に應じ或は船を出し或は陸上より網を下し抄ひ捕るなり又一種前曳網と云ふあり亦纏網にして筮は櫻樹の枝を以て作り大さ略ほ前者の

陸上より使用するものに同じ麻絲製極細密の網地を用ひ囊の深さ二尺三寸許とし長さ二間半許の竹の柄を附く是糠鰻より稍や大なる小鰻を捕るものにして之を使用するには陸上より水中に下し或は向より手元へ或は横に搔き寄するか如くにして抄ひ捕るなり

乙 陸前地方に於ける鰻抄網

陸前地方の池沼に於て川鰻を漁するに用ふるものは則前記出雲國の公魚網の形に類せるものにして囊口を張る横竹は長さ八尺とし之に長さ一丈一尺の竹二本を屈撓して半月状をなさしめ横竹の兩端に結び附け其二本の竹は中央にて二尺許の距離を保たしめ之に麻絲網を結び附く網目は二分或は三分乃至四分のものあり唯柄を附けずして長さ二十間許の網を附け之を船上より下し其綱を繰りて網を船に舉げ入たる鰻を捕獲するなり故に稍や線網類に似たる所あれども別に沈子を附けず且多く船を運用して水底を引曳することを爲さず全く抄ひ揚るなり時としては淺處に於ては柄を添へて手にて使用することあり

丙 北海道渡島地方に於ける鰻抄網

北海道渡島地方に用ふる鰻網は略は前者陸前國のものに同じと雖唯網口の横竹に換ふるに一條の麻繩を以てし且長さ丈餘の木柄を附け總體稍や小形なり之を使用するには河流の淺處纔に腰を没する處に至り本柄を把り網口を開て水中に

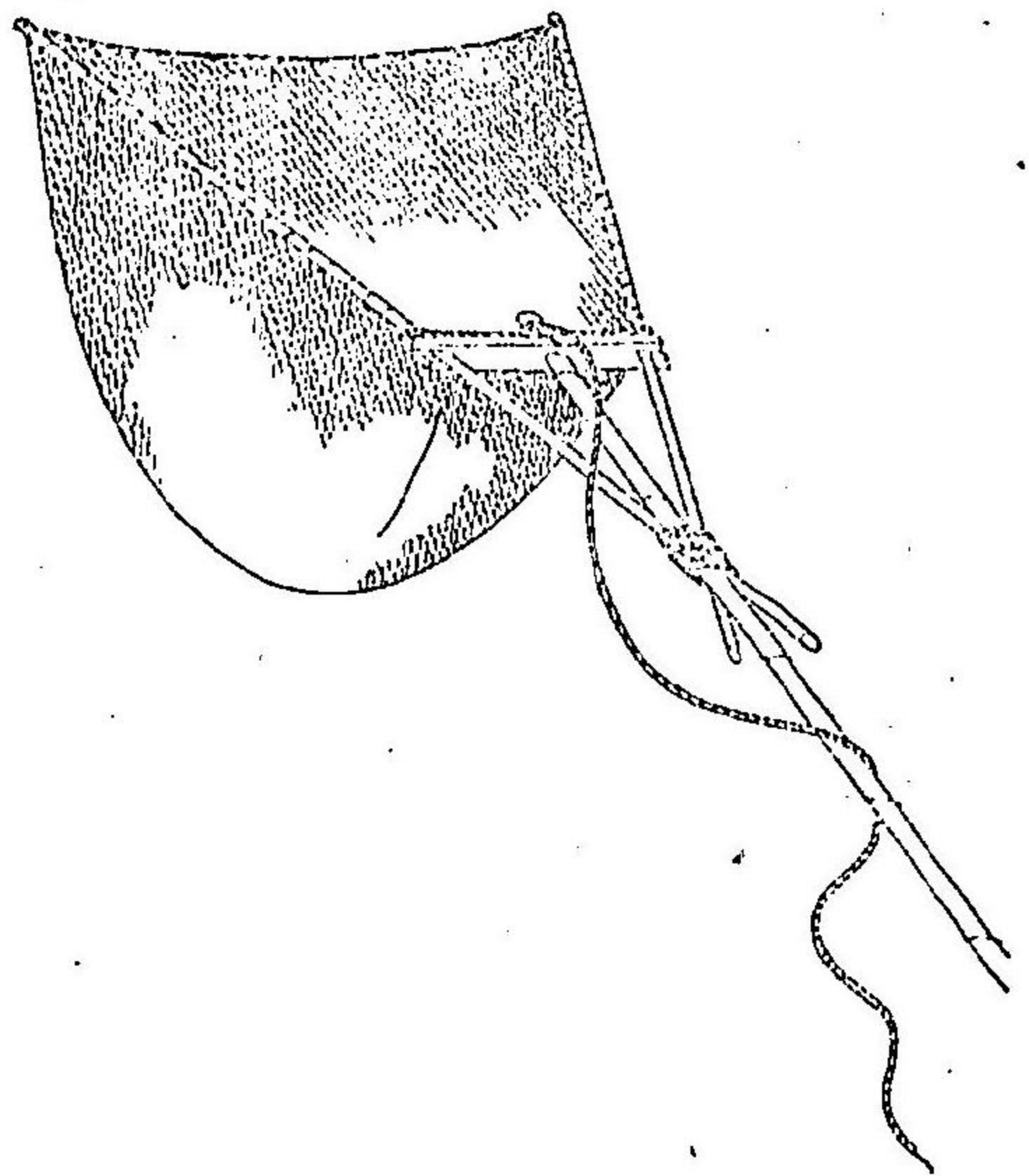
沈め上流より鰻其他の小魚を逐ひ下し網に陥らしめて抄ひ捕るなり

四 手押網

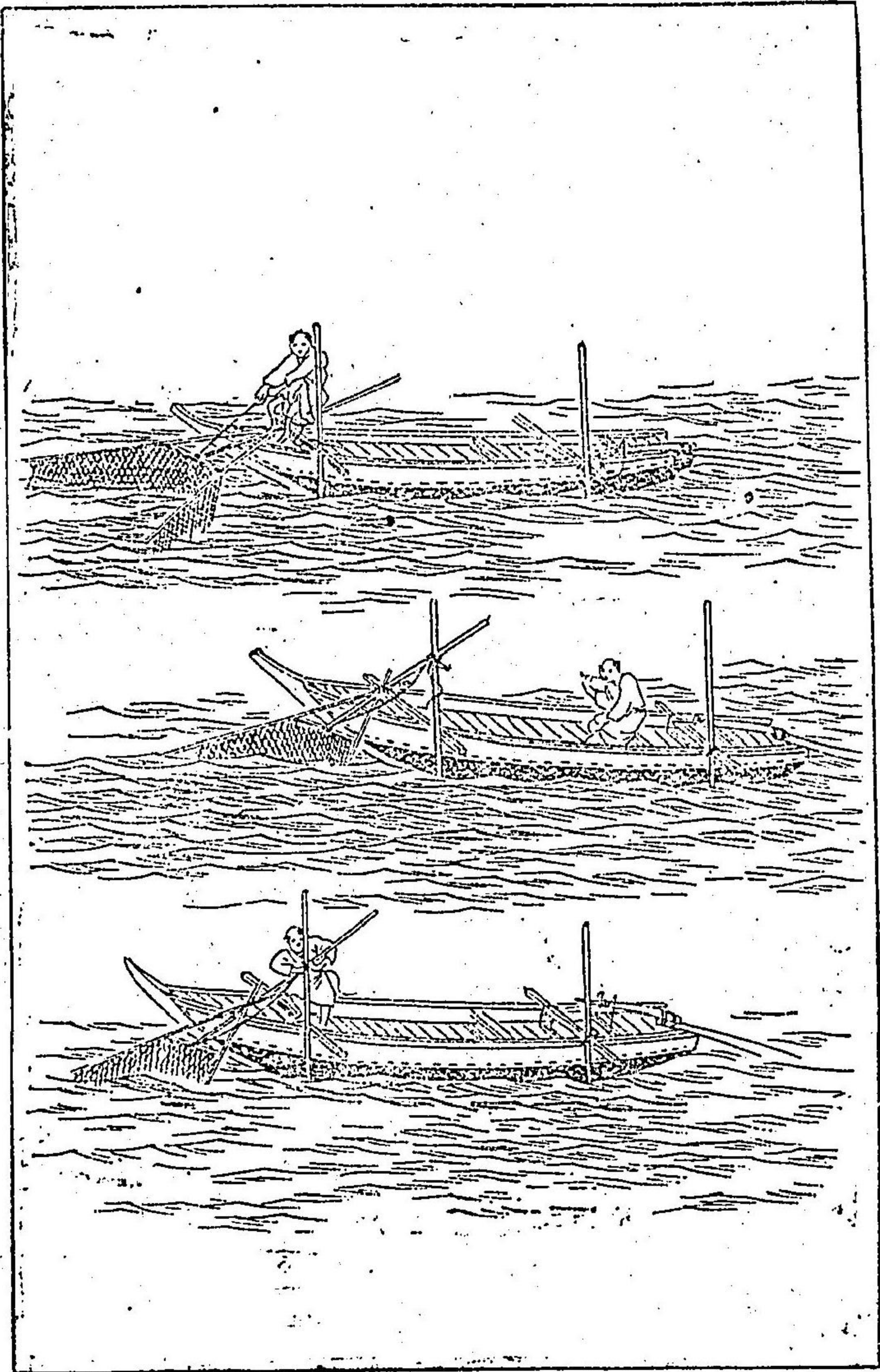
肥前國南北高來兩郡の沿海及び有明海に使用する手押網は専ら泥海に用ふる大形の纏網にして摺鰻に製すべき小鰻を捕獲するものなり漁業は四季不絶之を爲す

網の構造は麻絲製二分目網口の幅二十尺網尻の幅八尺丈け二十尺左右端は杉の丸材周圍一尺五寸長さ

網押手 四百三十九



圖用使網押手 四百四第



二十七尺のもの、一端を交叉したるに結び付け其手元の方には長さ八尺の横棒を架し之に網尻を結び付く又網口と網尻の縁には麻三つ絢周圍五分の縁繩を通し其端を左右の縁木に結び付け網尻の縁の中央には一條の苧小繩二十尺を付け網を舉ぐるとき之を引き蝦の遁逃を防ぐに供す

漁法は小船一艘に漁夫一人若くは二人乗組み沿海要處に漕出し檜木の杙長さ凡四尋周圍一尺許のもの二本を海中に立突て之に船を繋ぎ潮流に向ひ網を下し網尻の柄を船の中央に立たる棒に括り付け凡一時間を経て棒の結びを解き網の柄を兩足にて踏み抑ゆれば網先き海面を離れ蝦は網の中央に集まるを方言打取と稱する搦網を以て抄ひ捕るなり

五 方流網

石見國那賀郡三隅川、周布川、濱田川等に於て鮎、鰯、其他雜魚を漁する具にして季節は六月頃より十月頃までとす網は纏網に同じく麻絲にて四分目位に製し四方には麻製の縁繩を附く左右兩側は長さ一丈三尺の丸竹に結び竹の手元の方を交叉し之に長三尺五寸の檜の丸木を横ふ又別に鵜繩あり苧にて長さ三丈五尺に作り

凡三尺距離毎に鷗鷺又は鵞の羽を挿し或は紺染の木綿裂れを結び付け小石の沈子五個を附く

漁法は漁夫三人にて降雨の後河水濁りたる時淺瀬の水勢甚だ急ならざる處を擇み一人は網を水中に刺入れ上流に向ひ他の二人は凡十間許の上流より鵞繩を張り水上を曳き透ふて網の方に至り己に接近したるとき網を舉げ入りたる魚を捕ふるなり漁獲多きときは一回にして十四五尾を得ることあり又平水の時暗夜に乗じ漁夫二人にて一人は網を持ち前の如く上流に向て立ち一人は凡十間許河上より炬火を振り水中を下げれば魚は驚愕し下りて網裏に入るとき網を舉げ捕獲することあり方言之を火振りと云ふ

六 羽根川網

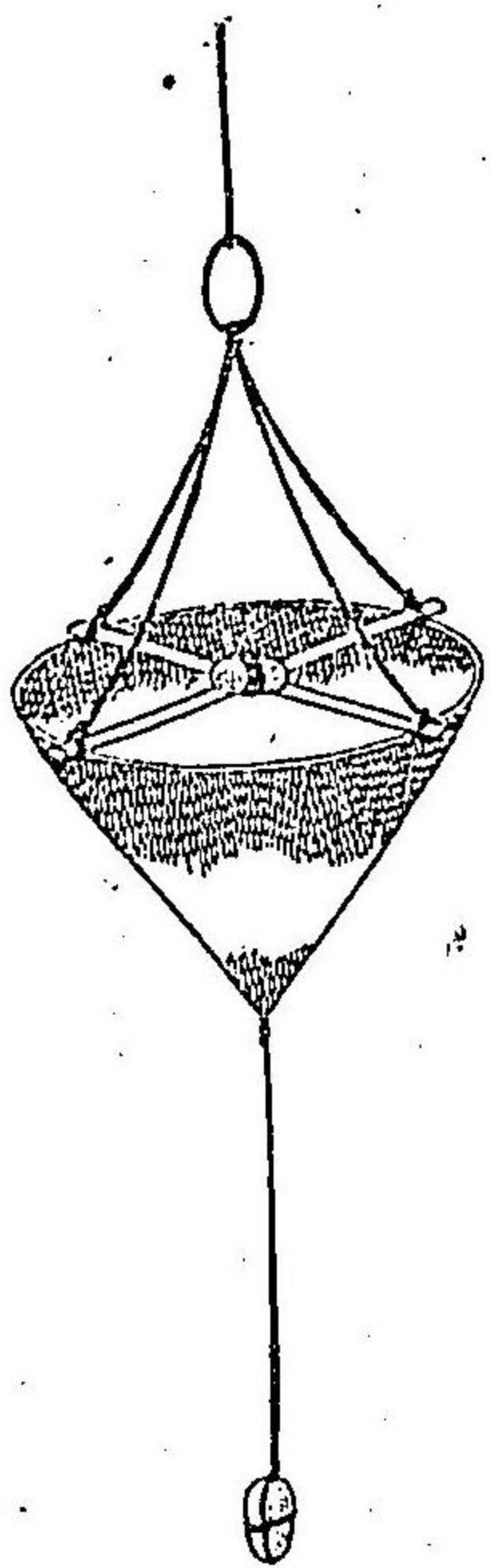
因幡國智頭川八束川千代川等に於て使用する羽根川網は主として鮎を捕ふる具にして網の構造及び使用法に至るまで前者石見國の方流網と多く異なる處なく殆んど同物異稱とも謂ふ可く唯僅の少差あるのみ漁業の季節も亦相同し今其少差ある要點を掲ぐれば鵞繩は藁繩にて製し長さ三十尋とす而して之に鳥羽を挿

むは普通なれども近來は多く柳の葉附の枝を以てす是柳葉は裏面白色を帯ぶるを以て水中を曳くときは閃々光りあり以て魚を驚かし易きが故なり漁法は漁夫五人にて其二人は鵞繩を曳き三人は川の下流の中間に在て各自網を持ち魚の鵞繩に逐はれ來りて水上に飛躍するものを抄ひ捕るに在り此漁は専ら晝間にのみ之を爲す

七 鰻網

出雲石見の沿海に於て鰻を漁するに用ふる一種の抄網あり其構造は麻絲を以て

四百一十四圖 鰻網



圖の如く圓錐形に編み之に口輪を附け下端へ重量一貫五百匁の石を吊下り網口の徑は六尺とし此に十字形の檜木を架し四端

に各長六尺の麻繩を結び其末端を集めて一筋の元網に繋ぎ附く元網は麻にて作り長さ二百五十尺とす

漁業の季節は六月より九月までにして専ら晝間の業とす漁場は海岸を距ること三里内外深さ二百尺より二百五十尺の處とす
漁法は漁夫二人小船に乗り網口の十字架の處に水母を括り附けて餌となし之を海中に垂下し元網を船舷に繋ぎ置けば魚は水母を食はんとして十字架の處に集まる元來鰮の性たる物に驚けば水底に潜入するものなるを以て其網上に集りたる機を測り急に一動すれば魚輒ち獲底に入る爰に於て元網を手繰り引揚ぐれば容易に捕獲し得るなり其多きときは一舉して百尾を得ることあり

網罟漁業終

明治四十四年五月十三日印刷

明治四十四年五月十五日發行

農商務省水産局

東京市芝區松本町二十三番地

印刷人 野田千太郎

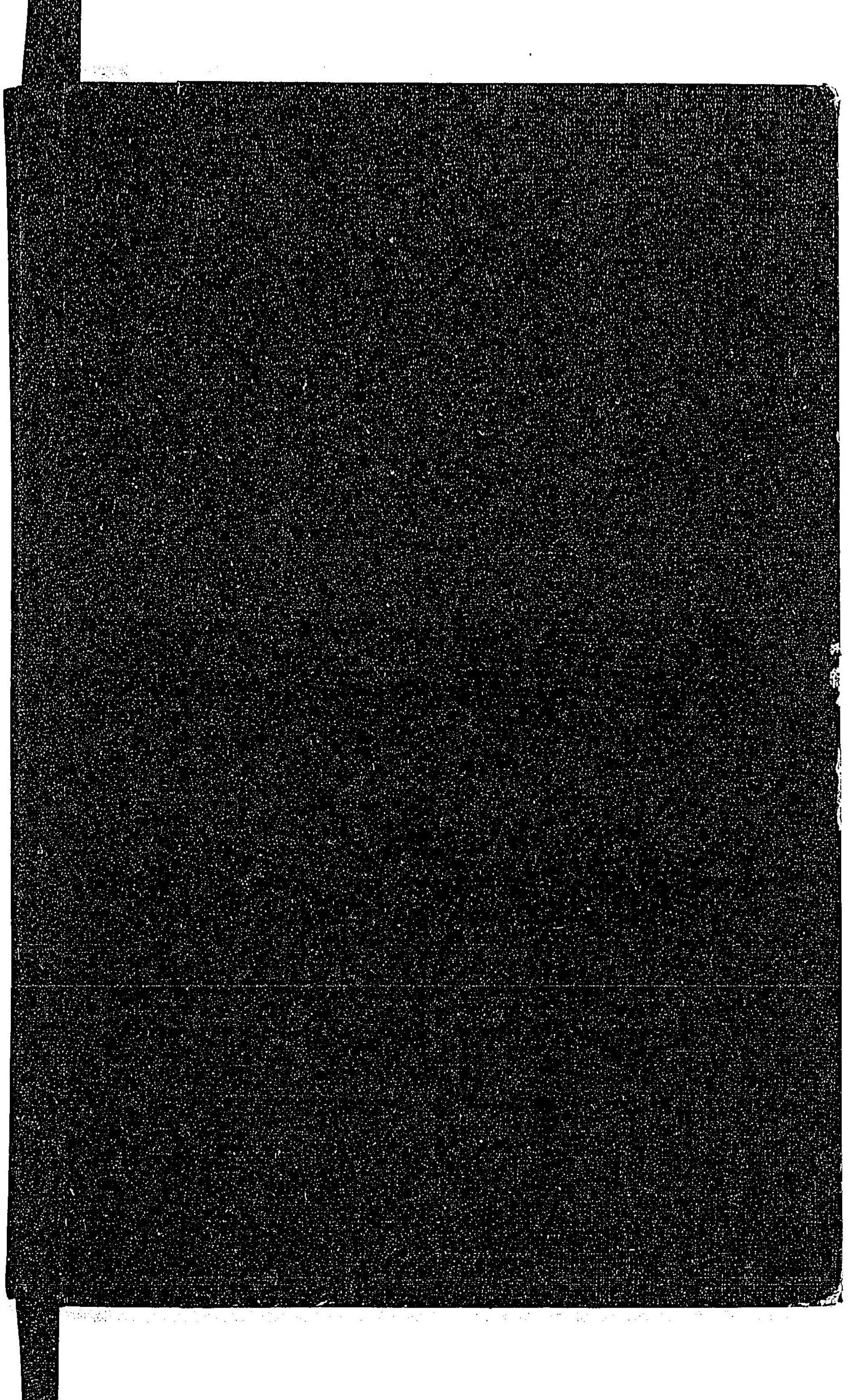
東京市芝區三田四國町二番地

印刷所 會社三田印刷所

8184
7

17

327
216



327

216

27. 2. 12